

# 石垣 遺跡

—常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に係る発掘調査報告書II—



SK28 土坑 出土遺物

平成26年3月

宮城県山元町教育委員会

東日本高速道路株式会社 東北支社 仙台工事事務所



## 序 文

山元町は古くから身近に豊かな海と山を擁し、人々は恵まれた自然の中で生活を営んできました。その足跡は埋蔵文化財として、町内各地に散在しております。埋蔵文化財は、文献などには記録されていない地域の歴史を解明できる貴重な歴史資料であります。これらの遺跡は、先人が残した生活の証でもあり、かけがえのない文化遺産として将来の人々に継承するとともに、現在の生活の中において積極的に活用していくことが、私たちに課せられた責務であると考えております。

しかし、土地利用と深く結びつきの強い埋蔵文化財は、絶えず開発事業によって破壊・消滅の危機にさらされております。このため、当教育委員会としては、開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

今回の石垣遺跡の調査は、常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に際し、事業主との協議・調整に基づき、平成23年度に当教育委員会が実施したものであります。今回の発掘によって、縄文時代、古墳時代、平安時代～近世の人々の生活の跡が確認され、山元町の歴史を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、この調査成果を収録したもので、地域における歴史解明の資料として広く活用され、埋蔵文化財の保護と理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力をいただいた関係機関の方々、また、直接調査にあたられました皆様に心から感謝申し上げます。

平成26年3月

山元町教育委員会  
教育長 森 憲一



## 例　　言

1. 本書は、宮城県亘理郡山元町山寺字石垣地内に所在する石垣遺跡（第1次調査）の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査は、常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に伴う事前調査として行ったものである。発掘調査・整理作業・報告書作成に係る一連の業務は、平成22～25年度に、調査原因となった事業主体者である東日本高速道路株式会社東北支社仙台工事事務所から業務委託を受けた山元町が実施した。
3. 本遺跡の発掘調査と整理作業は、山元町教育委員会が主体となり、文化財担当部局のある生涯学習課が担当した。石垣遺跡の現地発掘調査・報告書作成業務を行った平成23～25年度の職員体制は下記のとおりである。

教　育　長	森　憲一
課　　長	渡邊 隆弘（H23）、齋藤 三郎（H24・25）
班　　長	武田 賢一
主　事	山田 隆博
主　事	丹野 修太（任期付職員）
調査補助員	藤田 祐、渡邊 理伊知（H23・24）、佐伯 奈弓
発掘作業員	飯川 幸男、石井 進、伊藤 清、伊藤 成夫、岩佐 吉則、太田 千佳子、大村 敏雄、小野 正文、小野 和喜子、後藤 征郎、佐藤 明、佐藤 正博、桜井 政敏、閑沼 邦彦、西山 ゆり子、立谷 重晴、富樫 治男、南條 義博、早坂ひろみ、深澤 久美、増川 悠記、三浦 長、三浦 則子、桃井 謙人、森 忠男、遊佐 豊美、矢吹 共子、横山 真、渡部 修
整理作業員	梅村 健智子、及川 博子、斎藤 則彦、西山 ゆり子、永谷 佳歩美、高橋 みゆき、萩本 厚子、橋本 礼子、橋元 和子、深澤 久美、三浦 則子、水本 恵子、矢吹 共子、渡邊 洋子

4. 発掘調査、報告書作成に際して、以下の方々からご指導・ご助言・ご協力を賜った。  
天野 順陽・初鹿野 博之（宮城県教育庁文化財保護課）、日下 和寿（白石市教育委員会）、佐藤 敏幸（東松島市教育委員会）、佐藤 洋（仙台市教育委員会）、鈴木 朋子（亘理町教育委員会）、森 秀之（恵庭市教育委員会）、草場 啓一・小鹿野 亮（筑紫野市教育委員会）、  
宮城県教育庁文化財保護課、東日本高速道路株式会社東北支社仙台工事事務所（敬称略）
5. 本遺跡の平成23年度に実施した航空写真撮影は（株）日本特殊撮影、基準点設置は高野弘幸土地家屋調査士事務所に委託して行った。
6. 石器の石材については、筆者が肉眼観察を行った。
7. 陶磁器の産地については、仙台市教育委員会の佐藤洋氏にご教示いただいた。
8. 現地発掘調査について、指揮・監督を山田・丹野・藤田・渡邊が担当し、現地作業を発掘作業員、断面図の作成は早坂・深澤・三浦（則）・矢吹が行った。
9. 本書の整理・作成にあたり、遺物の洗浄・注記・接合・復元・拓本は、佐伯が中心となり整理作業員がこれを助けた。遺物抽出については、土器類は山田、石器は藤田が担当した。  
遺物の実測図作成は山田、実測図のトレースは佐伯が行った。また、遺物の一部は、（株）シン技術コンサルに委託し、実測図を作成した。遺物写真撮影・加工は（株）アートプロフィールに委託した。
10. 遺構整理については、全般を藤田・山田が担当し、断面図トレース、データ入力・校正を佐伯、図面修正・データ照合を佐伯・渡邊（洋）・及川が行った。

10. 本書で使用した測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。調査区の測量原点は以下のとおりである。方位は座標北を表している。なお、今回使用した座標値は、東日本大震災前の値を基本としており、震災後のX・Y座標の補正データは( )内の数値のとおりである。

IG001 : X=-226014.594 (-226015.2658) Y=3073.040 (3076.0896) Z=29.110m(標高値)  
L659 : X=-226097.376 (-226098.0472) Y=3056.428 (3059.4766) Z=32.160m  
L660 : X=-226080.529 (-226081.2002) Y=3054.988 (3058.0366) Z=31.630m  
L668 : X=-226081.180 (-226081.8509) Y=3025.362 (3028.4097) Z=32.094m  
L672 : X=-226069.054 (-226069.7251) Y=3046.372 (3049.4206) Z=31.506m  
L675 : X=-226037.406 (-226038.0774) Y=3045.054 (3048.1025) Z=30.410m  
R673 : X=-226052.554 (-226053.2258) Y=3098.560 (3101.6100) Z=29.158m  
R674 : X=-226035.306 (-226035.9777) Y=3045.028 (3048.0766) Z=28.767m

※補正データの計算は、地盤変動に伴う座標値補正を行う座標補正ソフトウェア「PatchJGDtoukutaiheiyouki2011.par」による。

11. 本書の第2図は、土地分類基本調査における1/50,000地形分類図「角田」をもとに作成したものである。  
12. 本書の第3図は、国土交通省国土地理院発行の1/50,000の地形図を複製して作成したものである。  
13. 本書で使用した土色の記述にあたっては、「新版標準土色帳2010年版」(小山・竹原1973)を参照した。  
14. 本書で使用した遺構略号は、「発掘調査の手引き」(文化庁文化財部記念物課2010)を参考にし、以下の通りとした。  
S I: 竪穴住居跡・竪穴状遺構、S B: 掘立柱建物跡、S A: 柱穴列跡、S K: 土坑、S E: 井戸跡、  
P: 柱穴・小穴  
15. 出土遺物の登録番号は、以下の通りとした。  
A: 織文土器、C: 土師器、E: 須恵器、I: 陶器、J: 磁器、K: 石器  
16. 遺構・遺物実測図の主な縮尺は下記のとおりで、それぞれ図中にスケールを付して示した。  
調査区全体図: 1/500、調査区部分図: 1/200、竪穴住居跡: 1/40・50・60、  
掘立柱建物跡・柱穴列跡: 1/100・1/200、土坑・井戸跡: 1/40、断面図: 1/40・50・60、土器類: 1/3  
17. 遺物実測図において、土器類の実測図については、須恵器断面を黒塗り、その他の土器を白抜きとした。  
また、黒色処理が施された土師器については、スクリーントーンにより示した。  
18. 本書の出土遺物のうち、土師器については、成形にロクロを使用したものをロクロ成形・ロクロ土師器、  
ロクロを使用していないものを非ロクロ成形と呼ぶことにした。  
19. 基本層序は、ローマ数字とアルファベット小文字を組み合わせて表記した。  
20. 標高は、水準点を基にした海拔高度で示した。  
21. 遺構内の傾斜の部分は「↑↑↑」、後世の搅乱は「搅」と表記し、その傾斜部は「↖↖↖」で示した。  
22. その他、発掘調査の方法等については、第III章2にまとめた。  
23. 本書の執筆・編集については、整理を担当した調査員の協議を経て、第I章～第III章3(1)・第IV章1(1)  
～(4)・3(5)は山田、第III章1・2・3(2)～(5)・第IV章1(5)・2・3(1)～(4)・4は藤田が執筆し、図版の  
版組みは山田・藤田、報告書編集は山田が行った。  
24. 本遺跡の調査成果については、遺跡調査成果発表会等での内容の一部を公開しているが、これらと本書  
の内容が異なる場合は、本書がこれらに優先する。  
25. 発掘調査に伴う出土遺物および写真等の調査記録資料については、山元町教育委員会が保管している。

## 調査要項

遺跡名：石垣（いしがき）遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 14069 遺跡記号 IG）

所在地：宮城県亘理郡山元町山寺字石垣

調査原因：常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に係る事前調査

調査期間：確認調査 平成 23(2011)年 8月 29 日～9月 1 日

事前調査 平成 23(2011)年 9月 5 日～11月 1 日

調査面積：約 4,750 m<sup>2</sup>（対象面積約 10,000 m<sup>2</sup>）

（A区：約 1,730 m<sup>2</sup>、B区：約 3,020 m<sup>2</sup>）

調査主体：山元町教育委員会

調査担当：山元町教育委員会生涯学習課

調査員：山田 隆博【山元町教育委員会 生涯学習課 主事】

丹野 修太【山元町教育委員会 生涯学習課 主事（任期付職員）】

藤田 祐【山元町教育委員会 生涯学習課 臨時職員（調査補助員）】

渡邊 理伊知【山元町教育委員会 生涯学習課 臨時職員（調査補助員）】

調査協力：宮城県教育庁文化財保護課、東日本高速道路株式会社東北支社仙台工事事務所



石垣遺跡 発掘調査地点 遠景（西から）

2011.11.1撮影

# 目 次

## 序文

### 例言・調査要項

### 目次・挿図目次・表目次

第Ⅰ章 遺跡の概要 .....	1
1. 遺跡の位置と地理的環境 .....	1
2. 周辺の遺跡 .....	1
第Ⅱ章 調査に至る経緯と調査の経過 .....	7
1. 常磐自動車道(県境～山元間)建設工事計画と発掘調査に至る経緯 .....	7
(1) 調査に至る経緯 .....	7
①路線内の埋蔵文化財の取り扱い決定までの経緯     ②文化財保護法に基づく手続き	
(2) 施工路線内の発掘調査の経過 .....	8
2. 石垣遺跡発掘調査の経過 .....	8
第Ⅲ章 発掘調査 .....	11
1. 基本順序 .....	11
2. 発掘調査の方法 .....	13
3. 発見された遺構と遺物 .....	14
(1) 壺穴住居跡・壺穴状遺構 .....	24
(2) 挖立柱建物跡・柱穴列跡 .....	57
1) 挖立柱建物跡の認定方法     2) A 区建物跡     3) B 区建物跡     4) 柱穴列跡	
(3) 土坑・井戸跡 .....	97
(4) ピット .....	118
(5) 遺構検出面、排土等出土遺物 .....	122
第Ⅳ章 総括 .....	123
1. 出土遺物の特徴と時期 .....	123
(1) 繩文土器 .....	124
(2) 土師器 .....	124
(3) 須恵器 .....	130
(4) 陶器・磁器 .....	130
(5) 石器 .....	130
2. 検出した遺構の特徴と時期 .....	131
(1) 出土遺物・遺構の重複関係等からみた各遺構の時期 .....	131
1) 壺穴住居跡・壺穴状遺構     2) SB 1～37 挖立柱建物跡・柱穴列跡     3) 土坑     4) 井戸跡	
5) ピット .....	133
(2) まとめ .....	133
3. 各時代の遺構の特徴と変遷 .....	134
(1) 繩文時代の遺構 .....	134
(2) 古墳時代の遺構 .....	134
(3) 平安時代の遺構 .....	134
(4) 近世の遺構 .....	138
(5) 石垣遺跡周辺の集落の様相について .....	141
4. まとめ .....	142

## 引用・参考文献

## 報告書抄録

## 挿 図 目 次

第 1 図 山元町の位置	1
第 2 図 石垣遺跡及び山元町内の地形分類図	2
第 3 図 山元町内の遺跡分布と常磐自動車道建設関連遺跡	5
第 4 図 調査区の位置	9
第 5 図 石垣遺跡基本層序	12
第 6 図 石垣遺跡 A・B 区主要遺構配置図	15・16
第 7 図 石垣遺跡調査区全景 (1)	17
第 8 図 石垣遺跡調査区全景 (2)	18
第 9 図 石垣遺跡遺構配置図 (1)	19
第 10 図 石垣遺跡遺構配置図 (2)	20
第 11 図 石垣遺跡遺構配置図 (3)	21
第 12 図 石垣遺跡遺構配置図 (4)	22
第 13 図 石垣遺跡遺構配置図 (5)	23
第 14 図 S 1 1 壁穴状遺構	25
第 15 図 S 1 2 壁穴状遺構 (1)	27
第 16 図 S 1 2 壁穴状遺構 (2)	28
第 17 図 S 1 3 壁穴状遺構 (1)	30
第 18 図 S 1 3 壁穴状遺構 (2)	31
第 19 国 S 1 4 壁穴住居跡 (1)	33
第 20 国 S 1 4 壁穴住居跡 (2)	34
第 21 国 S 1 4 壁穴住居跡 (3)	35
第 22 国 S 1 5 壁穴住居跡 (1)	37
第 23 国 S 1 5 壁穴住居跡 (2)	38
第 24 国 S 1 5 壁穴住居跡 (3)	39
第 25 国 S 1 6 壁穴状遺構	41
第 26 国 S 1 7 壁穴住居跡 (1)	43
第 27 国 S 1 7 壁穴住居跡 (2)	44
第 28 国 S 1 8 壁穴住居跡 (1)	46
第 29 国 S 1 8 壁穴住居跡 (2)	47
第 30 国 S 1 8 壁穴住居跡 (3)	48
第 31 国 S 1 8 壁穴住居跡 (4)	49
第 32 国 S 1 9 壁穴住居跡 (1)	51
第 33 国 S 1 9 壁穴住居跡 (2)	52
第 34 国 S 1 9 壁穴住居跡 (3)	53
第 35 国 S 1 9 壁穴住居跡 (4)	54
第 36 国 S 1 9 壁穴住居跡 (5)	55
第 37 国 S 1 9 壁穴住居跡 (6)	56
第 38 国 石垣遺跡 A・B 区掘立柱建物跡完層状況	57
第 39 国 石垣遺跡掘立柱建物跡・柱穴跡遺構配置図	58
第 40 国 S B 1 掘立柱建物跡平面・断面図	63
第 41 国 S B 2 掘立柱建物跡平面・断面図	63
第 42 国 S B 3 掘立柱建物跡平面・断面図	64
第 43 国 S B 4 掘立柱建物跡平面・断面図	64
第 44 国 S B 5 掘立柱建物跡平面・断面図	65
第 45 国 S B 6 掘立柱建物跡平面・断面図	65
第 46 国 S B 7 掘立柱建物跡平面・断面図	65
第 47 国 S B 1 ~ 7 掘立柱建物跡 (1)	66
第 48 国 S B 1 ~ 7 掘立柱建物跡 (2)	67
第 49 国 S B 8 掘立柱建物跡平面・断面図	68
第 50 国 S B 9 掘立柱建物跡平面・断面図	68
第 51 国 S B 1 0 掘立柱建物跡平面・断面図	69
第 52 国 S B 1 1 掘立柱建物跡平面・断面図	69
第 53 国 S B 1 2 掘立柱建物跡平面・断面図	69
第 54 国 S B 8 ~ 1 2 掘立柱建物跡 (1)	70
第 55 国 S B 8 ~ 1 2 掘立柱建物跡 (2)	71
第 56 国 S B 1 3 掘立柱建物跡平面・断面図	72
第 57 国 S B 1 4 掘立柱建物跡平面・断面図	72
第 58 国 S B 1 5 掘立柱建物跡平面・断面図	73
第 59 国 S B 1 6 掘立柱建物跡平面・断面図	73
第 60 国 S B 1 7 掘立柱建物跡平面・断面図	73
第 61 国 S B 1 3 ~ 1 8 掘立柱建物跡 (1)	74
第 62 国 S B 1 3 ~ 1 6 掘立柱建物跡 (2)	75
第 63 国 S B 1 8 掘立柱建物跡平面・断面図	76
第 64 国 S B 1 9 掘立柱建物跡平面・断面図	76
第 65 国 S B 2 0 掘立柱建物跡平面・断面図	77
第 66 国 S B 2 1 掘立柱建物跡平面・断面図	77
第 67 国 S B 2 2 掘立柱建物跡平面・断面図	77
第 68 国 S B 2 3 掘立柱建物跡平面・断面図	78
第 69 国 S B 2 4 掘立柱建物跡平面・断面図	78
第 70 国 S B 19 ~ 2 4 掘立柱建物跡 (1)	79
第 71 国 S B 17 ~ 2 4 掘立柱建物跡 (2)	80
第 72 国 S B 2 5 掘立柱建物跡平面・断面図	81
第 73 国 S B 2 6 掘立柱建物跡平面・断面図	81
第 74 国 S B 2 7 掘立柱建物跡平面・断面図	82
第 75 国 S B 2 8 掘立柱建物跡平面・断面図	82
第 76 国 S B 2 9 掘立柱建物跡平面・断面図	83
第 77 国 S B 3 0 掘立柱建物跡平面・断面図	83
第 78 国 S B 3 1 掘立柱建物跡平面・断面図	84
第 79 国 S B 3 2 掘立柱建物跡平面・断面図	84
第 80 国 S B 3 2 · P 4 0 6 出土遺物	84
第 81 国 S B 3 3 掘立柱建物跡平面・断面図	85
第 82 国 S B 3 4 掘立柱建物跡平面・断面図	85
第 83 国 S B 2 5 ~ 3 3 掘立柱建物跡 (1)	86
第 84 国 S B 2 5 ~ 3 3 掘立柱建物跡 (2)	87
第 85 国 S B 3 5 掘立柱建物跡平面・断面図	88
第 86 国 S B 3 6 掘立柱建物跡平面・断面図	88
第 87 国 S B 3 7 掘立柱建物跡平面・断面図	88
第 88 国 S B 3 4 · 3 5 掘立柱建物跡	89
第 89 国 S B 3 6 · 3 7 掘立柱建物跡	90
第 90 国 S B 3 4 ~ 3 7 掘立柱建物跡	91
第 91 国 S A 1 柱穴列跡平面・断面図	92
第 92 国 S A 2 柱穴列跡平面・断面図	92
第 93 国 S A 3 柱穴列跡平面・断面図	93
第 94 国 S A 4 柱穴列跡平面・断面図	93
第 95 国 S A 1 ~ 4 柱穴列跡 (1)	95
第 96 国 S A 1 ~ 4 柱穴列跡 (2)	96
第 97 国 SK 1 ~ 2・3 土坑	98
第 98 国 SK 4 土坑	99

## 表 目 次

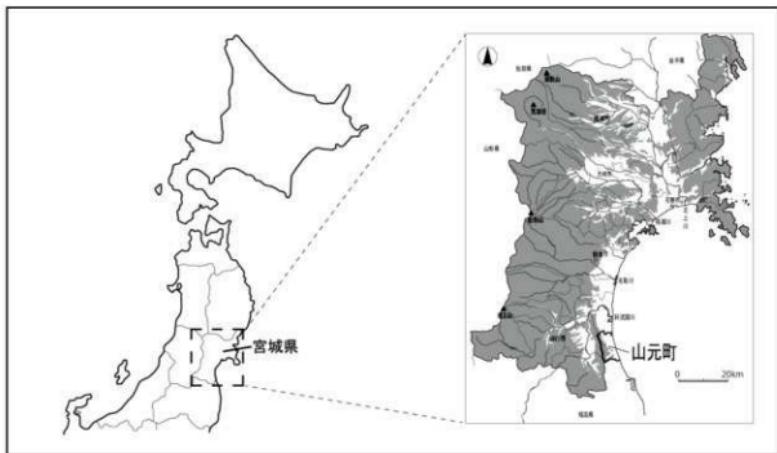
第9回 SK5土坑(1) .....	99	第1表 常磐自動車道建設計画に伴う開通道路・地点一覧 .....	6
第100回 SK5土坑(2) .....	100	第2表 その他の山元町内の遺跡一覧 .....	6
第101回 SK6土坑 .....	100	第3表 S11堅穴造構床面施設一覧 .....	24
第102回 SK7土坑 .....	101	第4表 S12堅穴造構床面施設一覧 .....	26
第103回 SK8土坑 .....	101	第5表 S13堅穴造構床面施設一覧 .....	29
第104回 SK9土坑 .....	101	第6表 S14堅穴住居跡床面施設一覧 .....	32
第105回 SK10土坑 .....	102	第7表 S15堅穴住居跡床面施設一覧 .....	36
第106回 SK11土坑 .....	102	第8表 S17堅穴住居跡床面施設一覧 .....	42
第107回 SK12土坑 .....	103	第9表 S18堅穴住居跡床面施設一覧 .....	45
第108回 SK13土坑 .....	103	第10表 S19堅穴住居跡床面施設一覧 .....	50
第109回 SK14土坑 .....	104	第11表 石垣遺跡 振立柱建物跡 属性表 SB1~37 .....	59
第110回 SK15土坑 .....	104	第12~1表 石垣遺跡 振立柱建物跡 柱穴跡 属性表 (1) SB1~15 .....	60
第111回 SK16土坑 .....	105	第12~2表 石垣遺跡 振立柱建物跡 柱穴跡 属性表 (2) SB16~27 .....	61
第112回 SK17土坑 .....	105	第12~3表 石垣遺跡 振立柱建物跡 柱穴跡 属性表 (3) SB28~37 .....	62
第113回 SK18土坑 .....	106	第13表 石垣遺跡 柱穴跡 属性表 SA1~4 .....	94
第114回 SK19土坑 .....	106	第14表 石垣遺跡 柱穴跡 柱穴跡 属性表 SA1~4 .....	94
第115回 SK20・21・22土坑 .....	107	第15表 石垣遺跡 井戸跡 属性表 .....	97
第116回 SK23土坑 .....	108	第16~1表 石垣遺跡 ピット 属性表 (1) .....	119
第117回 SK24土坑 .....	108	第16~2表 石垣遺跡 ピット 属性表 (2) .....	120
第118回 SK25土坑 .....	109	第16~3表 石垣遺跡 ピット 属性表 (3) .....	121
第119回 SK26土坑 .....	109	第17表 石垣遺跡 遺物出土状況 .....	123
第120回 SK27土坑 .....	110	第18表 塩釜式土器 年代対照表 .....	127
第121回 SK28土坑(1) .....	110	第19表 石垣遺跡 主要遺構の所属時期 .....	133
第122回 SK28土坑(2) .....	111	第20表 石垣遺跡平安時代堅穴住居跡・堅穴造構 遺構観察表 .....	136
第123回 SK28土坑(3) .....	112	第21表 石垣遺跡振立柱建物跡観察表 .....	138
第124回 SK28土坑(4) .....	113		
第125回 SK28土坑(5) .....	114		
第126回 SK29・30土坑 .....	115		
第127回 SK31・32土坑 .....	116		
第128回 SE1井戸跡 .....	117		
第129回 その他の出土遺物 一様出面・排土 .....	122		
第130回 石垣遺跡出土織文土器 .....	124		
第131回 石垣遺跡出土土師器(非クロ成形) .....	125		
第132回 石垣遺跡出土土師器(ロクロ成形)・須恵器 .....	126		
第133回 石垣遺跡SK28出土土師器坏の特徴 .....	129		
第134回 多賀城跡周辺の土師器坏類の器高／口径比 .....	129		
第135回 石垣遺跡主要遺構の重複関係と所属時期 .....	133		
第136回 石垣遺跡織文時代・古墳時代の遺構 .....	135		
第137回 石垣遺跡平安時代の遺構 .....	137		
第138回 石垣遺跡近世の遺構 .....	140		
第139回 石垣遺跡と周辺の遺跡 .....	141		

## 第I章 遺跡の概要

### 1. 遺跡の位置と地理的環境

宮城県亘理郡山元町は、仙台市から南南東に約40km離れた県南東部に位置し、地理的には仙台平野南端にあたる(第1図)。町の西側は福島県から延びる阿武隈山地の支脈、東側は太平洋で、これらの中には沖積地が広がっている。町内を北上する阿武隈山地は、標高200~300mの山地・丘陵地で、北端では阿武隈川と接する。丘陵縁辺は、阿武隈山地に源を発する小河川によって開析された櫛状の谷地形となり、谷底には谷中平野が形成されている。丘陵の東側には、沖積地を挟んで海岸線に平行した約7列の浜堤が認められる。

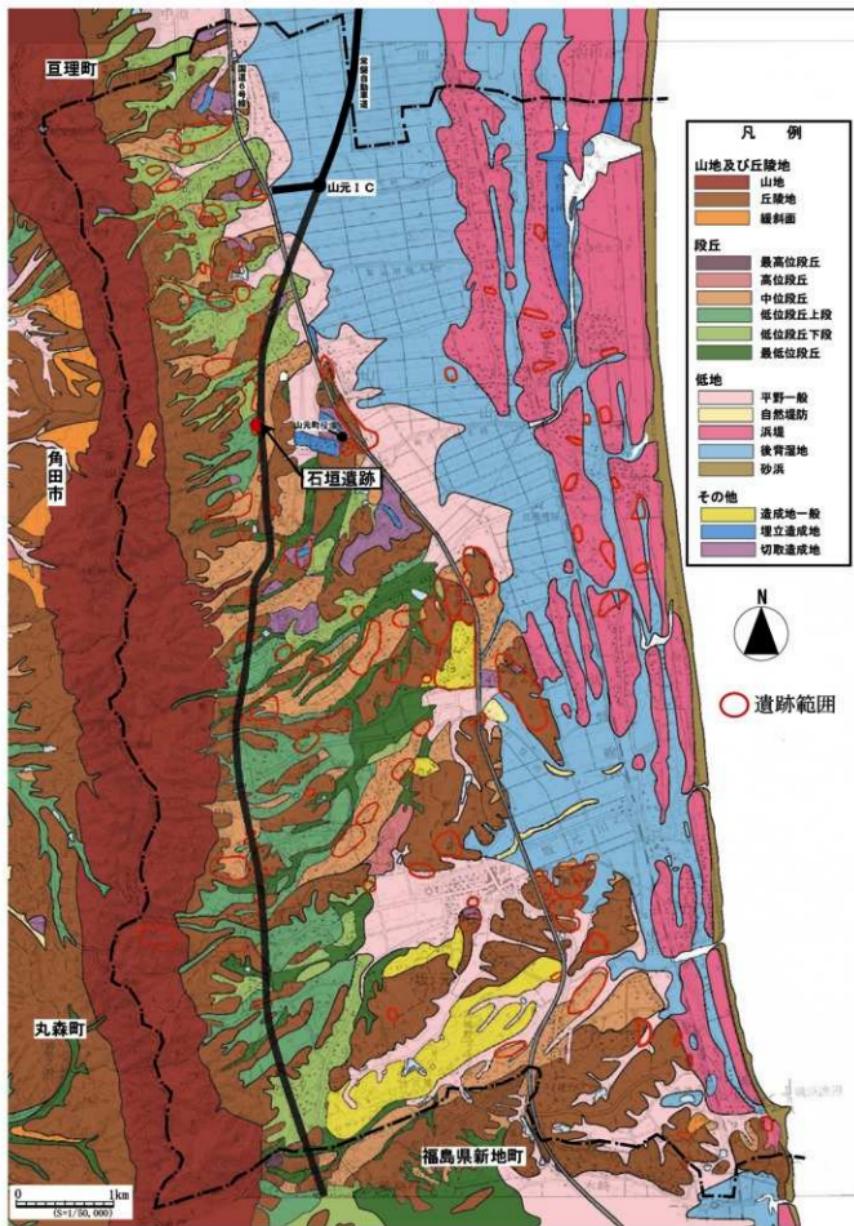
石垣遺跡は、平成19・20年度に実施された分布調査により発見された遺跡で、亘理郡山元町山寺字石垣に所在し、山元町役場の西約800mに位置する(第2・3図)。遺跡は、阿武隈山地から東に延びる丘陵の山寺川西側に広がる標高26~32mの中位段丘に立地する(第2図)。遺跡の範囲は、東西60m、南北200mほどの広がりをもつ。現況は、宅地、畑地、道路である。



第1図 山元町の位置

### 2. 周辺の遺跡

山元町には、今まで100余りの遺跡が登録されている(第3図、第1・2表)。その分布は、地形的に阿武隈山地裾部、そこから延びる丘陵縁辺部、浜堤列周辺の大きく3つに分けられる。阿武隈山地裾部には縄文時代から中世に至る各時代の遺跡がある。丘陵縁辺部には縄文時代から近世までの遺跡が分布するが、その主体は古代と中世である。浜堤列周辺は近年の分布調査のより発見された遺跡がほとんどで、古代以降の遺跡の分布している。



第2図 石垣遺跡及び山元町内の地形分類図

これまで山元町内の遺跡のうち本格的な発掘調査が実施された遺跡は、中島貝塚や合戦原遺跡、狐塚遺跡などわずか数例で、町内の原始から中世の歴史は未解明な点が多い状況にあった。しかし、平成21年度以降、町内では常磐自動車道山元IC開通に伴う周辺地区的開発や常磐自動車道（県境一山元間）建設工事、平成23年3月11日に発生した東日本大震災に伴う復興事業などに連続的に行われ、これまで知られていなかった山元町の歴史が少しづつ明らかになってきている。

以下これまでに調査された代表的な遺跡について、時代ごとに記述する。

### 【縄文時代の遺跡】

前期の北経塚遺跡（42）、前期～中期の西石山原遺跡（16）、中期～晩期の中島貝塚（50）、後期の谷原遺跡（4）、晩期の中筋遺跡（1）などがある。

北経塚遺跡では、平成15・21・23年に調査が行われ、前期初頭の竪穴住居跡、土坑、遺物包含層、ピット群などが検出された（関2004、山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013）。

西石山原遺跡では、平成22・23年に調査が行われ、前期の土坑、中期末葉の竪穴住居跡などが検出された（初鹿野ほか2012）。

中島貝塚では、昭和53年に調査が行われ、縄文土器・石器とともに貝殻、魚骨・獸骨が数多く出土した（山元町誌編纂委員会編1986）。

谷原遺跡では、平成20・22・24年の調査により、後期の掘立柱建物跡で構成される環状集落が確認され、この他、土坑や遺物包含層などが検出された。

中筋遺跡では、平成24年の調査で、晩期の遺物包含層が検出された。

### 【弥生時代の遺跡】

中筋遺跡（1）、北経塚遺跡（42）、館ノ内遺跡（39）、狐塚遺跡（92）などがある。

中筋遺跡では、平成24年に調査が行われ、水田跡や遺物包含層などが検出され、中期中葉の耕形圓式の土器や石包丁、板状石器などが出土した。

北経塚遺跡では、平成21・23年に調査が行われ、中期後半の十三塚式・後期の天王山式の土器のほか、石包丁が出土した（山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013）。

館の内遺跡では、平成13年に調査が行われ、中期後半の十三塚式の土器が出土している（引地2002）。

狐塚遺跡では、平成5年に調査が行われ、溝跡が確認され、中期後半の十三塚式の土器が出土している。（庭田1995）。

### 【古墳時代の遺跡】

前期の中筋遺跡（1）・石垣遺跡（6）、前期～中期の北経塚遺跡（42）、中期の合戦原遺跡（61）、後期の狐塚遺跡（92）・日向北遺跡（2）・日向遺跡（3）・谷原遺跡（4）・井戸沢横穴墓群（88）などがある。

中筋遺跡では、平成24年の調査で、前期の木棺墓が検出された。

石垣遺跡では、平成23年の調査で、前期の竪穴住居跡が検出された。

北経塚遺跡では、平成21・23年の調査で、前期の竪穴住居跡・方形周溝跡、中期の古墳周溝跡が検出された（山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013）。

合戦原遺跡では、平成2年に調査が行われ、南小泉式期の大型の竪穴住居跡が検出された（岩見ほか1991）。

日向北・日向・谷原遺跡では、平成22～24年の調査で、後期の竪穴住居跡が検出された。

狐塚遺跡では、平成4・5年に調査が行われ、後期の竪穴住居跡・竪穴状構造・掘立柱建物跡が検出

された（千葉 1993、窪田 1995）。

井戸沢横穴墓群では、昭和 44 年の調査により、数基の横穴墓が福島県浜通り地方に点在する横穴墓群との関連が指摘されている（佐々・志間・氏家 1971）。

### 【奈良・平安時代の遺跡】

館ノ内遺跡(39)、合戦原遺跡(61)、狐塚遺跡(92)、谷原遺跡(4)、涌沢遺跡(5)、内手遺跡(10)、上宮前北遺跡(13)、向山遺跡(93)、熊ノ作遺跡(94)などがある。

館の内遺跡では、平成 13 年に調査が行われ、規格的に配置された掘立柱建物跡や堅穴住居跡が検出され、墨書き土器や製塙土器などが出土している（引地 2002）。

合戦原遺跡では、平成 2 年に調査が行われ、奈良時代～平安時代の須恵器窯跡が検出された（岩見ほか 1991）。

谷原遺跡では、平成 20・22・24 年の調査で、堅穴住居跡・掘立柱建物跡・大溝・土坑などが検出され、円面鏡や風字鏡が出土している。

涌沢遺跡では、平成 24 年の調査で、平安時代の集落跡や土器廃棄土坑、製鉄関連遺構が検出され、墨書き土器や八稜鏡などが出土した。

内手遺跡では、平成 23 年の調査で、平安時代の木炭窯跡・横口付木炭窯跡が検出された。

上宮前北遺跡では、平成 24 年の調査で、平安時代の製鉄炉が検出された。

向山遺跡では、平成 25 年の調査で、奈良～平安時代の堅穴住居跡や鍛冶工房が検出された。

熊ノ作遺跡では、奈良時代～平安時代の堅穴住居跡や掘立柱建物跡が検出され、「坂本願」と書かれた墨書き土器や風字鏡、石帶、木簡などが出土している。

### 【中世の遺跡】

北経塚遺跡(42)、小平館跡(43)、日向遺跡(3)、谷原遺跡(4)、鷺足館跡(49)などがある。

北経塚遺跡では、平成 21・23 年の調査で、13 世紀後半～14 世紀以降の掘立柱建物跡・井戸跡・土坑が確認され、中世の集落の存在が明らかになった（山田・村上・山口 2010、山田・藤田・佐伯 2013）。

日向・谷原遺跡では、平成 22～24 年の調査で、掘立柱建物跡多数・井戸跡・土坑・溝跡などが検出され、中世の大規模な屋敷跡の存在が確認された。

小平館跡は、室町時代の天文年間(1532～1555 年)に亘理要害 14 世亘理宗隆が居館したとされている館跡で（柴桃 1974）、平成 24・25 年に調査が実施され、掘立柱建物跡・溝跡が検出された。

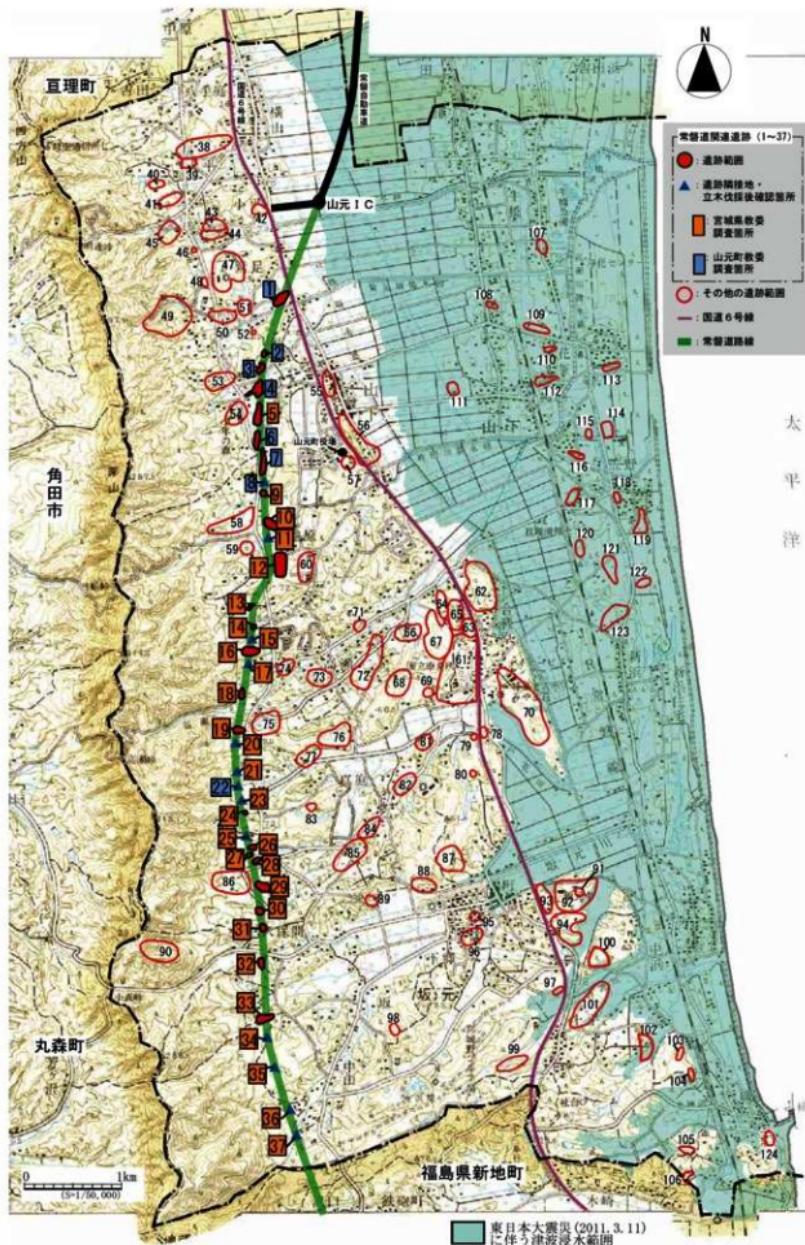
鷺足館跡は、山元町鷺足地区の山間部に位置する中世の山城で、平成 25 年に調査が実施され、腰郭と柱穴列で区画された曲輪が確認され、掘立柱建物跡が多数検出された。

### 【近世の遺跡】

山王 B 遺跡(9)、蓑首城跡(96)などがある。

山王 B 遺跡では、平成 22 年の調査で、掘立柱建物跡・溝跡・土坑が検出された（初鹿野ほか 2012）。

蓑首城跡は、戦国時代末期に築城され、元和 2(1616) 年以降、大條氏が長期間にわたり居城した城で、平成 25 年に二ノ丸跡の調査が実施され、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝跡が検出された。



第3図 山元町内の遺跡分布と常磐自動車道建設関連遺跡

第1表 常磐自動車道建設計画に伴う関連遺跡・地点一覧

No.	遺跡名	種別	時代等
1	中筋遺跡	水田・凹字形・墓地	縄文・弥生・古墳・平安 【平成22・23年度調査：E】
2	日向北遺跡	集落	古木文化遺跡調査結果～向北遺跡として登録 古墳・中世・平安。【平成22年度調査：E】
3	日向遺跡	集落	古代・中世 【平成22年度調査：E】
4	谷原遺跡	集落	縄文～中世 【平成22・23年度調査：E】
5	沢沢遺跡	集落・生產	古木文化遺跡調査結果～沢沢遺跡として登録 古代・平安。【平成22年度調査：E】
6	石塙遺跡	集落	縄文・古墳・平安 【平成22・23年度調査：E】
7	の郷遺跡	集落	縄文・古墳・平安 【平成22・23年度調査：E】
8	—	—	古木文化遺跡調査結果～の郷遺跡として登録 古代・平安。【平成22・23年度調査：E】
9	山王B遺跡	集落	古代・中世 【平成22・23年度調査：E】
10	内手遺跡	製鉄・生產	平安 【平成22年度調査：E】
11	内手遺跡 南隣接地	生產	古代・平安・近畿文化 【平成22年度調査：E】
12	浅生原遺跡	散布地	縄文・中世、平安 【平成22年度調査：E】
13	上宮前北遺跡	製鉄	古木文化遺跡調査結果～上宮前北遺跡として登録 古代・平安。【平成22年度調査：E】
14	上宮前遺跡	散布地	平安・中世 【平成22・23年度調査：E】
15	西石山原遺跡 北隣接地	—	縄文～後秦漢・平安 【平成22年度調査：E】
16	西石山原遺跡	集落	縄文・古墳・平安 【平成22年度調査：E】
17	西石山原遺跡 南隣接地	集落	古墳時代の遺跡群と見解 古石山遺跡と見解。 【平成22年度調査：E】
18	北山神遺跡	散布地	縄文 【平成22年度調査：E】
19	南山神B遺跡	散布地	平安・中世、平安時代後期、平安時代後期～鎌倉時代 【平成22年度調査：E】
20	南山神B遺跡 隣接地	集落	古墳時代、鎌倉時代後期 南山神B遺跡と見解。 【平成22年度調査：E】
21	—	—	古墳時代、後秦漢・平安 【平成22年度調査：E】
22	—	—	古墳時代、後秦漢・平安 【平成22年度調査：E】
23	新田B遺跡 隣接地	—	古墳時代、後秦漢・平安 【平成22年度調査：E】
24	新田B遺跡	散布地	古代・平安・近畿文化 【平成22年度調査：E】
25	影倉D遺跡 隣接地	—	古墳時代、後秦漢・平安 【平成22年度調査：E】
26	影倉E遺跡	散布地	縄文・古代・中世、平安 【平成22年度調査：E】
27	影倉B遺跡	散布地	縄文 【平成22年度調査：E】
28	影倉C遺跡	散布地	古代 【平成22年度調査：E】
29	影倉D遺跡	製鉄	古代・無鉄 【平成22年度調査：E】
30	荷駄場B遺跡	散布地	古代 【平成22年度調査：E】
31	荷駄場遺跡	散布地	縄文、古墳時代結果、川内に遭滅なし 【平成22年度調査：E】
32	上小山遺跡	散布地	古代・中世 【平成22年度調査：E】
33	法羅遺跡	散布地	縄文、古墳時代結果、川内に遭滅なし 【平成22年度調査：E】
34	—	—	古墳時代結果、後秦漢・平安 【平成22年度調査：E】
35	—	—	古墳時代結果、考古学的判断 【平成22年度調査：E】
36	—	—	古墳時代結果、後秦漢・平安 【平成22年度調査：E】
37	—	—	古墳時代結果、後秦漢・平安 【平成22年度調査：E】

※太字ゴシック体：本稿各道路

第2表 その他の山元町内の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	時代
38	大平塚跡	城郭	中世
39	館の内遺跡	遺物・出土品	古代
41	味曾野井畠跡	構造施設	古墳時代
42	北經塚遺跡	散布地	古墳時代
43	小平塚跡	城郭	中世
44	鏡穴土器群	構造施設	古墳時代
45	清水遺跡	散布地	後秦漢・平安
46	北ノ入遺跡	散布地	古代
47	山崎横穴墓群	構造施設	古墳時代
48	北遺跡	散布地	古代
49	足見塚跡	城郭	中世
50	中鳥貝塚	墳丘	縄文・中～晩
51	中道遺跡	散布地	古墳時代
52	赤坂遺跡	散布地	古墳時代
53	石室遺跡	散布地	古代
54	山寺難遺跡	城郭	中世
55	作田山難遺跡	城郭	中世
56	下山遺跡	城郭	中世
57	日向紫塚	墓地	古代
58	入山遺跡	散布地	古墳時代・古代
59	山王遺跡	製鉄	古代？
60	下大尺遺跡	散布地	縄文
61	合戦原遺跡	集落・内墳・窯跡	古墳時代・築山・良基・平安
62	合戦原B遺跡	製鉄	古代？
63	合戦原C遺跡	古墳群	古代
64	桂下窯跡	窯跡	古代
65	中島塚跡	城郭	中世
66	大久保遺跡	散布地	縄文・古墳・古墳・古代
67	大久保B遺跡	散布地	古代
68	北名生東遺跡	窯跡	古代
69	北名生東裏遺跡	窯跡	古代
70	戸花山遺跡	窯跡	縄文～古代
71	寛後遺跡	散布地	古代
72	堂原遺跡	散布地	古代
73	北の原遺跡	散布地	縄文早・前・後
74	石山原遺跡	散布地	縄文
75	南山神遺跡	散布地	縄文早・前
76	眞庭館跡	城郭	中世
77	北野原遺跡	散布地	古墳
78	貝吹城跡	城郭	中世
79	卯月崎塚	塚	古代
80	北越塚	塚	古代？
82	上台遺跡	散布地	平安・平定
83	原跡	散布地	古墳
85	南堆積物跡	散布地	縄文早・前・古墳
86	影倉遺跡	散布地	縄文後・後・施
87	愛宕山・牧跡	散布地	古墳
88	芦井沢根穴墓群	構造施設	古墳
89	白向遺跡	散布地	古墳中・後
90	新城山古跡跡	城郭	中世
91	蛭塚古跡群	円墳	古墳
92	福塚遺跡	散布地・牛糞	古墳・牛糞・古墳・古墳
93	向山遺跡	散布・牛糞	古墳～平安
94	鶴の作遺跡	墓地	古代
95	桂下遺跡	散布地	古代
96	靈苦城跡	城郭	古墳
97	作田寺六古墳群	構造施設	古墳
98	川内遺跡	製鉄	平安？
99	一の矢遺跡	散佈・施	郭生
100	大塚遺跡	散佈・牛糞	古代
101	動植物遺跡	散布地	古代
102	新中水遺跡	散佈・牛糞	古代
103	製作軒塚	経塚	平安～密町
104	大垣小字十三塚	冢	中世？
105	雷神遺跡	散佈・牛糞	古代
106	山ノ上遺跡	散佈地・牛糞	古代
107	北茨沼遺跡	散布地	古代
108	荒沼遺跡	散布地	古代
109	桜合遺跡	散布地	古代
110	北頭無遺跡	散布地	古代
111	新田遺跡	散布地	古墳後・古墳
112	頭無遺跡	散布地	古代
113	浜遺跡	散布地	古代
114	花笠遺跡	散布地	古代
115	西北谷地A遺跡	散布地	古代
116	西北谷地B遺跡	散布地	古代
117	西脇質跡	散布地	古代
118	笠野山遺跡	散布地	古代
119	笠野山遺跡	散布地	古代
120	北中須遺跡	散布地	古代
121	祇園遺跡	散布地	古代
122	笠井遺跡	散布地	古代
123	新浜遺跡	散布地	古代
124	唐船番所跡	衙所	古世

## 第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過

### 1. 常磐自動車道（県境～山元間）建設工事計画と発掘調査に至る経緯

#### （1）調査に至る経緯

##### ①路線内の埋蔵文化財の取り扱い決定までの経緯

宮城県亘理郡山元町は、常磐自動車道の事業計画地の一つとなっており、平成 11 年度に山元 IC から福島県の新地 IC までのおおよそのルートが決定したことを受け、日本道路公団東北支社仙台工事事務所長から平成 12 年 2 月 5 日付で、道路工事と埋蔵文化財の関わりについての「協議書」が提出された。宮城県教育委員会（以下、県教委）、山元町教育委員会（以下、町教委）では、協議の結果、事業の実施により、遺跡へ与える影響が高いと判断されたことから、平成 12 年 5 月 29 日付け宮城県教育庁文化財保護課長通知により、路線内に含まれる周知の遺跡 4 カ所については、遺構の分布状況を把握するために、「確認調査」を実施する対応に決定した。しかし、具体的な施工時期等が未決定だったため、その後の高速道路建設工事に関する埋蔵文化財の対応は、平成 19 年度までの一定期間、具体的な動きがなく、大きな動きがない状態であった。

平成 19 年度になり、常磐自動車道の施工時期・具体的な路線が決定し、用地のセンター杭設置が完了したことを受け、東日本高速道路株式会社（以下、事業主）、県教委・町教委の三者で改めて協議を行った結果、山元 IC 以南から県境までの総長約 10km の路線について、本格的な分布調査を実施し、路線内の遺跡の分布状況について再度調査することとなった。

分布調査は、県教委・町教委のほか、事業主・町担当部局の担当職員が参加し、平成 20 年 2 月 26 日～28 日（県教委 7 名・町教委 2 名）、平成 21 年 3 月 23 日・24 日（県教委 10 名、町教委 1 名）の 5 日間にわたり実施された。その結果、路線内では、十数カ所で新たに遺跡が発見され、すでに確認されていた周知のものを合わせて 21 遺跡確認された。また、山林のため遺跡の有無が確認できなかつた箇所のうち、地形的に遺跡が存在する可能性のある箇所や遺跡隣接地に該当する箇所も 16 箇所確認され、路線内の要確認箇所は、合計 37 地点となった。

これを受け、平成 21 年 5 月に県教委・町教委・事業主の三者で、遺跡の取り扱い・調査体制等について協議した結果、路線内に多数の遺跡・確認箇所があり、かつ遺跡保存のための工法変更が難しいと判断されたことから、路線内 37 カ所の全てについて発掘調査が必要であると判断された。しかしながら、平成 21 年時点での町の調査体制では、提示された調査期間内に発掘調査完了見込みが立たないことから、発掘調査は県教委の全面的な協力を得て、県教委と町教委で分担することになった。また、用地買収の状況により、平成 21 年度中に路線内の発掘調査可能箇所について調査着手するものとした（しかしながら、平成 21 年 11 月の段階で、平成 21 年度中の発掘調査着手が困難な状況となつたため、本格的な発掘調査は、平成 22 年度から開始することになった）。

##### ②文化財保護法に基づく手続き

上記の三者による協議終了後、新発見遺跡の遺跡登録手続きを実施し、平成 21 年 6 月 2 日には、事業主から路線内の 21 遺跡・その他 16 箇所についての「協議書」が提出され、平成 21 年 6 月 17 日付け「文第 519 号」宮城県教育委員会教育長通知により、周知の遺跡 21 遺跡、その他 16 箇所についての取り扱いが決定した（周知の 21 遺跡：確認調査実施後、遺構が存在する場合は本調査を実施、その他 16 箇所：立木伐採後、現地踏査・確認調査を実施し取り扱いを決定する）。その後、平成 21 年 9 月 1 日には事業主から文化財保護法第 94 条に基づく「発掘通知」が提出され、平成 22 年度から本格的な発掘調

査を実施した。発掘調査完了後には、完了した遺跡ごとにその都度、遺失物法・文化財認定に係る手続きを行った。

## (2) 施工路線内の発掘調査の経過

常磐自動車道施工路線内の現地発掘調査については、前述のとおり、県教委と町教委が分担し発掘調査を進めた。発掘調査に先立ち、平成 22 年 4 月 1 日に県教委・町教委・事業主の三者で埋蔵文化財発掘調査に係る協定を締結し、その後、町教委については各年度当初に、事業主と山元町で業務委託契約を締結し発掘調査業務にあたった。施工路線内の発掘調査は、原則として高速道路 4 車線分の用地幅に対し、今回の施工分（2 車線分）と側道等の付帯設備のみを対象として行われ、切土部分や工法の関係で 4 車線分の工事を要する範囲については、用地幅すべてを調査の対象とした。また、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災に伴い、常磐自動車道が「復興道路」に位置づけられたため、平成 24 年度以降の発掘調査実施にあたっては、「復興事業に伴う埋蔵文化財」の適用を受けることとなり、「復興の基準」（平成 23 年 6 月 3 日付け文第 268 号宮城県教育委員会教育長通知、平成 23 年 4 月 28 日付け 23 庁財第 61 号文化庁次長通知）で調査を実施した。

施工路線内の 21 遺跡、その他 16 カ所の合計 37 箇所の現地発掘調査は、平成 22 年度から開始し、平成 25 年度までの 4 カ年にわたり実施した（第 3 図・第 1 表）。山林のため遺跡の有無を確認できなかつた 16 箇所については、調査の結果、遺構が発見された日向北（2）・涌沢（5）・上宮前北（13）の 3 箇所には遺跡として新規登録、遺跡隣接地のうち遺構が発見された 3 箇所（11・17・20）は隣接する遺跡への範囲拡大措置がとられた。したがって、最終的な路線内の遺跡数は 24 遺跡という結果となった。

発掘調査は、用地買収等の進捗状況の影響もあり、平成 22 年以前に用地内の確認調査が実施できなかつたため、それぞれ遺跡の状況が把握できない状態での開始となつた。したがって、発掘調査に際しては、路線内の遺跡範囲について、まず確認調査を実施し、遺構が発見された場合は、本調査に切り替えて調査を行う方法で行った。

なお、各年度の県教委と町教委の調査遺跡については、第 3 図・第 1 表のとおりである。

## 2. 石垣遺跡発掘調査の経過

石垣遺跡の確認調査・事前調査は、町教委が主体となり実施した。

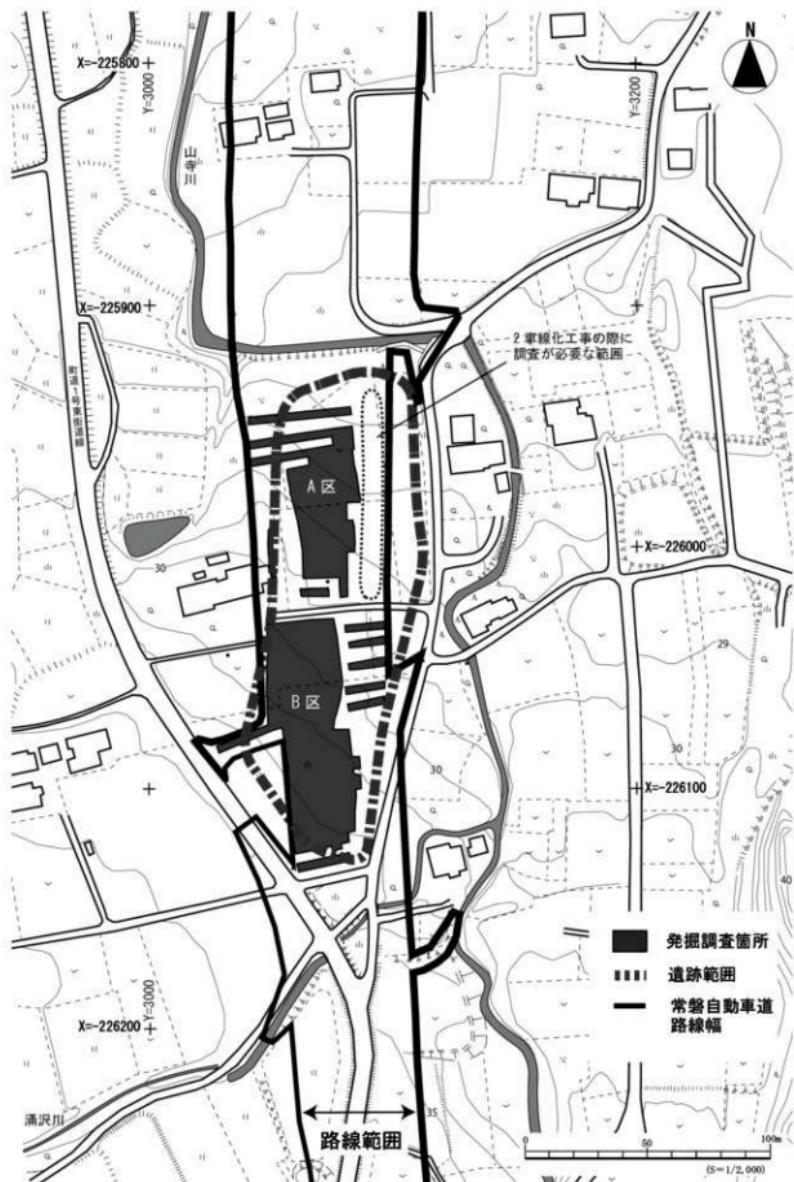
### (1) 確認調査の経過

確認調査は平成 23 年 8 月 29 日～9 月 1 日までの 4 日間実施し、石垣遺跡範囲内の路線計画部分のはほぼ全域にわたり遺構が残存していることが判明した。この結果を受け、事業主と協議した結果、2 車線分の路線範囲と町道付替部分について、平成 23 年度に本格的な調査を行うこととなった。

### (2) 事前調査の経過

事前調査は、平成 23 年 9 月 5 日～11 月 1 日の 34 日間実施した。事前調査の対象となったのは、高速道路 4 車線分の用地のうち、今回施工する 2 車線分の用地範囲である（第 4 図）。したがって、高速道路の 4 車線化工事実施の際は、今回の調査対象とならなかつた箇所（A 区東側用地）について、再度発掘調査が必要である。

調査面積は、調査対象となった事業計画面積の約 10,000 m<sup>2</sup>のうち、遺構が確認された約 4,750 m<sup>2</sup>（A



第4図 調査区の位置

区：約 1,730 m<sup>2</sup>、B 区：約 3,020 m<sup>2</sup>）である

調査は、遺跡南側に隣接する的場遺跡の事前調査終了後すぐに開始したことから、発掘現場事務所については、的場遺跡の調査で使用した現場プレハブをそのまま利用し、石垣遺跡の調査現場には、道具倉庫と仮設トイレのみを設置して調査にあたった。

9月5日から表土除去を開始し（A区9月5日～6日、B区9月6日～8日）、遺構の検出・精査については、A区は9月8日、B区は9月9日から着手した。10月26日にはA・B区の調査がほぼ完了し、11月1日にA・B区全面の空中写真撮影を業務委託により行った。その後、現場の資材等を撤収し、調査区の埋め戻しを実施し、すべての現地作業を終了した。

発掘調査体制は、調査員2名、調査補助員2名、作業員29名である。

### （3）整理・報告書作成作業の経過

石垣遺跡で出土した遺物、現地の記録類の整理・報告書作成作業は、発掘調査終了後、山元町役場敷地内に設置した整理室内で行った。石垣遺跡の現地調査完了後も、その他の常磐道関連遺跡の現地調査を継続して進めたため、本格的な整理・報告書作成は、平成24年度以降から開始し、平成25年度末に作業を完了した。

#### 【平成24年度の作業内容】

- ・出土遺物の整理作業（洗浄・接合・注記・復元）
- ・記録写真的ネーミング

#### 【平成25年度の作業内容】

- ・平面図、断面図の修正
- ・出土遺物の実測図・拓本の作成、実測図のトレース、出土遺物の写真撮影
- ・断面図のトレース、平面図・写真類の版組み
- ・報告書執筆
- ・出土遺物、記録類の収納

## 第Ⅲ章 発掘調査

### 1. 基本層序

調査区（A・B区）は、標高 26~32m の平坦面・緩斜面に位置し、南側から北・東側にかけて緩やかに傾斜する。発掘調査前の調査区の土地利用状況は、A・B区ともに畑地である。

基本層序は、上から現代の表土（I層）、旧表土（II層）、旧河川跡（III層）、地山（IV層）の順に構成される。遺構確認面はIII層・IV層上面である。III層の旧河川跡は、A・B区の南東側で確認されており、遺跡の東側を流れる山寺川が起源となると考えられる。

各層の概要は以下のとおりである（第5図）。

**I層**：表土。暗褐色（10YR4/3）シルト。

層厚 12~37cm。現代の耕作土。小礫少量、炭化物片含む。

**II層**：旧表土。暗褐色（10YR3/4）シルト。

層厚 10~26cm。小礫少量、炭化物片含む。地山粒子含む。

**III層**：旧河川跡。河川起源の土と疊、砂で構成される層。

IIIa~f 層に細別される。

IIIa 層：褐色（10YR4/4）シルト。層厚 9~35cm。黒色土粒子、小礫含む。

IIIb 層：にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト。層厚 7~32cm。小礫少量含む。

IIIc 層：灰黃褐色（10YR4/2）砂質シルト。層厚 8~18cm。小礫含む

IIId 層：灰黃褐色（10YR4/2）砂質シルト。層厚 6~16cm。黒色土粒子、小礫含む

IIIf 層：褐色（10YR4/6）砂質シルト。層厚 8~31cm。小礫微量含む。

IIIf 層：暗褐色（10YR3/4）砂質シルト。層厚 6~14cm。小礫微量含む。

**IV層**：地山。IVa~b 層に分かれる。

さらにIVb 層は土色と混入物の違いからIVb1 層、IVb2 層の 2 層に細別される。

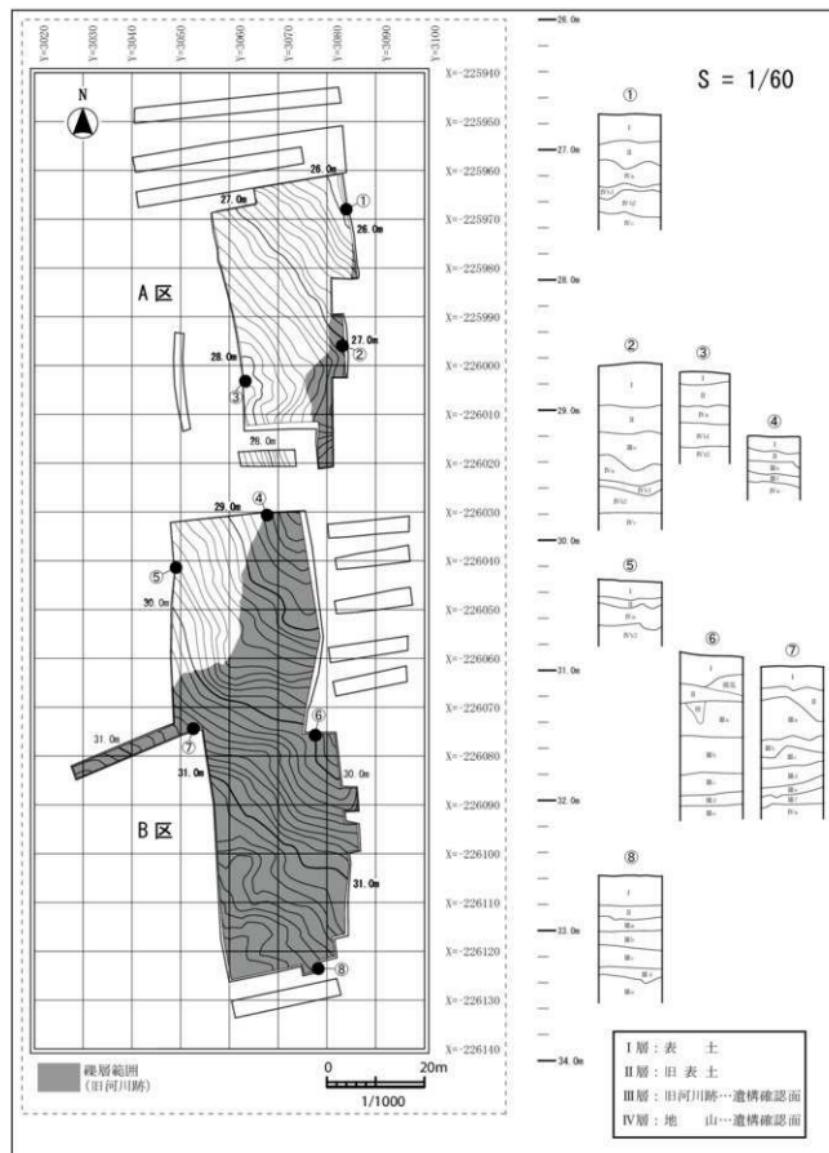
IVa 層：黄褐色（10YR5/6）粘土質シルト及び砂質シルト。

層厚 12~21cm。小礫微量含む。遺構確認面

IVb1 層：にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト。層厚 4~10cm。小礫含む。

IVb2 層：黄褐色（10YR5/8）シルト。層厚 12~21cm。小礫多く含む。

IVc 層：にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト。層厚 15cm 程度。小礫微量含む。



## 2. 発掘調査の方法

今回の調査は、常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に伴う発掘調査であり、本遺跡の現地調査・整理作業は下記の方法により行った。

### （1）現地調査

#### 【調査区の設定】

今回の調査範囲は、既存の私道により南北に分断されている状況であった。このことから、この私道を境として調査区を設定する方法をとった。調査区は、道路の北側をA区、南側をB区とした（第4図）。

#### 【表土除去・遺構精査】

表土除去作業はバックホー（0.45 m<sup>3</sup>）、遺構検出以降の作業は人力により行った。なお、遺構検出作業については、A区は基本層IIIe・IVa層上面、B区は基本層IIIa・IVa層上面で行った。

#### 【遺構測量】

検出した遺構や調査区の図面作成については、遺構平面図・等高線作成はトータルステーション（SRX5X）及び電子平板システム（遺構くん cubic 2011 7.02）、遺構断面図は手実測により縮尺1/20で実測した。その際、調査対象範囲に設置した国家座標系に基づく基準杭を利用した。測量基準杭の国家座標は例言に示したとおりである。

#### 【遺構番号】

遺構番号は、現地調査の段階で、それぞれの調査区（A～B区）ごとに1から通し番号（A-001～、B-001～）を振り、各種記録類を作成した。その後、整理作業の段階で、遺構番号を各遺構の性格ごとに再度振り直した。なお、遺構の性格ごとの略記号については例言に示したとおりである。

#### 【遺構の記録作成】

今回の調査で検出した遺構のうち、竪穴住居跡・竪穴状遺構、土坑、井戸跡については、原則として、すべての記録作成（平面図・断面図・写真撮影）を行った。これら以外の中世以降と判断される柱穴・ピット類は、調査を円滑に進めるため、遺構平面の下場計測や断面図・写真等の記録作成の一部を省略した。具体的には、建物を構成する柱穴については、必要箇所のみ断面図作成・写真撮影等を行い、これ以外の柱穴・ピットは、法量計測・土層注記の記録作成のみを行った。この他、今回の調査で掘り込みを行った遺構の底面標高はすべて記録した。

#### 【遺物の記録・取り上げ】

遺構から出土した遺物のうち、出土状況の平面記録の対象としたものは、遺構に伴う遺物でかつ残存状況のよいもののみとした。

遺物の取り上げについては、原則として遺構出土遺物は出土層位ごと、遺構外出土遺物は検出面等として記録し取り上げた。ただし、遺構出土の遺物のうち、半裁時（分層前）に出土した遺物で出土層位が明確でないものは、「堆積土」として取り上げた。

#### 【写真撮影】

記録写真には、一眼レフデジタルカメラ（NikonD90/レンズ AF-S NIKKOR 18-200mm/画質モード RAW+FINE）、俯瞰撮影システムを使用した。A区・B区の調査がほぼ終了した平成23年11月1日には、業務委託でラジコンヘリによる航空撮影（一眼レフデジタルカメラ、6×7フィルムカメラ）を行った。

## (2) 室内整理

### ①遺物の整理作業

#### 【遺物洗浄・接合・復元】

遺物の洗浄は、水洗により作業を行い、比較的脆い遺物（縄文土器・土師器）については、土器強化剤（使用薬剤：バインダー17）による処理を施した。遺物の接合は、まず同一遺構内の出土遺物の接合を行い、その後、別々の遺構間、その他（検出面・排土など）から出土した遺物の接合を行った。遺物の復元は、実測図作成が可能なものを対象に作業を行った。

#### 【注記作業】

遺物の注記は、ジェットマーカー（第一合成株式会社）を一定期間リースし、機械による注記を行った。遺物への注記内容は、原則として遺跡名の略号・調査年・出土遺構・出土層位とし、遺物の内面等に注記した。なお、注記した出土遺構名は、現場調査で付した番号とした。

#### 【遺物抽出・実測図・拓本図作成】

遺物の抽出・実測図作成は調査員・調査補助員が行い、拓本作成は整理作業員、報告書用の拓本図作成は調査補助員が担当した。

遺物抽出に際しては、原則として遺構に伴う遺物を中心に抽出し、遺構に伴わないものや遺構外出土のものについても図化が可能なものは抽出の対象とした。

遺物の実測図については、原則として手実測により作成したが、一部の遺物は遺物くん cubic2012 4.00 を使用して作成し、また、一部は民間調査機関（株式会社シン技術コンサル）に委託して行った。

拓本図の作成は、墨拓と画仙紙を使用し拓本を作成した後、スキャナーで PC に画像を取り込み、報告書掲載用に加工した。

#### 【実測図トレース・写真撮影】

遺物の実測図のトレース図は、素図をスキャナーで取り込み、PC 上でのデジタルトレースを行い作成した。報告書に掲載する遺物の写真撮影・写真加工作業は、民間機関（株式会社アートプロフィール）に委託した。

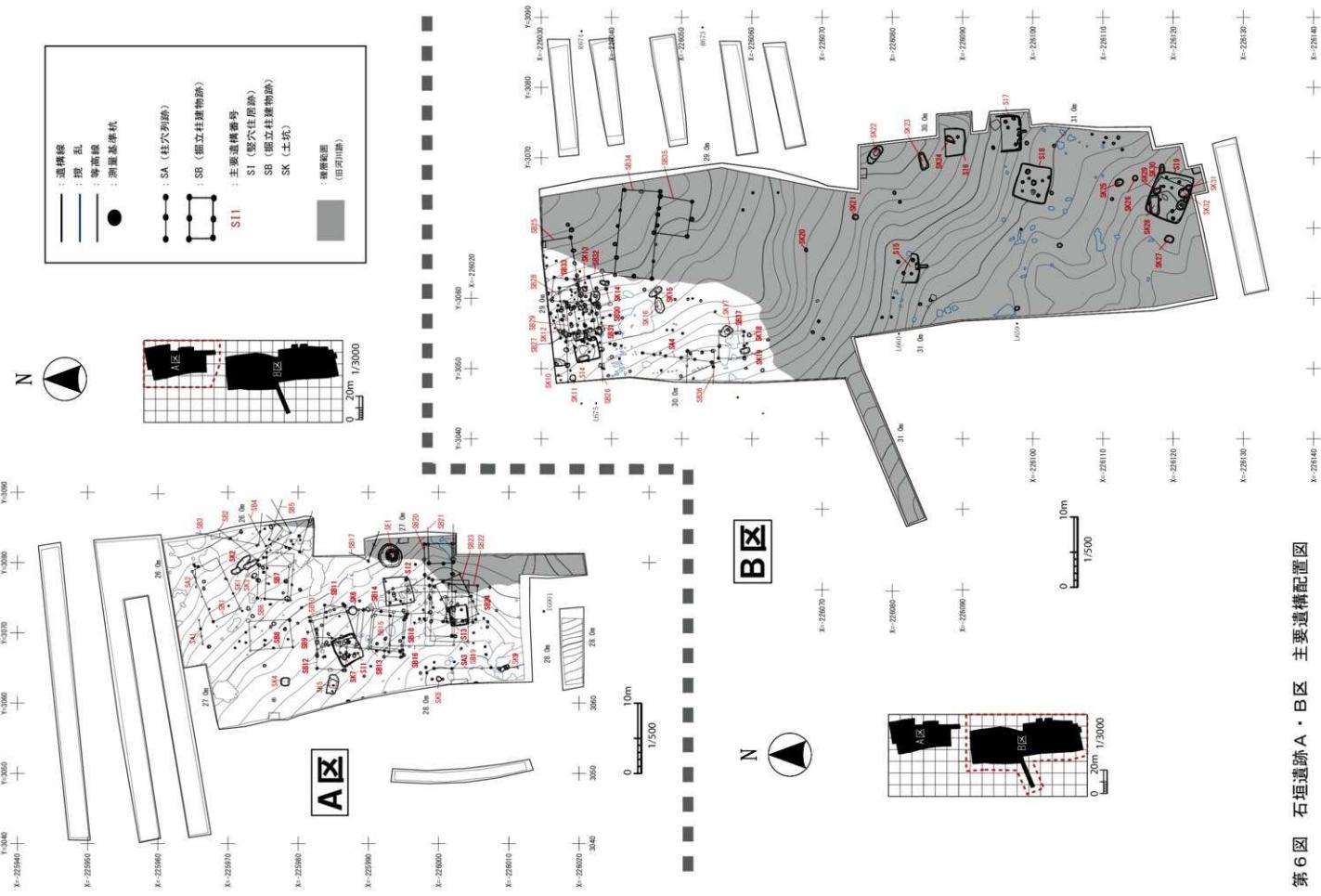
#### ②図面の整理・報告書作成

遺構図の整理作業は、平面図修正・断面図修正・トレース・土層注記等のデータ入力を行ったのち、図版作成・図面収納の手順で行った。報告書の執筆は、調査員・調査補助員が担当した。

なお、遺物・断面図のトレース図作成・写真画像処理、遺構図等の図版作成・報告書版組みについては、遺構くん cubic 2012 8.03、Adobe Illustrator CS5、Adobe Photoshop CS5、Adobe InDesign CS5、表データ・報告書原稿の作成については Microsoft Office Word ・Excel のソフトウェアを使用した。

## 3. 発見された遺構と遺物

今回の調査では、竪穴住居跡 9 軒、掘立柱建物跡 37 棟、柱穴列跡 4 条、土坑 32 基、井戸跡 1 基、Pit256 個を検出した（第 6・9～13 図）。出土遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、石器である。以下、遺構ごとに記載する。





1. 石垣遺跡 調査区全景（北から）



2. 石垣遺跡 調査区全景（南から）

第7図 石垣遺跡 調査区全景（1）

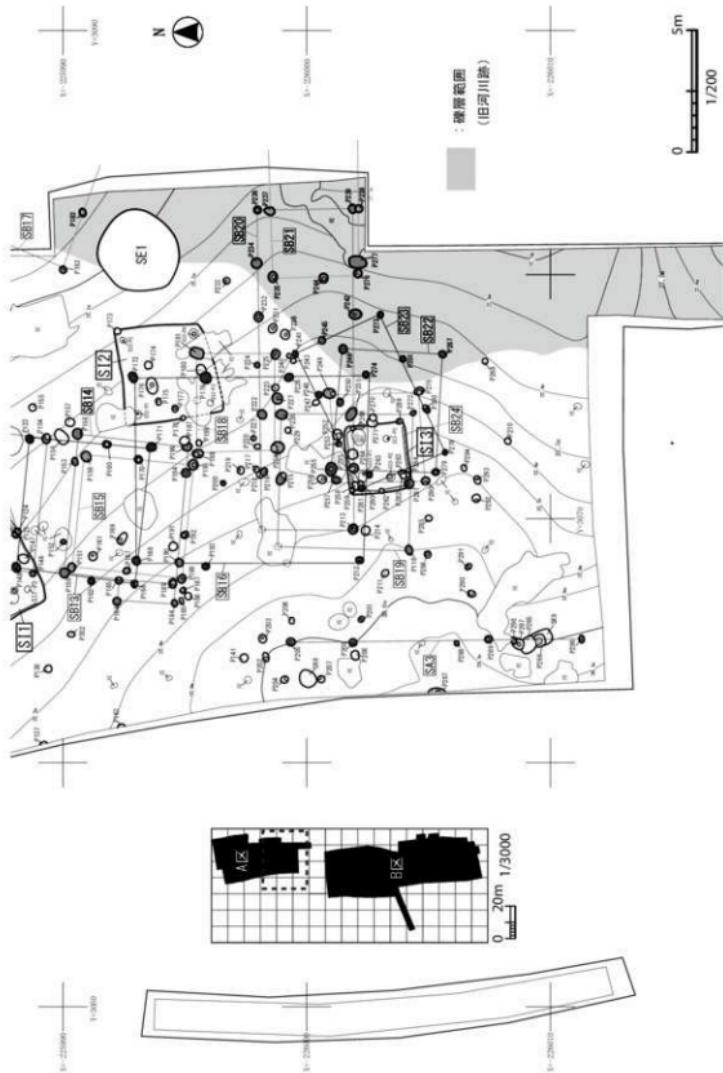


第8図 石垣遺跡 調査区全景（2）

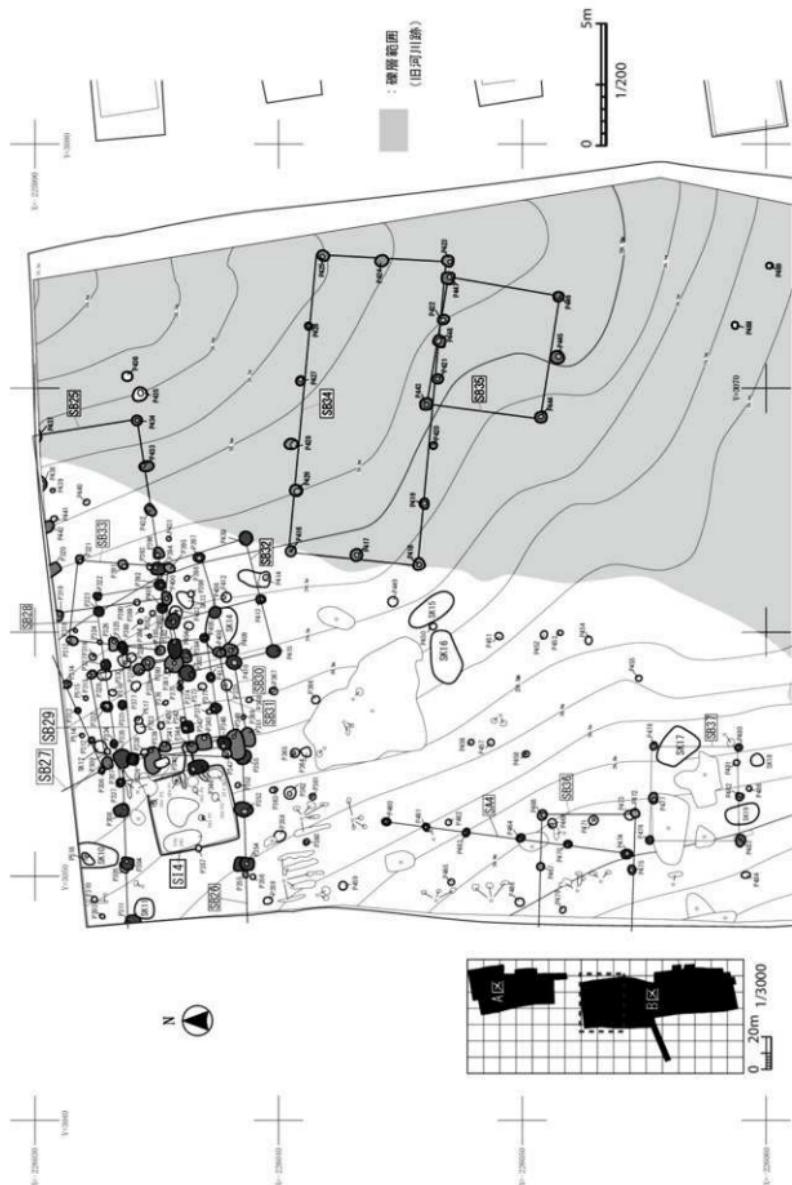
第9図 石垣遺跡 遺構配置図(1)

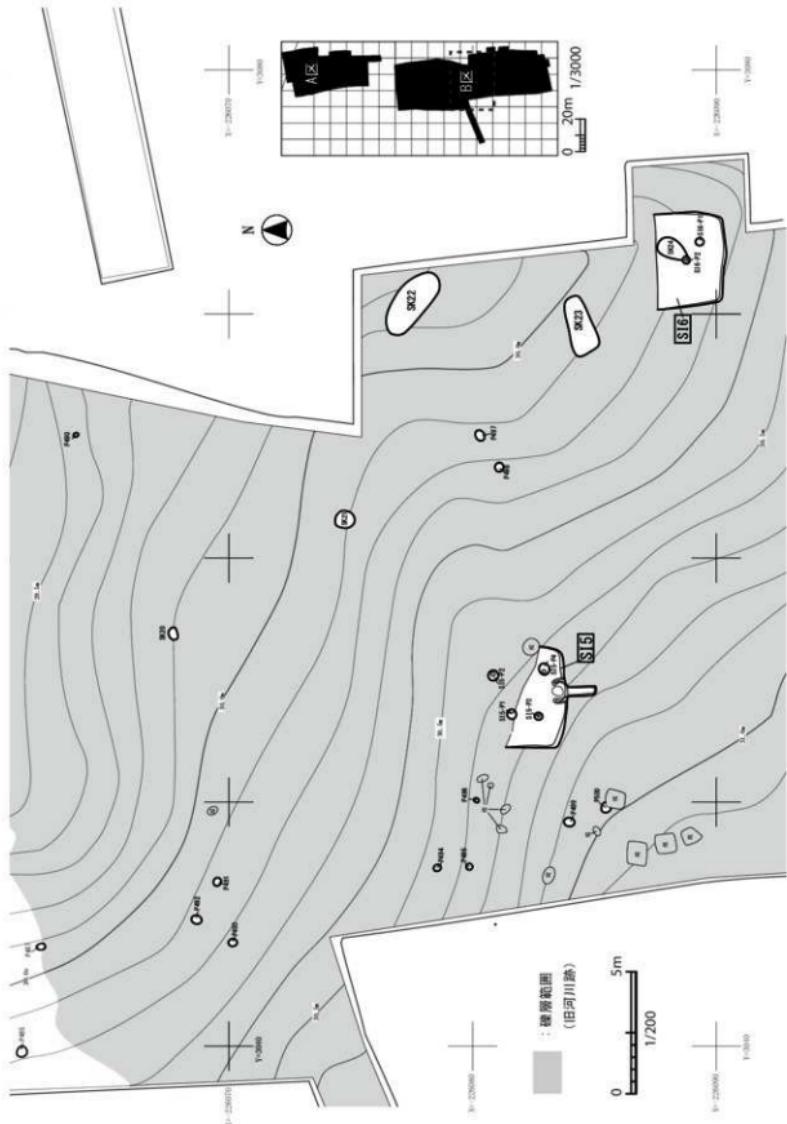


第10図 石垣遺跡 遺構配置図(2)



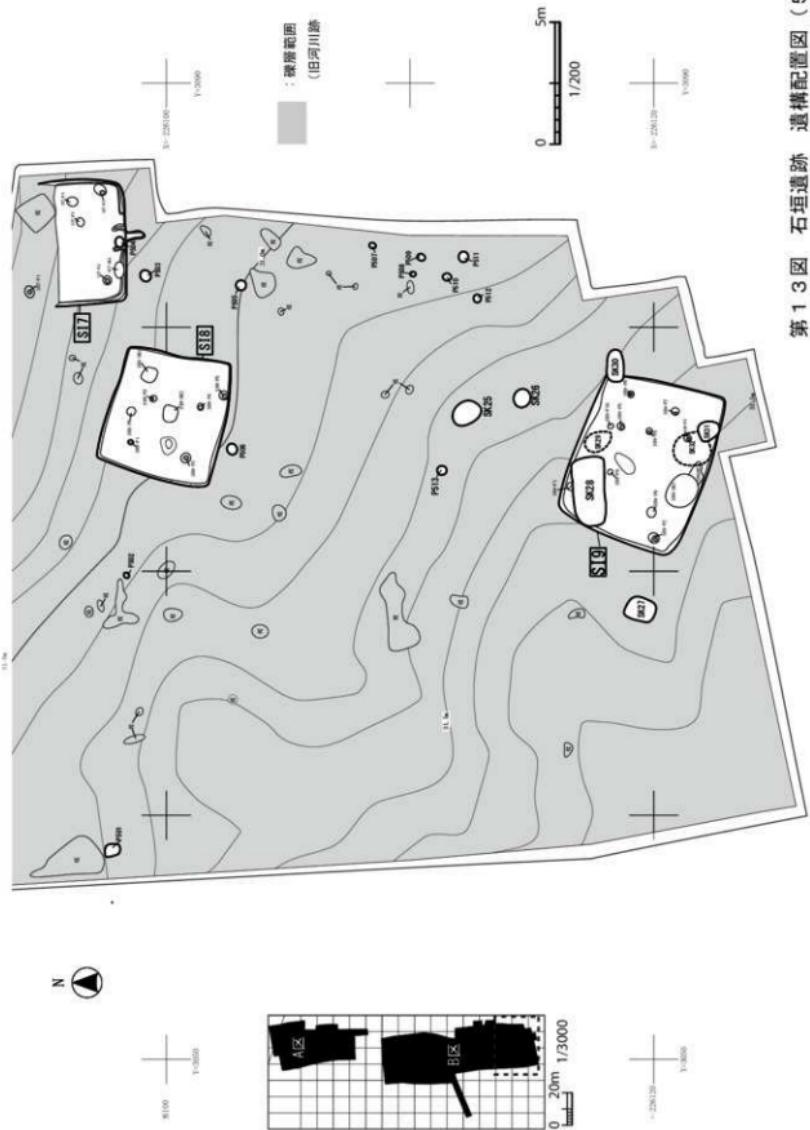
第11図 石垣遺跡 造構配置図（3）





第12図 石垣遺跡 遺構配置図(4)

第13図 石垣遺跡 遺構配置図(5)



## (1) 壁穴住居跡・壁穴状遺構

A 区で 3 軒 (S I 1~3)、B 区で 6 軒 (S I 4~9)、合計 9 軒検出した。

### 【S I 1 壁穴状遺構】(第 14 図、第 3 表)

A 区中央の標高 27.3~27.6m 前後の平坦面に立地する。確認面は基本層 IVa 層である。SB9 (P124・131)・SB10 (P125・129)・SB11 (P146・149)・SB12 (P126・143)・SB13 (P148)、SK7、P127・128・130・132・133・139・140・142・144・145・147 と重複し、これより古い。

【規模・平面形】北一南 2.9m、東一西 3.2m の隅丸方形を呈する。

【主軸方向】壁穴西辺が真北に対し、西に約 20° 傾く (N-20°-W)。

【壁】壁穴北東部分が最も残りがよく、高さ 6cm 程度残存していた。

【床面】壁穴中央部・南西部は地山、それ以外は掘方埋土を床面としている。床面はほぼ平坦である。

【炉・カマド】確認されなかった。

【周溝】壁穴壁際を巡る。周溝は全周せず、壁穴南東コーナーと北辺・東辺・西辺のみで確認した。上幅 8~20cm、下幅 3~7cm、深さ 9cm 前後である。周溝は南辺で途切れていることから、出入口は壁穴の南側付近に位置していた可能性が考えられる。

【床面施設】柱穴跡を 1 個 (P4)、ピットを 3 個 (P1~3) 検出した。

柱穴 (P4) は径 51cm の楕円形を呈し、深さ 25cm で、径 13cm の円形の柱痕跡が認められた。ピット (P1~3) は、径 20~21cm の円形を呈し、深さ 10~24cm である。

これらの柱穴とピットは、壁穴の四隅に配置されていることから、主柱穴である可能性が想定される。

【堆積土】壁穴の堆積土は 3 層に分かれ、1 層は壁穴堆積土、2 層は周溝堆積土、3 層は壁穴の掘方埋土である。1~2 層は自然堆積で、3 層は人為堆積である。

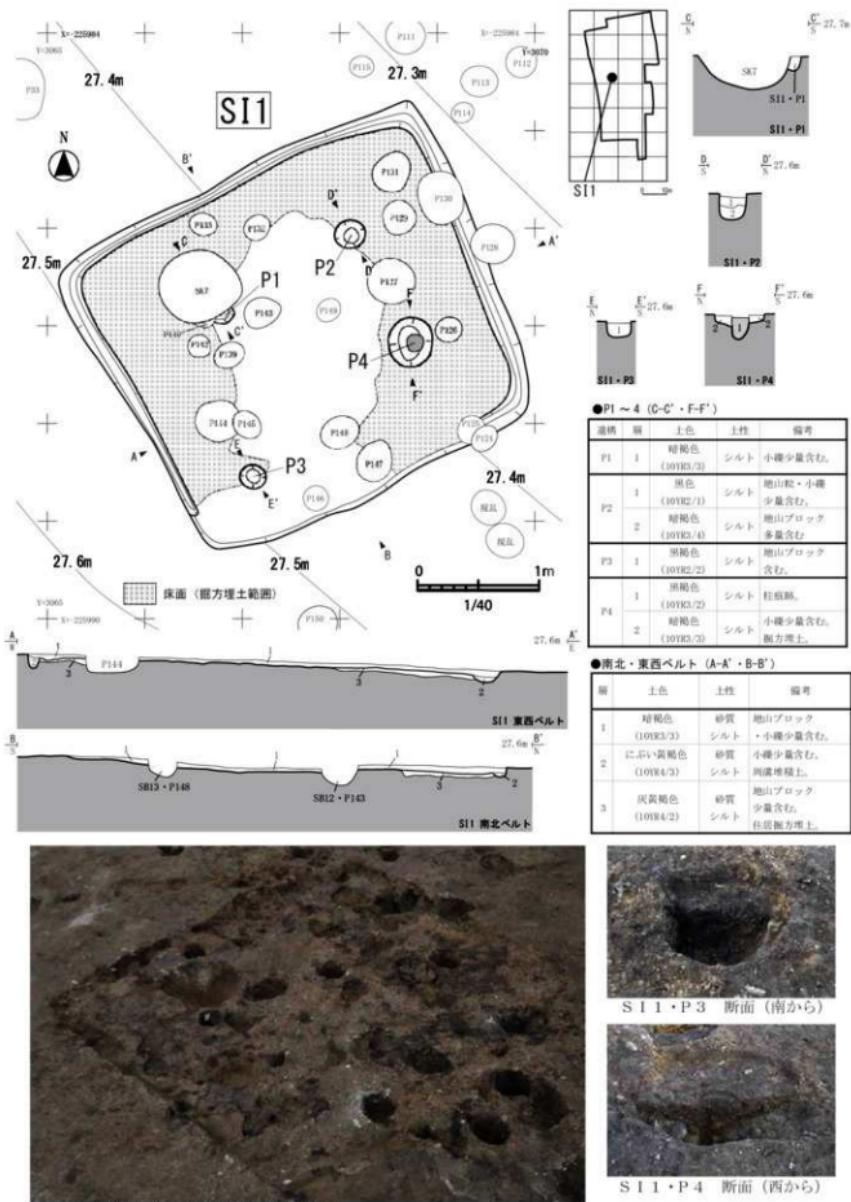
【出土遺物】出土していない。

【その他】SI1 は、平面形が隅丸方形を呈し、床面には主柱穴と思われる柱穴・ピットが四隅に配置され、周溝が壁際を巡り、床面は周縁部を掘方埋土としており、その構造が周辺で確認されている壁穴住居跡と類似している。

このことから、現地調査時、SI1 が壁穴住居跡である可能性を想定して調査を進めたが、床面や壁穴周囲で炉やカマドなどの痕跡を確認することができなかつたため、SI1 を「住居跡」として認定するには至らなかつた。したがって、本報告では SI1 を「壁穴状遺構」として報告することとした。

第 3 表 S I 1 壁穴状遺構 床面施設一覧

施設番号	種類	規模 (長軸・短軸・残存深)			備考
		長軸	短軸	残存深	
SI1・P1	小穴	円形	26	16	13
SI1・P2	小穴	楕円形	32	28	24
SI1・P3	小穴	円形	21	19	10
SI1・P4	柱穴	楕円形	51	45	25 柱痕跡・円形・径 13cm



第14図 SII 1 積穴状遺構

### 【S I 2 壁穴状遺構】(第15・16図、第4表)

A区中央の標高 27.2~27.5m 前後の平坦面に立地する。確認面は基本層IVa 層である。SB16 (P172・179)・SB18 (P181)、P173・174・175・176・177・178・180 と重複し、これらより古い。

【規模・平面形】北—南 3.8m、東—西 3.9m の隅丸方形を呈する。

【主軸方向】壁穴西辺が真北に対し、西に約 8° 傾く (N-8° -W)。

【壁】壁穴西側部分が最も残りがよく、高さ 3cm 程度残存していた。北西コーナーの一部と南壁の大部分は後世の擾乱により削平されている。

【床面】壁穴中央部周辺は地山、それ以外は掘方埋土を床面としている。床面はほぼ平坦である。

【炉・カマド】確認されなかった。

【周溝】確認されなかった。

【床面施設】柱穴跡を 3 個 (P1・2・4)、ビットを 1 個 (P3) 検出した。

柱穴 (P1・2・4) は径 30~38cm の円形を呈し、深さ 28~45cm で、径 8~17cm の円形の柱痕跡が認められた。ビット (P3) は、径 23cm の円形を呈し、深さ 28cm である。

これらの柱穴とビットは、壁穴の四隅コーナー付近に配置されていることから、主柱穴である可能性が想定される。

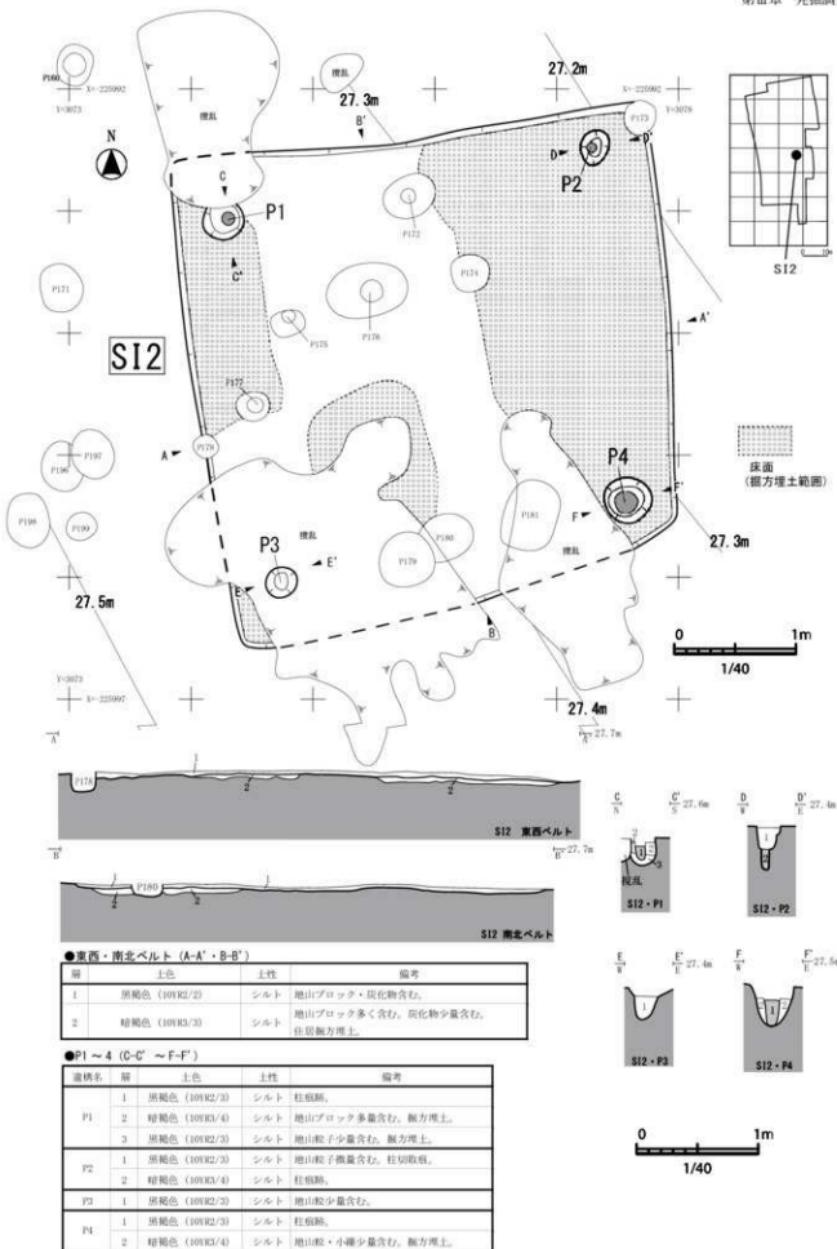
【堆積土】壁穴の堆積土は 2 層に分かれ、1 層は壁穴堆積土、2 層は壁穴の掘方埋土である。1 層は自然堆積で、2 層は人為堆積である。

【出土遺物】堆積土から、縄文土器片・土師器片 (ロクロ成形) が出土し、このうち、図示できたものは土師器坏 (第16図1) である。

【その他】SI2 は、SI1 と同様、現地調査時、壁穴住居跡である可能性を想定して調査を進めたが、床面や壁穴周囲で炉やカマドなどの痕跡を確認することができず、「住居跡」として認定するには至らなかった。したがって、本報告では SI2 を「壁穴状遺構」として報告することとした。

第4表 S I 2 壁穴状遺構 床面施設一覧

遺構 番号	種 類	規模 (長軸・短軸・残存深)				備考
		平面形	長 軸	短 軸	残 存 深	
SI2・P1	柱穴	円形?	(30)	30	40	柱痕跡: 円形・径12cm
SI2・P2	柱穴	円形	30	30	45	柱痕跡: 円形・径8cm
SI2・P3	小穴	円形	23	23	28	
SI2・P4	柱穴	円形	38	37	28	柱痕跡: 円形・径17cm



第15図 S I 2 積穴状遺構 (1)



No.	遺構・層	種別	断面	現 在	特徴【抜法（外側・内側）→台頭（外側・内側）→底蓋→その他の特徴の順に記載】	参考
1	S12 堆積土	土蜂窓	外 口縁部	外観：ロクロナゲ。内面：ロクロナゲ。色調：内外面・褐色(7.5YR6/6)。法量：口径(3.6)cm・現存高2.1cm・ 深さ0.4cm。小便上部	(C-1)	



S 1 2 竪穴状遺構 完掘状況（南から）



S 1 2 • P 1 断面（西から）



S 1 2 • P 4 断面（南から）

第16図 S 1 2 竪穴状遺構（2）

### 【S I 3 壁穴状遺構】(第17・18図、第5表)

A区南側の標高27.6～27.8m前後の平坦面に立地する。確認面は基本層IVa層である。SB19(P281)・SB20(P295)・SB23(P261)・SB38(P264)、P258・259・260・262・263・266・269・282・283・284・271と重複し、これらより古い。

【規模・平面形】北-南2.5m、東-西2.8mの隅丸方形を呈する。

【主軸方向】壁穴西辺が真北に対し、西に約5°傾く(N-5°-W)。

【壁】壁穴南辺が最も残りがよく、高さ10cm程度残存していた。

【床面】掘方埋土を床面としている。床面はほぼ平坦である。

【炉・カマド】確認されなかった。

【周溝】壁穴壁際を巡る。周溝は全周せず、壁穴南東コーナーから東辺以外で確認した。上幅12～16cm、下幅5～8cm、深さ12cm前後である。周溝は南東部分で途切れていることから、出入口は壁穴の南東付近に位置していた可能性が考えられる。

【床面施設】柱穴跡を3個(P1～3)、土坑を1個(SK1)検出した。

柱穴(P1～3)は径26～43cmの円形・楕円形を呈し、深さ13～22cmで、径9～19cmの円形・楕円形の柱痕跡が認められた。これらの柱穴は位置的にみて壁穴の主柱穴と思われる。

土坑(SK1)は、住居北東コーナー部で確認し、直径66×55cm、深さ7cmの楕円形を呈する。堆積土は1層で、自然堆積である。

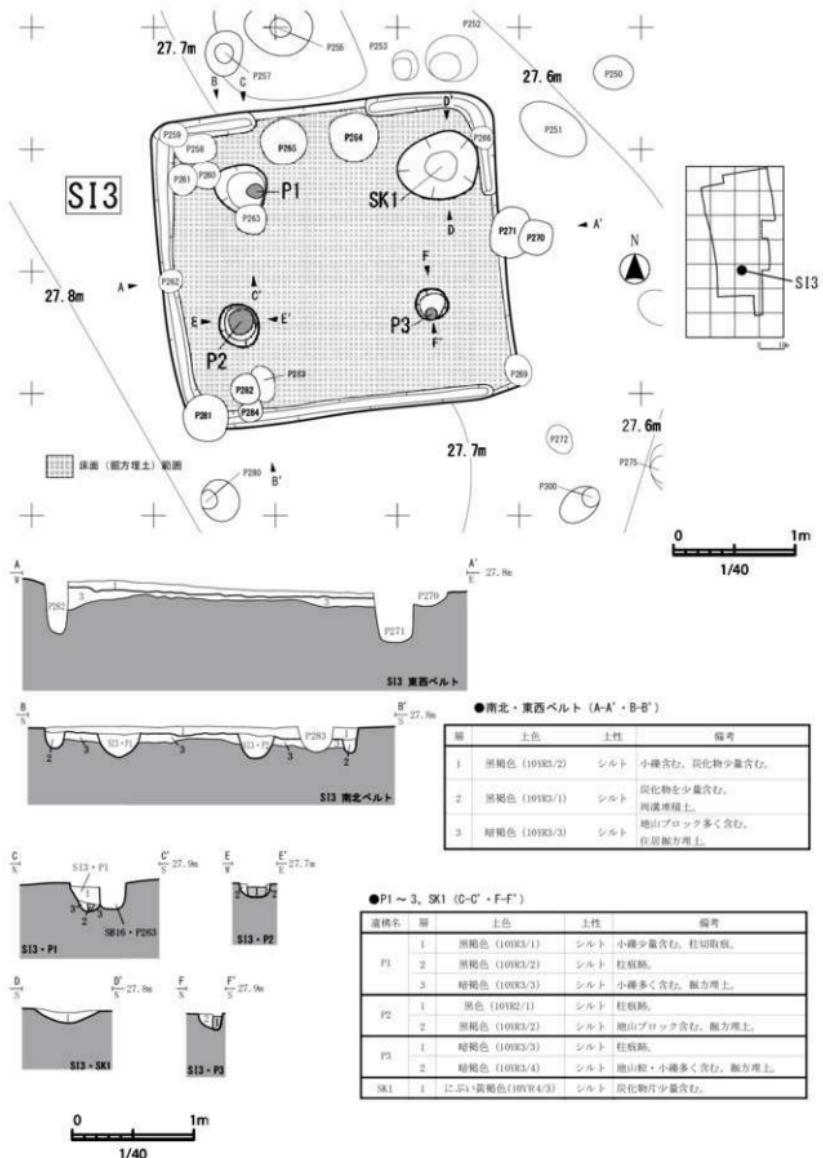
【堆積土】壁穴の堆積土は3層に分かれ、1層は壁穴堆積土、2層は周溝堆積土、3層は壁穴の掘方埋土である。1～2層は自然堆積で、3層は人為堆積である。

【出土遺物】出土していない。

【その他】SI3は、SI1・2と同様、現地調査時、壁穴住居跡である可能性を想定して調査を進めたが、床面や壁穴周囲で炉やカマドなどの痕跡を確認することができず、「住居跡」として認定するには至らなかった。したがって、本報告ではSI3を「壁穴状遺構」として報告することとした。

第5表 SI3 壁穴状遺構 床面施設一覧

遺構 番号	種類	規模(長軸・短軸・残存深)				備考
		平面形	長軸	短軸	残存深	
SI3-P1	柱穴	楕円形	43	30	22	柱痕跡：楕円形・径14cm
SI3-P2	柱穴	円形	33	33	13	柱痕跡：円形・径19cm
SI3-P3	柱穴	円形	26	24	16	柱痕跡：円形・径19cm
SI3-SK1	土坑	楕円形	66	55	7	



第17図 SI3 穴状遺構 (1)



S 13 壓穴状遺構 完掘状況（南から）



S 13・P 1 断面（西から）



S 13・SK1 断面（東から）



S 13・P2 断面（南から）



S 13・P3 断面（西から）

第18図 S 13 壓穴状遺構（2）

### 【S I 4 壓穴住居跡】(第19~21図、第6表)

B区北側の標高29.4~29.6m前後の平坦面に立地する。確認面は基本層IVa層である。SB26(P353)・SB28(P346)・SB31(P344)、P357と重複し、これらより古い。

**【規模・平面形】** 北一南3.4m、東一西3.2mの隅丸方形を呈する。

**【主軸方向】** 住居西辺が真北に対し、西に約12°傾く(N-12°-W)。

**【壁】** 住居南辺が最も残りがよく、高さ12cm程度残存していた。

**【床面】** 住居中央部から北西部は地山、それ以外は掘方埋土を床面としている。床面はほぼ平坦である。住居中央部の床面で硬化面が確認された。

**【カマド】** 住居東壁中央に付設されており、カマドの煙道・煙出・側壁・焼面が残存していた。カマドの側壁は、地山ブロックを含む暗褐色土と小礫を含む褐色土で構築されていた。

**【周溝】** 確認されなかった。

**【床面施設】** 柱穴跡を3個(P1~3)、ピットを2個(P4・5)、土坑を2基(SK1・2)検出した。

柱穴(P1~3)は、径25~37cmの円形・楕円形を呈し、深さ12~19cmで、径11~13cmの円形・楕円形の柱痕跡が認められた。これらの柱穴は、住居の主柱穴であると考えられる。

ピット(P4・5)は、径21~33cmの円形・楕円形を呈し、深さ4~9cmである。P4は、堆積土に炭化物片・焼土粒子を含み、カマド付設部付近に位置することから、カマドに関連する遺構である可能性が考えられる。P5については、その性格は不明であるが、位置的に柱穴跡である可能性が想定される。

SK1は、住居南東コーナー部で確認し、直径56×30cm、深さ8cmの楕円形を呈する。堆積土は1層の人為堆積層で、炭化物片・焼土粒子が含まれる。カマド付設部の南脇に位置することから、貯蔵穴である可能性が考えられる。SK2は、住居北西コーナー部で確認し、直径157×73cm、深さ9cmの楕円形を呈する。堆積土は1層で、地山ブロック・炭化物片を多く含む人為堆積層である。

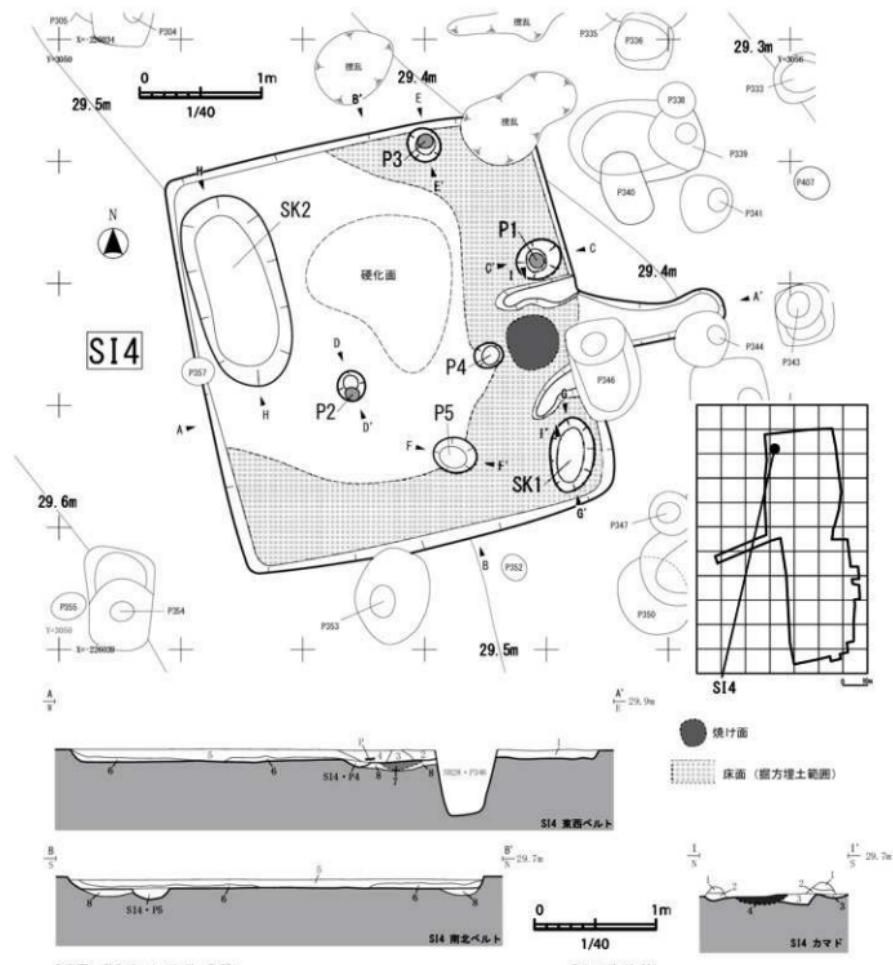
**【堆積土】** 住居の堆積土は8層に分かれ、1~4層は住居カマド堆積土、5~6層は住居堆積土、8層は住居の掘方埋土である。7層はカマド燃焼部焼面である。1~6層は自然堆積で、8層は人為堆積である。

**【出土遺物】** 住居堆積土・床面・掘方埋

土、SK1・1層、P1・2の掘方埋土、P5・  
1層から、土師器片(ロクロ成形)・  
須恵器片が出土し、このうち、国示で  
きたものは土師器坏(第20図1~3)、  
須恵器甕または鉢(第20図4)であ  
る。

第6表 S I 4 壓穴住居跡 床面施設一覧

遺構 番号	種 類	規模(長軸・短軸・残存深)				備考
		平面形	長 軸	短 軸	残存 深	
S I 4・P1	柱穴	楕円形	37	30	12	柱痕跡: 円形・径12cm、土師器
S I 4・P2	柱穴	円形	26	22	19	柱痕跡: 楕円形・径11cm、土師器
S I 4・P3	柱穴	円形	25	25	12	柱痕跡: 楕円形・径13cm
S I 4・P4	小穴	円形	21	21	4	
S I 4・P5	小穴	楕円形	33	27	9	土師器
S I 4・SK1	土坑	楕円形	96	30	8	
S I 4・SK2	土坑	楕円形	157	73	9	土師器



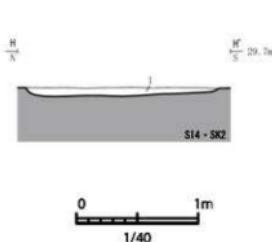
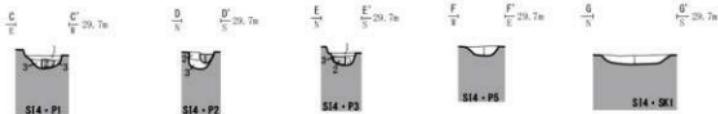
## ●東西・南北ベルト (A-A'・B-B')

層	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山ブロック微量含む。カマド通過堆積土。
2	暗褐色 (7, 3YR4/4)	シルト	地土粒子多く含む。カマド燃焼部堆積土。
3	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	地山ブロック多く含む。炭化物含む。カマド天井堆土。
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物片、地土ブロック多く含む。カマド燃焼部堆積土。
5	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	小礫・炭化物片、地山ブロック少量含む。住居堆積土。
6	暗褐色 (10YR4/4)	シルト	地山ブロック少量含む。住居堆積土。
7	赤褐色 (5YR4/6)	シルト	地山ブロック少含む。カマド焼面。
8	暗褐色 (10YR4/4)	シルト	地山ブロックまだらに含む。住居堆積土。

## ●カマド (I-I')

層	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR4/6)	シルト	小礫。カマド側壁。
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック少量含む。カマド側壁堆積土。
3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロックまだらに含む。住居堆積土。
4	赤褐色 (5YR4/6)	シルト	カマド・焼面。

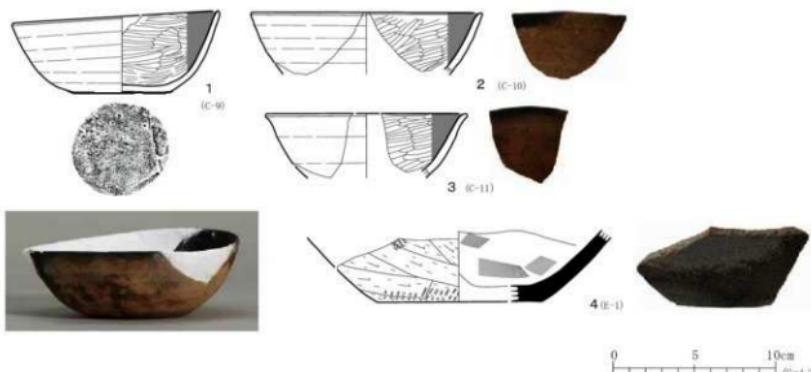
第19図 S I 4 竪穴住居跡 (1)



●P1～3・5、SK1・2 (C-C'～G-G')

遺構名	層	土色	土性	備考
P1	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	小礫・亜土粒子含む。柱切痕。
	2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	柱痕跡。
	3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒子多く含む。側方堆土。
P2'	1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	柱痕跡。
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック多く含む。側方堆土。
	3	濃い黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山ブロック多く含む。側方堆土。
P3	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック多く含む。柱切痕。
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	柱痕跡。
	3	灰黃褐色 (10YR4/2)	シルト	地山ブロック含む。側方堆土。
P4	1	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	炭化物片・小礫・微量。側上ブロック多く含む。
P5	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック含む。
SK1	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物片・機上ブロック・地山ブロック含む。
SK2	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック・炭化物片多く含む。

## SI4 出土遺物



No.	遺構・層	種別	部種	残存	特徴【外法（外面・内面）・色調（外面・内面）・位置】	目録
1	SI4 側方堆土	土師器	环	口縁部 ～底部	外面：ロクロナデ、底盤切り離し、技法不明（剥離）～回折～ツワ割りで調整？、内面：ヘラミガキ、黑色処理、色調：外面に濃い黄色(2.5YR6/4)、内面：黑色(2.5YR6/0)。法量：口径12.6cm・器高5.1cm・底径5.9cm・器厚0.3～0.5cm	C-9
2	SI4 5・6層	土師器	环	口縁部 ～脚部	外面：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ、黑色処理、色調：外面に濃い褐色(7.5YR6/4)、内面：黑色(2.5YR6/0)、法量：口径(14.2)cm・残存高3.8cm・器厚0.4cm	C-10
3	SI4 5・6層	土師器	环	口縁部 ～脚部	外面：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ、黑色処理、色調：外面に濃い赤褐色(5YR4/4)、内面：黑色(2.5YR6/0)、法量：口径(14.4)cm・残存高4.0cm・器厚0.4～0.5cm	C-11
4	SI4 5・6層	漆器器	漆or漆	底部	外面：平行タタキ～～ツワ割り、内面：ナラ、一部剥離(ツリ跡?)、色調：外面・黄灰色(2.5YR6/1)、内面・暗灰黄色(2.5YR5/2)、法量：直径(10.2)cm・残存高4.4cm・器厚0.7～1.0cm	E-1

第20図 S I 4 穫穴住居跡（2）



S I 4 壁穴住居跡  
完掘状況（南から）



S I 4・P 1 断面（北から）



S I 4・P 5 断面（南から）



S I 4・P 2 断面（西から）



S I 4・S K 1 断面（西から）



S I 4・P 3 断面（西から）



S I 4・S K 2 断面（西から）



S I 4・P 4 断面（南から）



S I 4 カマド 完掘状況（西から）

第21図 S I 4 壁穴住居跡（3）

### 【S I 5 竪穴住居跡】(第22～24図、第7表)

B区中央の標高30.7～30.9m前後の平坦面に立地する。確認面は基本層III層である。住居北部は後世の削平を受けており、残存していない。

【規模・平面形】北一南2.5m以上、東一西4.1mの隅丸方形を呈する住居跡と思われる。

【主軸方向】真北である(N-0°-W)。

【壁】住居南辺が最も残りがよく、高さ10cm程度残存していた。住居壁は、北半が後世の削平を受け、残存していない。

【床面】地山を床面としている。床面はほぼ平坦である。

【カマド】住居南壁中央に付設されており、カマドの煙道・側壁・焼面が残存していた。カマドの側壁は、小砾・地山ブロックを含むにぶい黄褐色土で構築されており、その内側が部分的に被熱を受け赤く変色していた。

【周溝】確認されなかった。

【床面施設】柱穴跡を4個(P1～4)検出した。

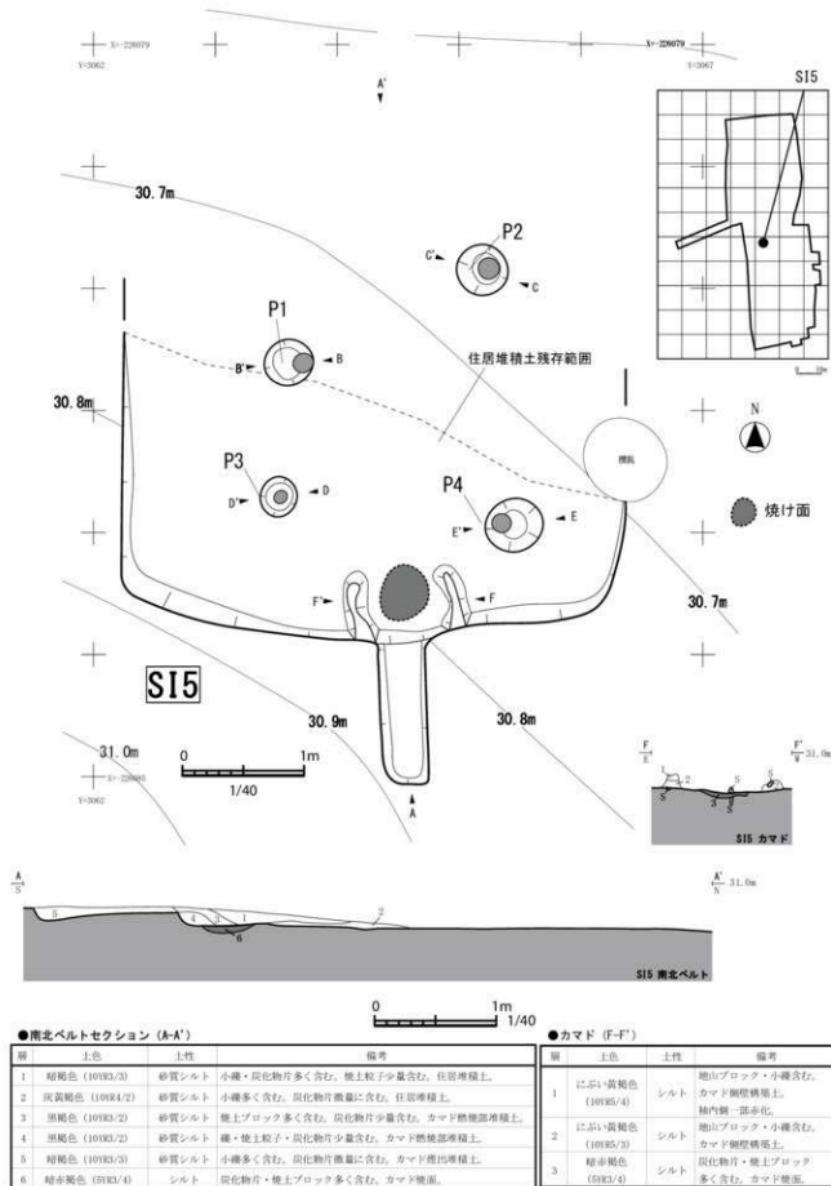
柱穴(P1～4)のうち2個(P1・2)は住居北側の壁・堆積土残存範囲外で検出されたが、周辺に掘立柱建物跡が存在しないことや住居想定範囲内に位置することから、住居に伴う柱穴跡として認定した。柱穴は径32～50cmの円形・楕円形を呈し、深さ15～20cmで、径11～26cmの円形・楕円形の柱痕跡が認められた。これらの柱穴は、位置的にみて、住居の主柱穴であると考えられる。

【堆積土】住居の堆積土は5層に分かれ、1・2層は住居堆積土、3～5層は住居カマド堆積土である。いずれも自然堆積である。なお、住居堆積土は住居南半のみ残存していた。

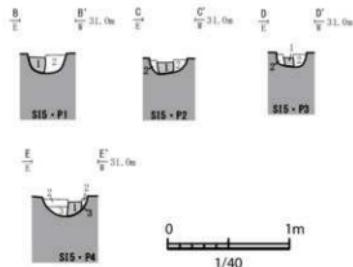
【出土遺物】住居床面、カマド燃焼部・煙出、カマド東側の側壁から、土師器片(非ロクロ成形・ロクロ成形)・須恵器片が出土し、このうち、図示できたものは土師器坏(第23図1～4)・甕(第23図5・6)である。

第7表 S I 5 竪穴住居跡 床面施設一覧

基積 番号	種類	規模(長軸・短軸・残存深)				備考
		平面形	長 軸	短 軸	残存 深	
SIS-P1	柱穴	椭円形	36	30	20	柱痕跡：椭円形・径26cm
SIS-P2	柱穴	円形	41	38	16	柱痕跡：円形・径18cm
SIS-P3	柱穴	椭円形	32	32	15	柱痕跡：椭円形・径15cm
SIS-P4	柱穴	椭円形	50	44	17	柱痕跡：円形・径16cm

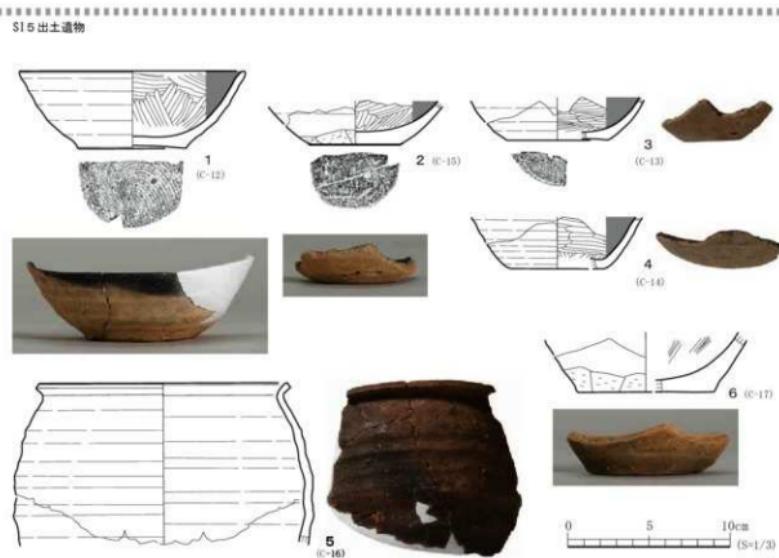


第22図 SI5 竪穴住居跡 (1)



●P1 ~ 4 (B-B' ~ E-E')

遺構名・層	土色	土性	備考
P1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	柱状跡。
	にぶい黒褐色 (10YR4/3)	シルト	小礫多く含む。偏方堆土。
P2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	柱状跡。
	にぶい暗褐色 (10YR4/3)	シルト	小礫多く含む。偏方堆土。
P3	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	柱状跡。
	にぶい暗褐色 (10YR4/3)	シルト	小礫多く含む。偏方堆土。
P4	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	柱状跡。
	にぶい暗褐色 (10YR4/3)	シルト	小礫多く含む。偏方堆土。
	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	小礫多く含む。偏方堆土。



No.	遺構・層	種別	断面	様子	特徴【底法（外側・内面）→側面（外側・内面）→正面→その他の特徴の順に記載】	参考
1	SI5 床面	土師器	环	口縁部 ～底部	外側：クロコナデ。底部回転糸切り無調整。内面：～ハリミガキ。黑色地彌。色調：外側：にぶい黄褐色 (10YR6/4)。内面：黑色 (N2/0)。法量：口径 (13.3) cm・底高 4.8cm・底径 6.6cm・厚さ 4.0~9.0cm。残存 50%。	C-12
2	SI5カマド 燃焼部	土師器	环	脚部 ～底部	外側：クロコナデ。脚部下端～ラ脚り。底部回転糸切り無調整。内面：ハリミガキ。黑色地彌。色調：外側：にぶい褐色 (7.0YR6/4)。内面：黑色 (N2/0)。法量：底径 5.5cm・残存高 2.7cm・厚さ 0.4~1.0cm	C-15
3	SI5カマド 燃焼部	土師器	环	脚部 ～底部	外側：クロコナデ。底部切引離し技術不明。凹輪～ハラケ～ラ脚り。黑色地彌。色調：外側：にぶい褐色 (7.0YR7/4)。内面：黒褐色 (N2/0)。法量：底径 6.2cm・残存高 2.6cm・厚さ 0.4~0.7cm	C-13
4	SI5カマド 燃焼部	土師器	环	脚部 ～底部	外側：クロコナデ。底部切引離し技術不明。内面：ハリミガキ。黑色地彌。色調：外側：にぶい黄褐色 (10YR6/3)。内面：黑色 (N2/0)。法量：底径 5.9cm・残存高 3.2cm・厚さ 0.4~0.6cm	C-14
5	SI5カマド 煙出孔	土師器	變	口縁部 ～脚部	外側：クロコナデ。内面：クロコナデ。色調：外側～内面にぶい褐色 (7.0YR5/3)。法量：口径 (15.2) cm・残存高 10.0cm・厚さ 0.4~0.6cm	C-16
6	SI5 床面	土師器	變	底部	外側：ハリミガキ（擦痕）。底部切り離し技术不詳（崩壊）。内面：ナラ。黑色化。崩壊。色調：外側：にぶい褐色 (7.0YR5/4)。内面：黒褐色 (10YR3/1)。法量：底径 (6.4) cm・残存高 3.7cm・厚さ 0.7cm	C-17

第23図 SI5 積穴住居跡（2）



S 15 堪穴住居跡 完掘状況（東から）



S 15 カマド 完掘状況（南から）



S 15・P1 断面（北から）



S 15・P2 断面（南から）



S 15・P3 断面（北から）



S 15・P4 断面（北から）

第24図 S 15 堪穴住居跡（3）

## 【SI6 堪穴状遺構】(第25図)

B区中央やや東側の標高30.2~30.3m前後の平坦面に立地する。確認面は基本層III層である。SK24と重複し、これより新しい。住居北部は後世の削平を受けており、残存していない。

**【規模・平面形】**北一南2.9m以上、東一西3.9mの隅丸方形を呈する堪穴と思われる。

**【主軸方向】**ほぼ真北である(N-0°~W)。

**【壁】**堪穴南辺が最も残りがよく、高さ10cm程度残存していた。

**【床面】**地山を床面としている。床面はほぼ平坦である。

**【炉・カマド】**確認されなかった。

**【周溝】**確認されなかった。

**【床面施設】**柱穴跡を1個(P1)、ピットを1個(P2)検出した。

柱穴(P1)は径31cmの円形を呈し、深さ26cmで、径13cmの円形の柱痕跡が認められた。ピット(P2)は、径32cmの円形を呈し、深さ3cmである。

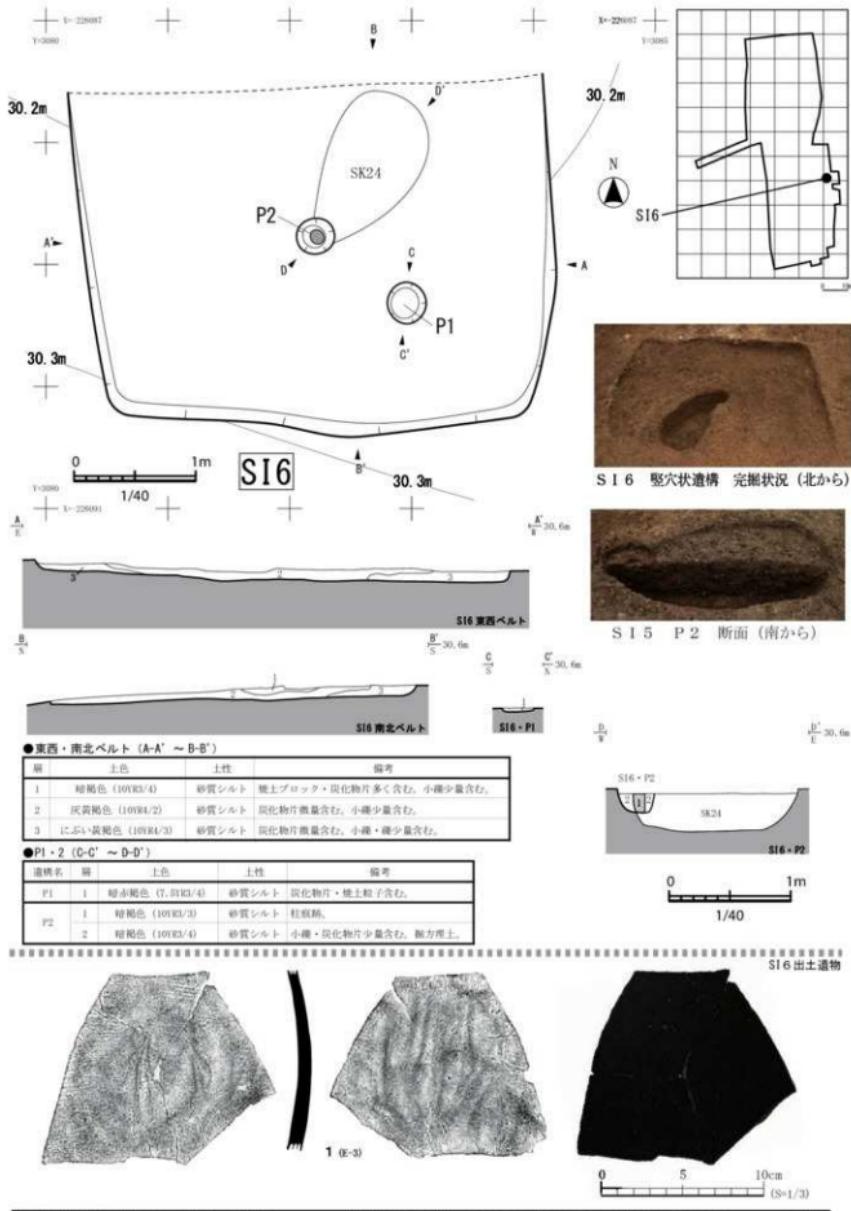
**【堆積土】**堪穴の堆積土は3層に分かれ、いずれも堪穴の堆積土で、自然堆積である。

**【出土遺物】**堪穴の堆積土から、土師器片(ロクロ成形)・須恵器片が出土し、このうち、図示できたものは須恵器甕(第25図1)である。

**【その他】**SI6は、SI1・2・3と同様、現地調査時、堪穴住居跡である可能性を想定して調査を進めたが、床面や堪穴周囲で炉やカマドなどの痕跡を確認することができず、また堪穴の周囲でも柱穴等が認められないことから、「住居跡」として認定するには至らなかった。したがって、本報告ではSI6を「堪穴状遺構」として報告することとした。



石垣遺跡 作業風景



第25図 S16 壓穴状遺構

## 【S I 7 壁穴住居跡】(第26・27図、第8表)

B区南東の標高30.5~30.8m前後の平坦面に立地する。確認面は基本層Ⅲ層である。P504と重複し、これより古い。住居北部は後世の削平を受けており、残存していない。

【規模・平面形】北一南3.5m以上、東一西5.1mの隅丸方形を呈する住居跡と思われる。

【主軸方向】ほぼ真北である(N-0°-W)。

【壁】住居南辺が最も残りがよく、高さ9cm程度残存していた。住居壁は、北半が後世の削平を受け、残存していない。

【床面】地山を床面としている。床面はほぼ平坦である。

【カマド】住居南壁中央に付設されており、カマドの煙道・側壁が残存していた。カマドの側壁は、小礫・地山粒子・炭化物片等を含むにぶい黄褐色・灰黄褐色・暗褐色土で構築されている。

【周溝】住居壁際を巡る。周溝は全周せず、南壁のカマド付設部分以外で確認した。上幅11~34cm、下幅6~14cm、深さ8cm前後である。

【床面施設】柱穴跡を3個(P1~3)、ピットを2個(P4・5)、土坑1基(SK1)検出した。

柱穴のうち1個(P1)は住居北側の壁・堆積土残存範囲外で検出されたが、周辺に掘立柱建物跡が存在しないことや住居想定範囲内に位置することから、住居に伴う柱穴跡として認定した。柱穴(P1~3)は径36~50cmの円形・楕円形を呈し、深さ24~32cmで、径16~21cmの楕円形の柱痕跡が認められた。これらの柱穴は、住居の四隅に位置することから、住居の主柱穴であると考えられる。また、P1~3の位置関係から、S17の主柱穴は住居跡北東部にも存在した可能性が想定されるが、その部分には後世の搅乱が位置することから、この搅乱に削平されたとみられる。

ピット(P4・5)は、径29~44cmの円形・楕円形を呈し、深さ25~27cmである。

SK1は、住居南西部の壁際で確認し、直径64×38cm、深さ26cmの楕円形を呈する。堆積土は2層に分かれ、炭化物片・焼土粒子が含まれる自然堆積である。カマド付設部の西脇に位置することから、貯蔵穴である可能性が考えられる。

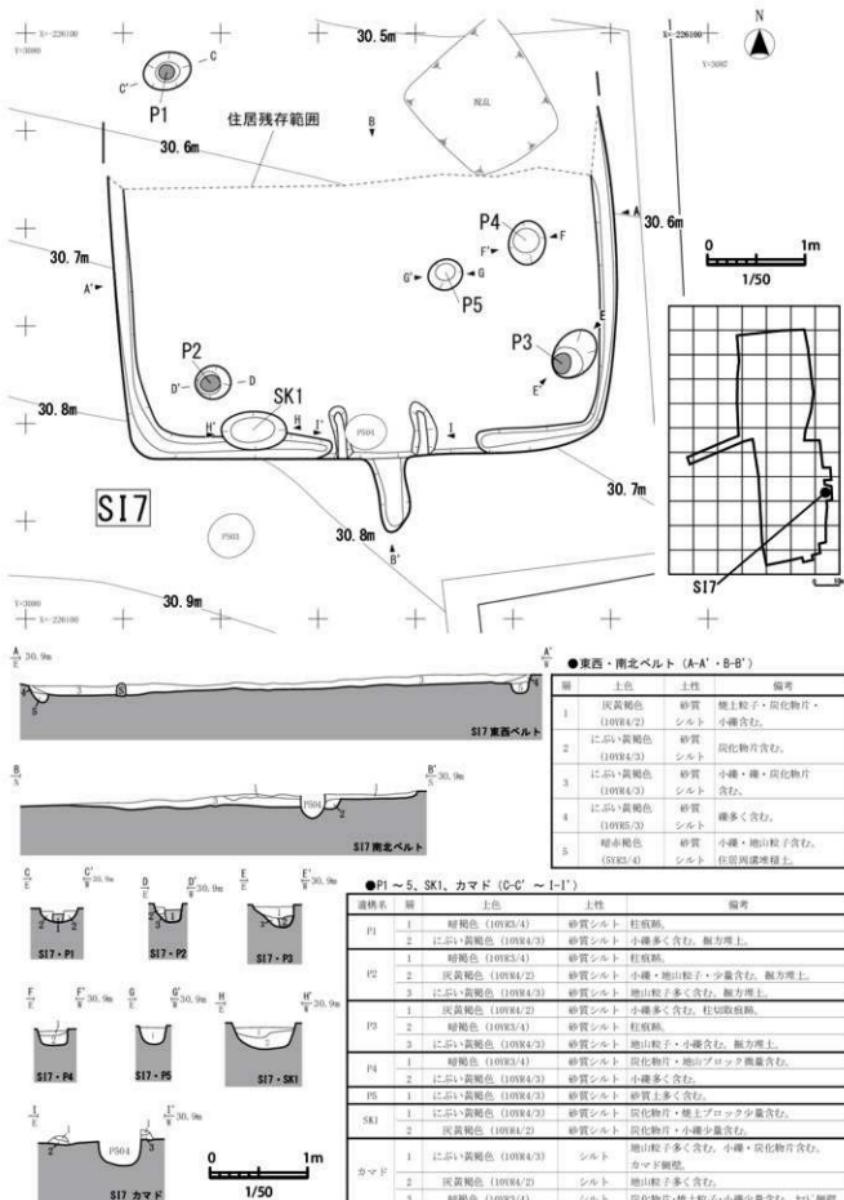
【堆積土】住居の堆積土は5層に分かれ、1~4層は住居堆積土、5層は周溝堆積土である。いずれも自然堆積である。なお、住居堆積土は住居南半のみ残存していた。

【出土遺物】住居堆積土、カマド燃

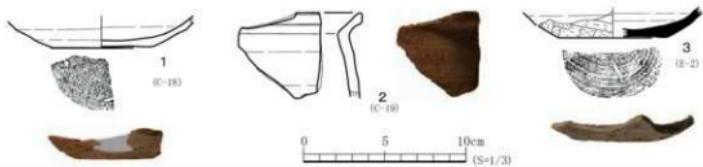
焼部・煙道、P1の掘方埋土から、  
土師器片(非ロクロ成形・ロクロ  
成形)・須恵器片が出土し、このう  
ち、図示できたものは土師器坏(第  
27図1)・甕(第27図2)、須恵器  
坏(第27図3)である。

第8表 S I 7 壁穴住居跡 床面施設一覧

追跡 番号	種 類	規模(長軸・短軸・残存深)			備考
		平 面 形	長 軸	短 軸	
S17・P1	柱穴	楕円形	48	38	24 柱痕跡: 楕円形・径16cm, 土師器
S17・P2	柱穴	円形	37	36	32 柱痕跡: 楕円形・径20cm
S17・P3	柱穴	楕円形	50	38	29 柱痕跡: 楕円形・径21cm
S17・P4	小穴	楕円形	44	36	27
S17・P5	小穴	円形	30	29	25
S17・SK1	土坑	楕円形	64	38	26



第26図 S17 穴住居跡 (1)



No.	遺構・層	種別	器種	残存	特徴【外縁・内面】→色調（外縁・内面）→底面→その他の特徴の順に記載】		号録
					外縁	内面	
1	S17 3層	土器	壺	底部	外縁：ロクロナダ・底部切り離し技術不明→ヘラ削り内調査。内面：ロクロナダ。色調：外縁・にぶい黄褐色(1.0186/3)、内面・削赤褐色(S18S.6)。法量：底径6.0cm・残存高2.0cm・調厚0.3~0.6cm。赤壁土器		C-18
2	S17カマド 火候部 上層	土器	壺	口縁部	外縁：ロクロナダ。内面：ロクロナダ。色調：外縁・にぶい褐色(1.0186/4)、内面・にぶい褐色(7.0185/4)。法量：調厚0.5~0.6cm		C-19
3	S17 3層	壺	壺	底部	外縁：ロクロナダ・底部下端手持ちヘラ削り・底部削断糸切り未調査。内面：ロクロナダ。色調：内外面・灰黄色(2.5Y6/2)。法量：底径6.6cm・残存高1.9cm・調厚0.4~0.7cm		E-2

S17 積穴住居跡  
完掘状況（北から）

S17 P1 断面（北から）



S17 P3 断面（北から）



S17 P4 断面（北から）



S17 P2 断面（北から）



S17 SK1 断面（北から）

第27図 S17 積穴住居跡（2）

### 【S I 8 穫穴住居跡】(第28~31図、第9表)

B区南東の標高30.8~31.0m前後の平坦面に立地する。確認面は基本層III層である。

【規模・平面形】北-南4.8m、東-西5.2mの隅丸方形を呈する。

【主軸方向】住居西辺が真北に対し、東に約12°傾く(N-12°-E)。

【壁】住居西辺が最も残りがよく、高さ14cm程度残存していた。

【床面】地山を床面としている。床面はほぼ平坦である。

【炉】住居中央やや西寄りで1基確認した。地床炉で、炉には掘方が認められた。

【周溝】確認されなかった。

【床面施設】柱穴跡を5個(P1~5)、ピットを1個(P6)、土坑2基(SK1・2)検出した。

柱穴(P1~5)は径21~42cmの円形を呈し、深さ16~30cmで、径15~20cmの円形・楕円形の柱痕跡が認められた。P4は柱が抜き取られていた。これらの柱穴のうち、P1~4については、住居の四隅に位置することから、住居の主柱穴であると考えられる。また、P5についても上屋を支えた柱穴であると思われる。

ピット(P6)は、径35cmの円形を呈し、深さ13cmである。

SK1は、住居北東部で確認し、直径63×59cm、深さ28cmの円形を呈する。堆積土は2層に分かれ、1層は炭化物片を多く含む人為堆積、2層は自然堆積である。SK2は、住居中央部で確認し、直径72×61cm、深さ19cmの楕円形を呈する。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。

【堆積土】住居の堆積土は4層に分かれ、いずれも住居堆積土で、自然堆積である。

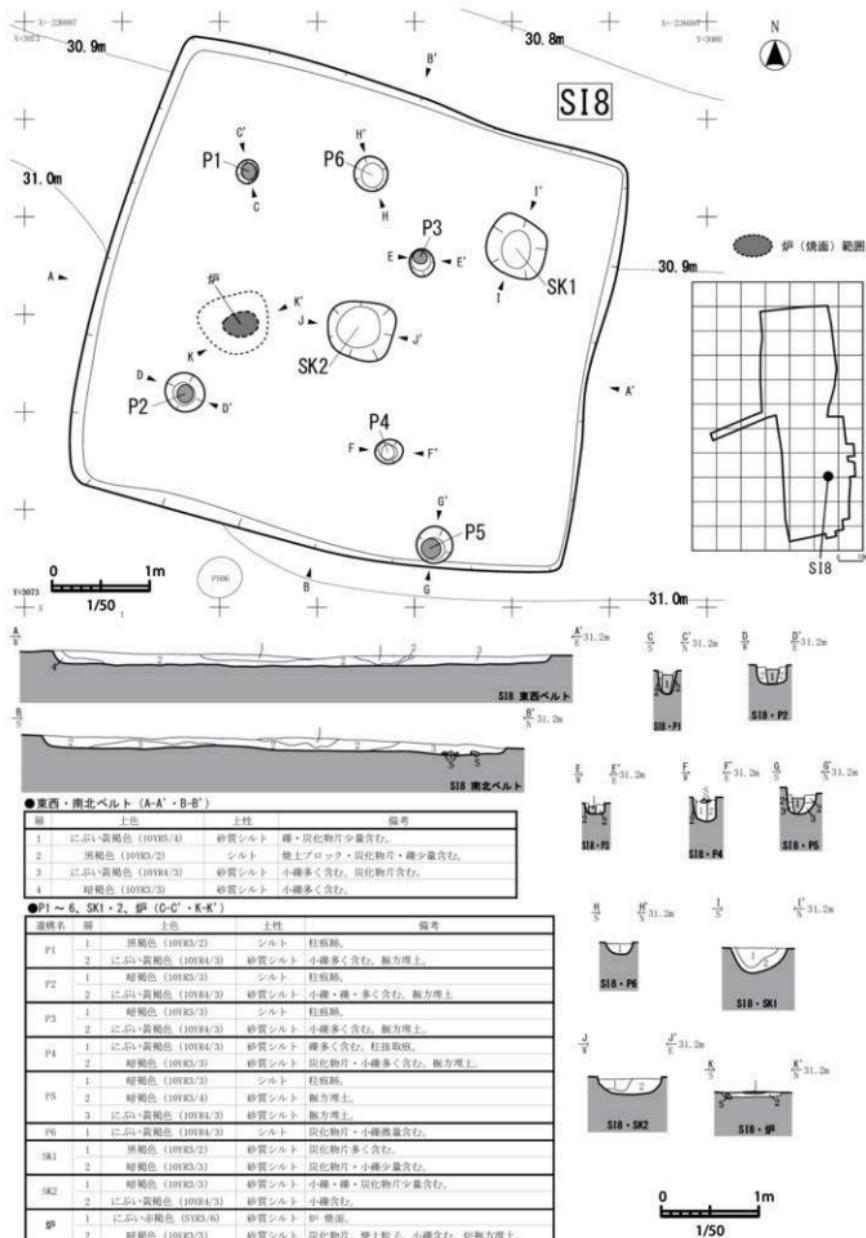
【出土遺物】住居堆積土・床面、SK1・1層から土師器片(非ロクロ成形)が出土し、このうち、図示できたものは土師器器台(第30・31図1)・鉢?(第30・31図2)・壺?(第30・31図3)・甕(第30・31図4~7)である。

第9表 S I 8 穫穴住居跡 床面施設一覧

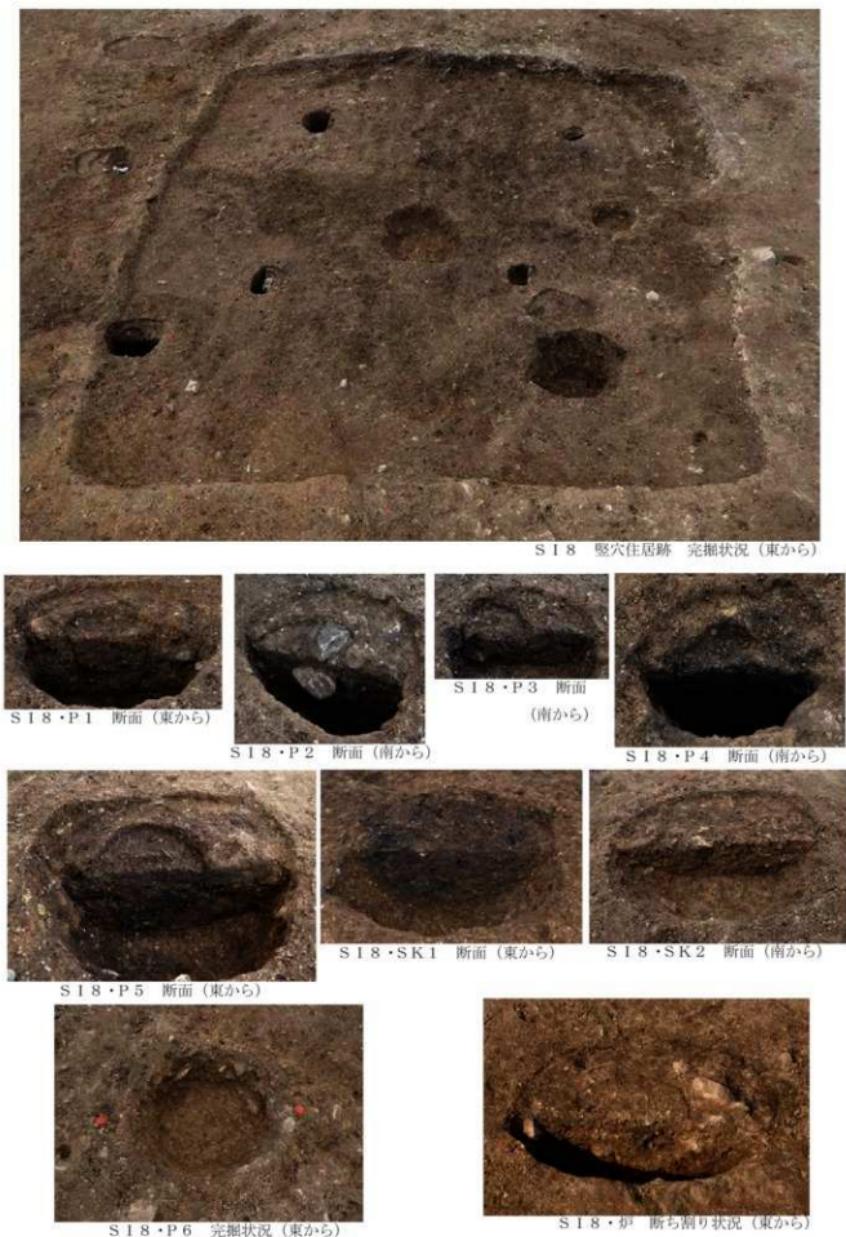
遺構 番号	種類	規模(長軸・短軸・残存深)				備考
		平面形	長軸	短軸	残存深	
S I 8 - P1	柱穴	円形	24	21	30	柱痕跡: 楕円形・径18cm
S I 8 - P2	柱穴	円形	42	41	30	柱痕跡: 楕円形・径18cm
S I 8 - P3	柱穴	円形	25	24	16	柱痕跡: 楕円形・径15cm
S I 8 - P4	柱穴	円形	31	26	29	柱抜取
S I 8 - P5	柱穴	円形	38	37	20	柱痕跡: 円形・径20cm
S I 8 - P6	小穴	円形	35	35	13	
S I 8 - SK1	土坑	円形	63	59	28	土師器
S I 8 - SK2	土坑	楕円形	72	61	19	



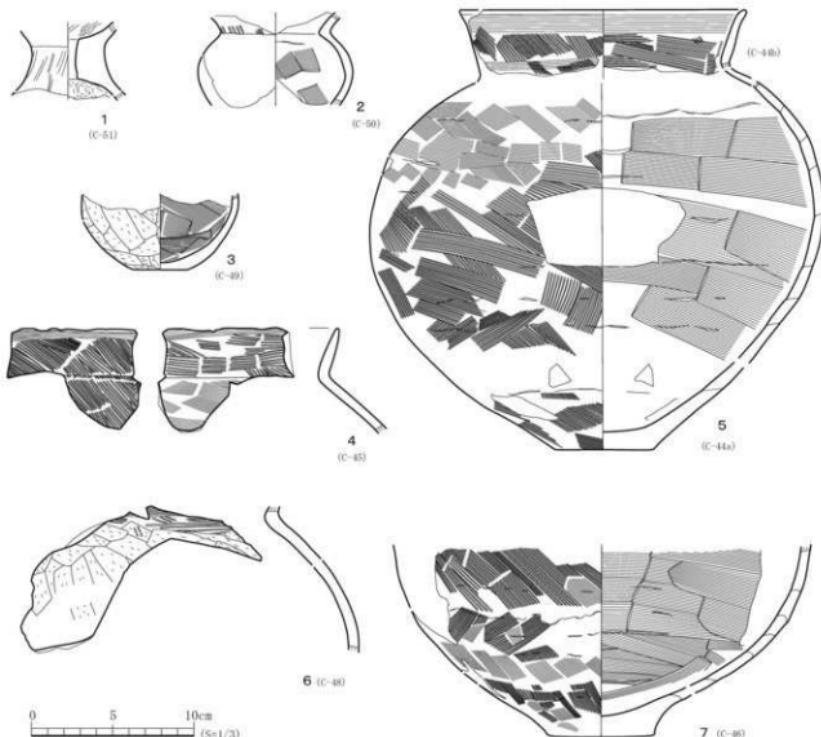
石垣遺跡 S I 8 穫穴住居跡 作業風景



第28図 S I 8 竪穴住居跡（1）



第29図 S I 8 壁穴住居跡（2）



No.	遺構・層	種別	器種	理存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→位置→その他の特徴の順に記載】	登録
1	S18 床面	土師器	器底	脚部	外面：受底部強めのため不明。脚部ヘタニギリ（断続）。内面：受底部ラミダギ、脚部折オサベ。色調：外面・黄褐色（7.5YR6/6）、内面・に赤い黄褐色（7.5YR5/4）。法量：残存高4.8cm・底厚0.5~1.2cm。貫通孔有り	C-51
2	S18 2層	土師器	器底	～底部	脚部：ヘタラジ。内面：ヘラナデ。色調：外面部・に赤い褐色（7.5YR5/4）。法量：直径3.6cm・残存高4.2cm・底厚0.4~0.7cm	C-49
3	S18 2層	土師器	器底	～脚部	外面：頸部ハケメ・脚部崩壊のため不明。内面：頸部崩壊のため不明・脚部ヘタラジ。色調：内外面・に赤い黄褐色（7.5YR7/4）。法量：脚部径9.5cm・残存高6.2cm・底厚0.5~0.7cm。小型器底跡の可能性有り	C-50
4	S18 3層	土師器	底	口縁部	外面：口唇部ヨコナギ、頸部～脚部ハケメ。内面：口縁部ヨコナギ・頸部ハケメ・脚部ナゲヘラナデ。色調：外面・に赤い黄褐色（10YR5/3）。内面・に赤い褐色（7.5YR5/4）。法量：底厚0.3~0.7cm	C-45
5	S18 3層	土師器	底	～底部	脚部：脚部下平ナギメ・脚部下平ハケメ・底部輪行技法？、内面・ハラナデ。色調：外面・赤色（10R5/8）、内面・明赤褐色（5YR5/6）。法量：底径6.1cm・残存高22.8cm・底厚0.4~1.3cm。内外面・輪幅痕	C-44a
			口縁部	～頸部	外面：ハケメヨコナギ。内面：ハクメヨコナギ。色調：外面・褐色（2.5YR6/6）、内面・褐色（7.5YR7/6）。法量：口径17.7cm・残存高3.8cm・底厚0.35~0.6cm	C-44b
6	S18 堆積土	土師器	底	脚部	外面：頸部（上）ヨコナギ・頸部～脚部ハケメ～ハラ削り。内面：ヨコナギ。色調：外面・に赤い赤褐色（5YR4/3）、内面・灰褐色（7.5YR4/2）。法量：底厚0.6~0.9cm	C-48
7	S18 堆積土	土師器	底	～底部	外面：ハケメヨコナギ・底部輪行技法？、内面・ハラナデ。色調：外面・褐色（5YR6/6）、内面・明赤褐色（2.5YR5/6）。法量：直径6.7cm・残存高11.9cm・底厚0.55~1.3cm。内外面・輪幅痕有り	C-46

第30図 S18 堅穴住居跡（3）



第31図 S18 壇穴住居跡（4）

## 【S I 9 穹穴住居跡】(第32~37図、第10表)

B区南端の標高31.4~31.7m前後の平坦面に立地する。確認面は基本層III層である。SK28・29・30・31・32と重複し、SK28・30・31より古く、SK29・32より新しい。

【規模・平面形】北~南5.5m、東~西6.9mの隅丸長方形を呈する。

【主軸方向】住居西辺が真北に対し、東に約22°傾く(N-22°-E)。

【壁】住居西辺が最も残りがよく、高さ15cm程度残存していた。

【床面】住居北西部・東辺の一部は地山、それ以外は掘方埋土が床面である。床面はほぼ平坦である。

【炉】住居中央で1基確認した。地床炉である。

【周溝】確認されなかった。

【床面施設】柱穴跡を7個(P1~7)、ピットを3個(P8~10)、土坑2基(SK1・2)検出した。

柱穴(P1~7)は径23~42cmの円形を呈し、深さ11~32cmで、径11~17cmの円形・楕円形の柱痕跡が認められた。

ピット(P8~10)は、径20~35cmの円形を呈し、深さ9~29cmである。

土坑(SK1・2)は、住居南辺の壁際で検出し、その重複関係からSK2はSK1より新しい。SK1は、直径145×116cm、深さ42cmの楕円形を呈する。土坑底面の中央部がさらにPit状に掘り込まれており、長軸方向の断面形は漏斗状となる。堆積土は5層に分かれ、いずれも人為堆積である。SK2は、直径60×55cm、深さ25cmの不整形を呈する。堆積土は2層に分かれ、いずれも人為堆積である。

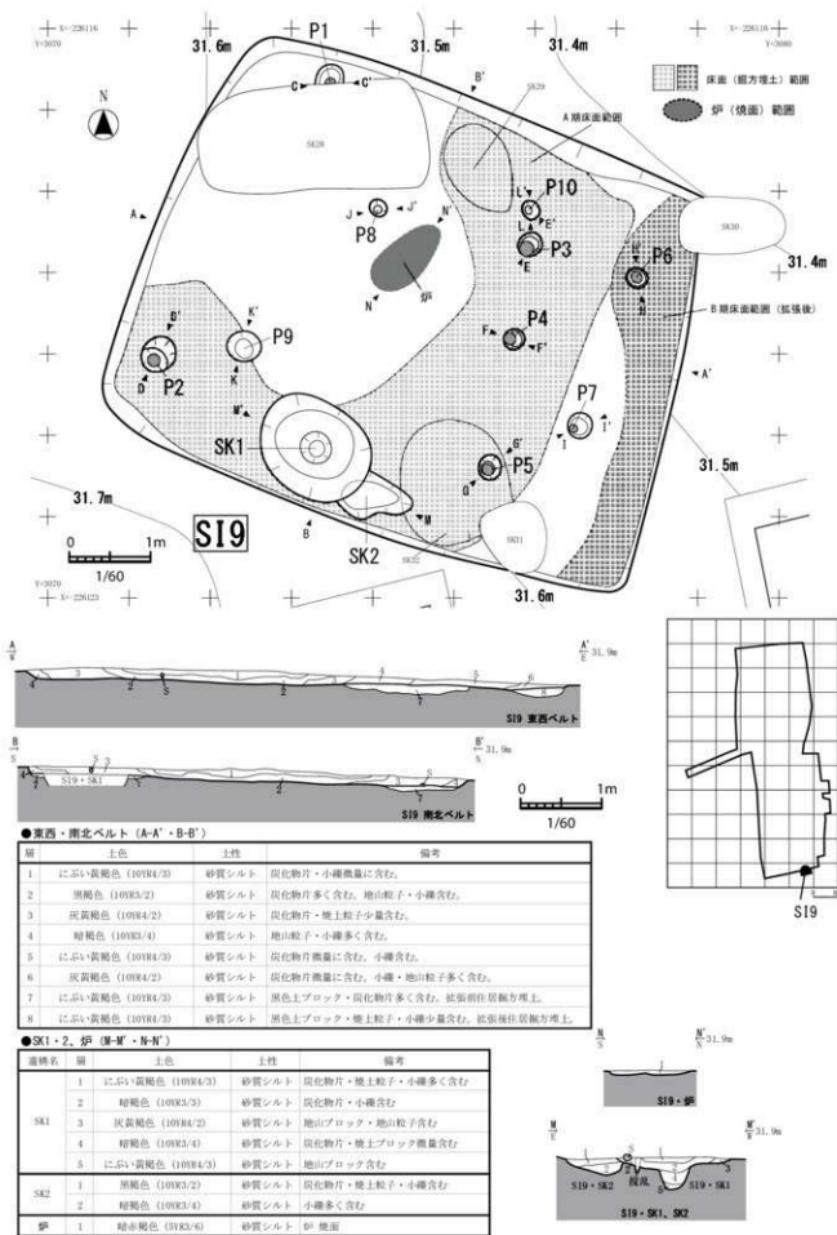
【堆積土】住居の堆積土は8層に分かれ、1~6層は住居堆積土、7~8層は住居掘方埋土である。1~6層が自然堆積、7~8層が人為堆積である。

【出土遺物】住居検出面・堆積土・床面直上層(2・3層)、P5の掘方埋土、SK1・1層、SK2・2層から土師器片(非クロ成形、検出面のみクロ成形)が出土し、このうち、図示できたものは土師器鉢(第34・35図1~4)・壺(第34・35図5)・甕(第34・35図6・第36・37図7~10)・壺または甕(第36・37図11・12)である。

【住居の拡張】SI9の床面は、地山と掘方埋土を床としている。このうち、掘方埋土を床とする範囲は、住居中央部から南西にかけての範囲(掘埋a)と住居東辺の範囲(掘埋b)に大きく分けられる。この二つの掘方埋土には重複関係が認められ、掘埋a→掘埋bの順で床面が構築されている状況であった。この掘埋aと掘埋bの間には、地山を床とする範囲があり、加えて、掘埋aの東辺範囲は隅丸方形の形状となる。こうした床面の状況から、SI9は、住居構築時においては、掘埋a範囲の東辺を東端とする南北5.5m×東西5.5mの隅丸方形を呈する住居【SI9a期: 主要床面施設 P1~5(主柱穴)・SK2・炉】であったが、その後、住居東側を1.4mほど拡張し、拡張範囲の壁際付近のみ掘方埋土を床とする範囲を設け、最終的には南北5.5m×東西6.9mの隅丸長方形を呈する住居【SI9b期: 主要床面施設 P1~5+P6・7(主柱穴)・SK1・炉】として機能したと想定される。

第10表 SI9 穹穴住居跡 床面施設一覧

遺構 番号	種 類	規模(長幅・短幅・残存深)			備考	
		平面形	長幅	短幅		
SI9-P1	柱穴	円形	26	(26)	11	柱底跡・円形・径11cm
SI9-P2	柱穴	円形	42	40	30	柱底跡・円形・径16cm
SI9-P3	柱穴	円形	31	29	30	柱底跡・円形・径17cm
SI9-P4	柱穴	円形	23	23	28	柱底跡・椭円形・径16cm
SI9-P5	柱穴	円形	29	29	32	柱底跡・椭円形・径16cm、土師器
SI9-P6	柱穴	円形	28	28	23	柱底跡・椭円形・径16cm
SI9-P7	柱穴	円形	17	16	16	柱底跡・円形・径11cm
SI9-P8	小穴	円形	23	22	9	
SI9-P9	小穴	円形	28	24	29	
SI9-P10	小穴	円形	26	26	13	
SI9-SK1	土坑	椭円形	145	116	42	土師器
SI9-SK2	土坑	不規則	60	55	25	土師器



第32図 SI9 積穴住居跡 (1)

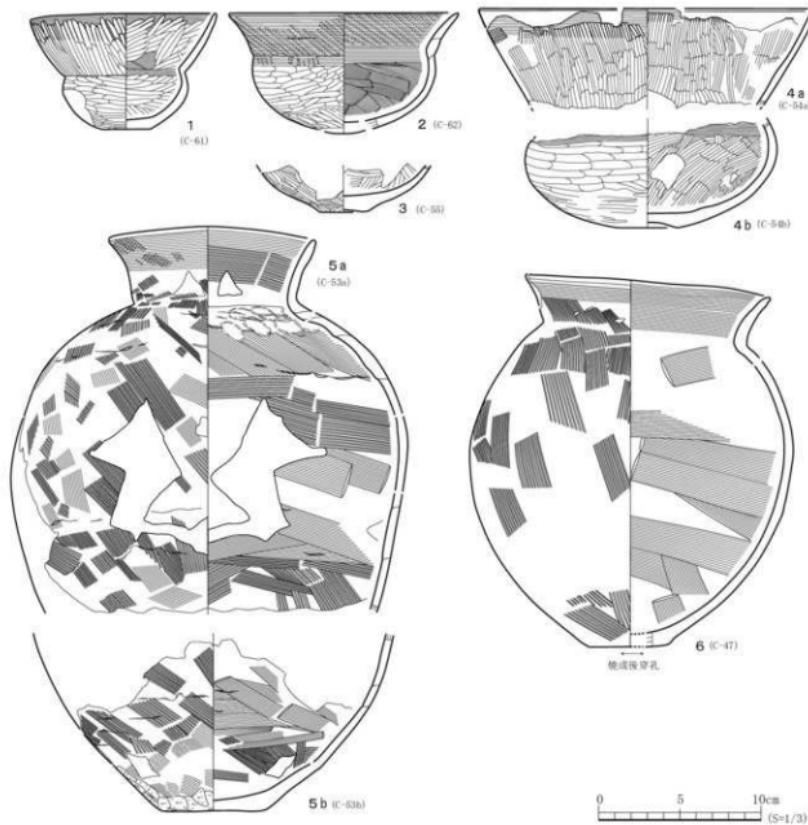


●P1 ~ 10 (C-C'・L-L')

地名	層	土色	土性	参考
P1	1	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	柱痕跡。
	2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	小礫多く含む。極力理土。
P2	1	暗褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	柱痕跡。
	2	灰暗褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	地山 (砂質シルト上) 粒子多く含む。極力理土。
P3	1	暗褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	柱痕跡。
	2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	極力理土。
P4	1	暗褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	柱痕跡。
	2	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	地土粒子・小礫含む。極力理土。
P5	1	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	柱痕跡。
	2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	炭化物片・地土粒子・小礫含む。極力理土。
P6	1	暗褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	柱痕跡。
	2	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	小礫・地山ブロック多く含む。極力理土。
P7	1	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	柱痕跡。
	2	灰暗褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	小礫含む。極力理土。
P8	1	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	小礫含む。
P9	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	小礫少量含む。
P10	1	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	炭化物片微量含む。



第33図  
S19  
豈穴住居跡（2）

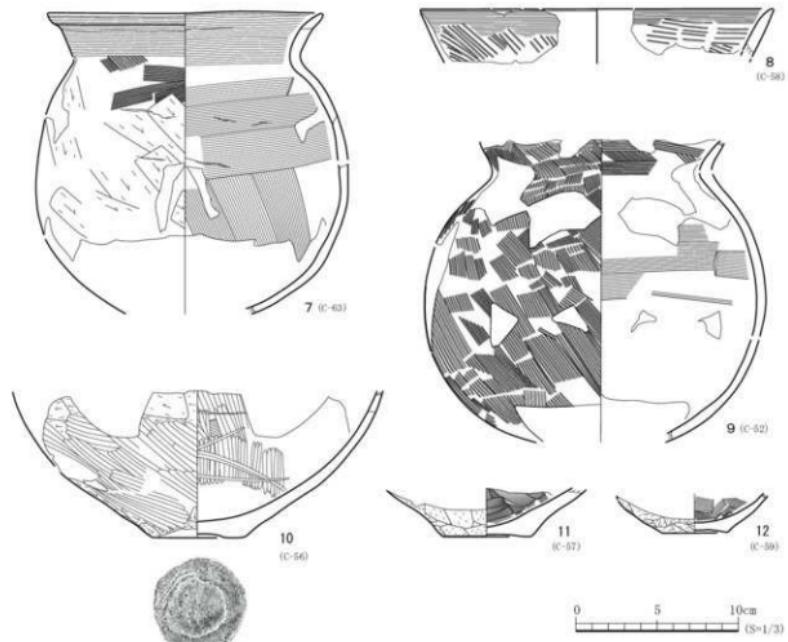


No.	遺構・層	種別	断面	残存	特徴【技法(外縁・内面)】色調(外縁・内面)→底面→その他の特徴の順に記載】	登録
1	S19・SK1 1層	土師器	鉢	口縁部 ～底部	外縁：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・胴部ヘラミガキ・底面ヘラミガキ→ヘラミガキ。内面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・胴部～底部ヘラミガキ。色調：外縁・褐色(7.0V6/6)、内面・明褐色(7.0V5/6)。法量：口径11.5cm・底径2.1cm・底厚3.0cm・高さ2.0~2.7cm	C-61
2	S19・SK1 1層	土師器	鉢	口縁部 ～底部	外縁：口縁部ヘタメヨコナデ・胴部～底部ヘタミガキ。内面：口縁部ハケメヨコナデ・胴部ヨコナデ～ヘタナカ・底部ヘタナダ。色調：内外面・浅黃褐色(10V8/8)。法量：口径14.1cm・底径6.0cm・高さ0.3~0.6cm。外縁・輪縁底有り	C-62
3	S19 2・3層	土師器	鉢	底部	外縁：ヘタミガキ。内面：ヘタミガキ・底部に赤色染料付する。色調：内外面・にぶい褐色(7.0V5/6)。法量：底径3.0cm・残存高2.9cm・底厚0.4~1.1cm	C-55
4a	S19 2層	土師器	鉢	口縁部 ～底部	外縁：ヨコナデ→ヘラミガキ。内面：ヨコナデ～ヘラミガキ。色調：外縁・明赤褐色(7.0V5/6)、内面・にぶい赤褐色(7.0V4/4)。法量：口径27.0cm・残存高6.2cm・底厚0.2~0.45cm	C-54a
4b	S19 2層	土師器	鉢	底部	外縁：ヨコナデヘタミガキ。内面：ヨコナデヘタミガキ。色調：外縁・赤褐色(2.0V4/8)。内面・にぶい赤褐色(2.0V4/4)。法量：底径3.7cm・残存高6.3cm・底厚0.4~0.9cm	C-54b
5a	S19 2層	土師器	壺	口縁部 ～胴部	外縁：ヨコナデヘタメヨコナデ・胴部ヘタメヨコナデ。内面：口縁部ヘタメヨコナデ・胴部(上)ヘタナダ→指オサエ・胴部(下)ヘタメヘタナダ。色調：外縁・明褐色(10V7/6)、内面・明褐色(7.0V5/6)。法量：口径12.8cm・残存高22.9cm・底厚0.35~0.65cm、外縁・輪縁底有り	C-53a
5b	S19 2層	土師器	壺	底部	外縁：ハケメ・ナダ・底部ヘタ削り、内面：ハケメ→ヘナダ。色調：外縁・褐色(7.0V5/6)、内面・にぶい赤褐色(10V6/4)。法量：底径6.5cm・残存高10.9cm・底厚0.4~1.1cm、内外面・輪縁底有り	C-53b
6	S19・SK1 1層	土師器	甌	口縁部 ～底部	外縁：口縁部ヨコナデ・胴部～底部ヘタメ。内面：口縁部ヨコナデ・胴部～底部ヘタナダ。色調：外縁・赤褐色(10V6/6)、内面・褐色(7.0V6/6)。法量：口径15.1cm・残存高22.9cm・底径4.9cm・底厚0.35~1.0cm、底部成層有り	C-47

第34図 S19 穴住跡 (3)



第35図 S19 竪穴住居跡（4）



No.	造形・形	種別	器種	現・存	特徴【既往（外面・内面）→既調（外面・内面）→既第→その他の特徴の順に記載】	登録
7	S10・SKI 1層	土師器	甕	口縁部 ～胴部	外側：口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ～ヘラ削り。内側：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナダ。色調：外面・黒色（S186/6）。内面・明赤褐色（2.S185/8）。法量：口径16.9cm・残存高18.6cm・底厚0.35～0.7cm。内外面・輪様痕有り。	C-63
8	S19 2・3層	土師器	甕	口縁部	外側：ヨコナデ～ハケメ、内側：ヨコナデ～ハケメ、色調：外面・にぶい褐色（7.S185/4）、内面・にぶい褐色（2.S185/3）、法量：口径21.6cm・残存高3.3cm・底厚0.2～0.75cm	C-58
9	S19 2・3層	土師器	甕	口縁部 ～胴部	外側：口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ・削基ヘラナダ。色調：外面・黒色（2.S186/8）。内面・にぶい黄褐色（10.S187/4）、法量：口径14.8cm・残存高18.6cm・底厚0.35～0.85cm	C-52
10	S19 2・3層下層	土師器	甕	胴部 ～底部	外側：ヘラ削り～ヘラミガキ、底部輪台技術。内側：ヘラナダ～ヘラミガキ。色調：外面・明黄褐色（10.S186/6）、内面・にぶい黄褐色（10.S186/4）。法量：底径5.8cm・残存高9.6cm・底厚0.35～1.45cm、内面・輪様痕有り	C-56
11	S19 2・3層	土師器	甕or甕	底部	外側：ヘラ削り・底部輪台技術？。内面～ヘラナダ。色調：外面・灰褐色（7.S184/2）、内面・にぶい赤褐色（S184/3）、法量：底径5.2cm・残存高3.0cm・底厚0.4～1.3cm	C-57
12	S19 堆積上	土師器	甕or甕	底部	外側：ヘラ削り・底部ヘラ削り。内面：ヘラナダ。色調：外面・にぶい褐色（7.S185/4）。内面・明赤褐色（3.S185/6）。法量：底径4.0cm・残存高2.4cm・底厚0.3～0.9cm	C-59

第36図 S19 積穴住居跡（5）



第37図 S19 竪穴住居跡（6）

## (2) 挖立柱建物跡・柱穴列跡

掘立柱建物跡は、A区、B区で37棟を検出した（第38～90図、第11・12・1～3表）。柱穴列跡は、A区、B区で4条を検出した（第91～96図、第13・14表）。

### 1) 挖立柱建物跡の認定方法

今回報告する掘立柱建物跡については、原則として現地調査の段階で繰り返し検討を行い、建物を認定した。建物跡の認定は、次の手順で検討を行った。  
 ①：遺構検出段階で、柱穴及び柱痕跡のプランを測量して作成した図をもとに建物を検討。  
 ②：遺構精查（半裁）時に遺構の重複関係・深さ・埋土の状態を確認し、①で検討した建物と照らし合わせ、切り合いの矛盾や柱筋等を考慮しながら再度建物を検討。  
 ③：①と②の検討により、建物として想定しても差し支えないかと判断できたものを建物として認定。  
 ④：建物として認定できなかった柱穴のみを抽出し、かつ柱穴群の周囲を再度精査し、柱穴の検出漏れがないか確認したうえで、残った柱穴で再度建物を検討。

以上 の方法により、掘立柱建物跡を認定したが、今回の調査で認定できた建物跡以外にも、「柱穴跡」は多数残されている。これらは「ピット」として報告した（ピットの項参照）。ピットとして報告したものについても、本来は建物を構成する柱穴であったと考えられるが、現地調査・整理作業において検討を行った結果、建物として認定できなかった柱穴である。したがって、今回の調査区内ではさらに建物跡が存在したことが想定される。また、今回建物として認定したものの中には、調査区外に延びていると想定したものもある。このことから、今回報告する建物跡については、今後の掘立柱建物研究の進展や建物群の再検討等により、変更・追加する可能性がある。

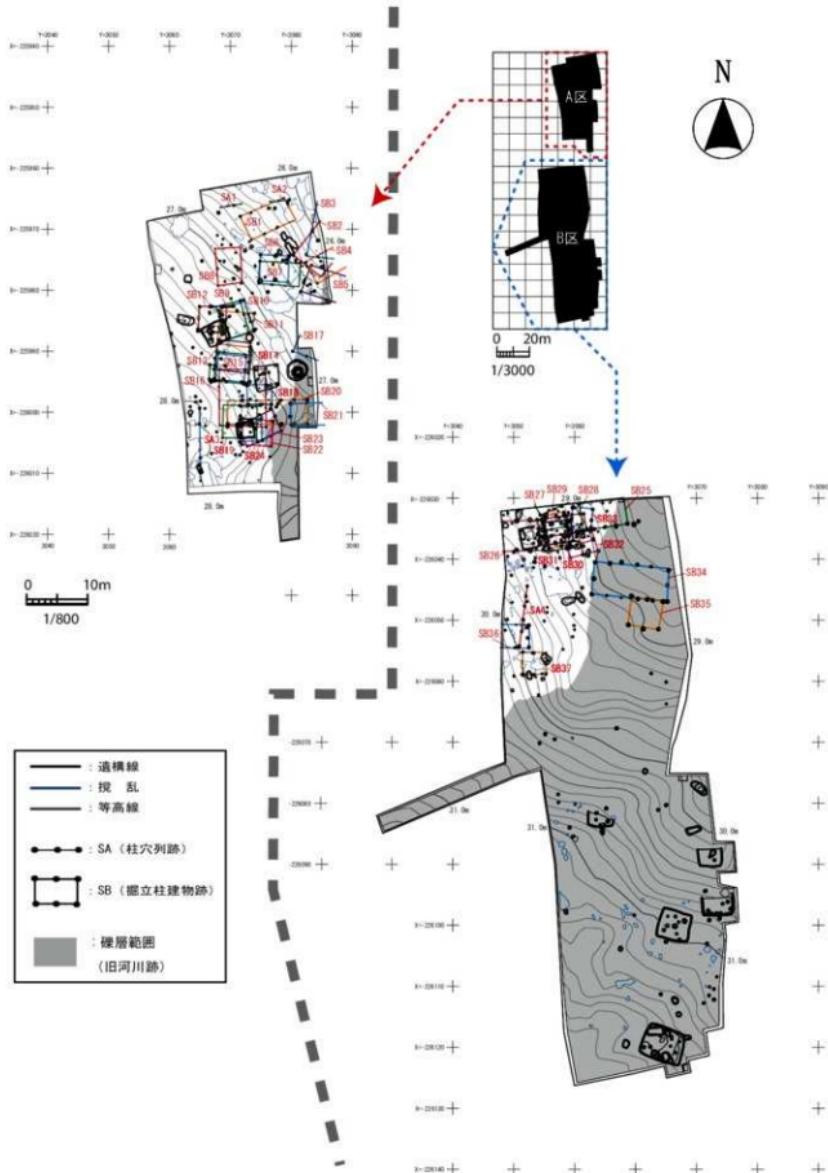


1.B区掘立柱建物跡 完掘状況（真上から・上が北）



2.A区掘立柱建物跡 完掘状況（真上から・上が北）

第38図 石垣遺跡 A・B区 掘立柱建物跡完掘状況



第39図 石垣遺跡・柱穴列跡  
遺構配置図

第11表 石垣遺跡 挖立柱建物跡 属性表 SB1~37

通鑑 No.	建物間隔		縦方向	平面規模			建物の向き	標高 【構成Pit・重複関係・その他】				
	桁行	梁行		桁行長(m)		梁行長(m)						
				測定柱列・柱間寸法(m)	測定柱列・柱間寸法(m)							
SB-1	3	1	東西	7.7	北	1.8×2.0×3.9	4.3	西	4.3	西北 <sup>†</sup>	N-24°-E	標成Pit: P6+9+15+16+19+20+27
SB-2	2	1以上	-	5.8	南	2.9 <sup>†</sup> (2.9)	5.0	西	5.0	西北 <sup>†</sup>	N-52°-E	標成Pit: P41+43+66 SB2-3より新。
SB-3	1以上	1以上	-	4.2	西	4.2	1.9	南	1.9	東10°	N-10°-E	標成Pit: P42+57+59
SB-4	2	-	-	4.0	西	2.0×2.0	-	-	-	西北 <sup>†</sup>	N-28°-E	標成Pit: P62+79+84
SB-5	1以上	2	-	4.7	西	2.6×2.1	4.6	南	4.6	東21°	N-23°-E	標成Pit: P63+80+85+88
SB-6	2	1	東西	4.7	北	2.5×2.2	4.3	西	4.3	東2°	N-2°-E	標成Pit: P37+39+40+73+76+77
SB-7	3	1	東西	6.7	北	2.2×2.2×2.3	3.8	西	3.8	東2°	N-2°-E	標成Pit: P50+51+55+61+72+75+78
SB-8	2	1	南北	6.1	西	3.4×2.7	4.3	北	4.3	西北 <sup>†</sup>	N-5°-E	標成Pit: P22+25+45+70+71
SB-9	2	1	南北	5.5	東	2.5×3.0	4.1	北	4.1	西北 <sup>†</sup>	N-13°-E	標成Pit: P94+100+105+121+124+131 S11, SB10より新。SB8より古。
SB-10	2	1	南北	5.2	東	2.9×2.3	4.6	南	4.6	西北 <sup>†</sup>	N-18°-E	標成Pit: P162+167+169+120+125+129 S11, P119より新。SB9より古
SB-11	2	1	-	5.6	東	3.6×2.0	5.7	北	5.7	東6°	N-6°-E	標成Pit: P166+110+122+146+149+154 S11より新。SB6より古。
SB-12	2	2	東西	4.5	北	2.0×2.5	4.2	西	2.0×2.2	東2°	N-2°-E	標成Pit: P32+92+93+96+113+126+134+143 S11, P135より新。
SB-13	2	1	-	5.0	東	3.2×1.8	5.5	北	5.5	東6°	N-6°-E	標成Pit: P123+148+169+163+166+171 S11より新。
SB-14	(1)×3	2	東西	6.4	北	0.8 <sup>†</sup> +3.3+3.4+1.1	4.5	西	2.3×2.2	東6°	N-6°-E	標成Pit: P150+152+153+158+164+165+184+ 189+190+191+196 西側に1の突出部が付く。SB15より新。P197より古。
SB-15	2	2	東西	4.6	南	1.8×2.8	4.5	西	2.2×2.3	東6°	N-6°-E	標成Pit: P151+159+167+188+192+195 SB14より古。
SB-16	3	2	南北	9.4	東	2.6×3.5×3.1	7.6	北	4.2×3.4	西北	N-6°-E	標成Pit: P168+170+172+179+193+212+226+ 263+274, S12-3より新。
SB-17	1以上	-	-	2.5	南	-	-	-	-	東20°	N-20°-E	標成Pit: P182+183
SB-18	2	1	東西	4.1	南	2.2×1.9	3.3	西	3.3	西17°	N-1°-E	標成Pit: P184+196+225+227+254 S12より新。
SB-19	2	1	東西	5.6	南	2.7×2.9	5.5	東	5.5	東1°	N-1°-E	標成Pit: P186+215+228+272+281 S13より新。
SB-20	5	1	東西	13.1	南	2.5×2.4+4.1×2.1+2.2	3.9	東	3.9	西北 <sup>†</sup>	N-1°-E	標成Pit: P213+216+222+224+232+234+236+ 239+241+251+277+295 S13より新。SB2より古。
SB-21	2	1以上	-	3.4	西	2.0×1.4	2.7	北	2.7	西北 <sup>†</sup>	N-3°-E	標成Pit: P235+237+238+244+276 SB20より新。
SB-22	2	1	東西	5.0	北	2.7×2.3	4.2	西	4.2	東4°	N-4°-E	標成Pit: P236+250+255+267+279
SB-23	3	1	東西	6.2	北	2.1×2.2+1.9	3.8	東	3.8	西北 <sup>†</sup>	N-25°-E	標成Pit: P241+246+253+261+273+278+300+301 S13, P269より新。
SB-24	1	1	-	3.6	北	-	3.6	東	3.6	西北 <sup>†</sup>	N-1°-E	標成Pit: P249+257+275+280
SB-25	4	1	東西	7.4	南	1.8×1.8+1.8×2.0	4.3	西	4.3	西北 <sup>†</sup>	N-8°-E	標成Pit: P319+320+306+400+432+433+434+437+438+442 SB28より新。
SB-26	3以上	1	東西	6.9	北	2.5×2.2+2.2	5.0	東	5.0	西北	N-0°-E	標成Pit: P304+308+311+331+359+353+354 P305, S14より新。SB21, SB29+31, P347+295古。
SB-27	3	-	-	3.8	南	1.3×1.3+1.2	-	-	-	西北 <sup>†</sup>	N-23°-E	標成Pit: P306+312+313+314 SB31より新。
SB-28	5	1	東西	7.7	南	1.8+1.7+1.9+1.4+0.9	2.5	東	2.5	西北 <sup>†</sup>	N-8°-E	標成Pit: P222+322+327+332+334+337+343+346+374+382+392+ 401 S14, SE30+31, P268より新。SB25, P342+295古。
SB-29	3	1	東西	4.5	南	1.5+1.3+1.7	3.5	西	3.5	西北 <sup>†</sup>	N-9°-E	標成Pit: P235+331+338+348+371+405+411 SB26+30+31+33, SK14, P409より新。 P347, 372上り古。
SB-30	2	1	-	3.5	西	1.7+1.8	3.5	南	3.5	西北 <sup>†</sup>	N-8°-E	標成Pit: P341+345+351+379+384+409 SB28+29+31-32, P347より古。
SB-31	3	1	南北	5.3	西	1.9+1.7+1.9+1.4+0.9	3.5	南	3.5	西北 <sup>†</sup>	N-10°-E	標成Pit: P307+315+339+344+349+378+381+408 SB26+30, S14より古。 SB27+29+32, P338+340+347+380上り古。
SB-32	2	2	-	4.6	北	2.3×2.3	3.7	西	1.8+1.9	西北 <sup>†</sup>	N-15°-E	標成Pit: P303+304+307+402+406+410+413+415+430 SK10+31, P303より古。SB23, P263より古。諸円建物。
SB-33	2	1	南北	3.8	西	1.9+1.9	3.3	北	3.3	東6°	N-6°-E	標成Pit: P317+321+326+385+391+395 SB22より新。SB29より古。
SB-34	3	2	東西	12.4	南	2.5×2.4+2.7+2.4+2.4	5.3	西	2.7×2.6	西北 <sup>†</sup>	N-5°-E	標成Pit: P416+417+418+419+420+421+422+423+424+425+426+ 427+428+429
SB-35	2	1	東西	5.3	北	2.4×2.6	4.7	西	4.7	東7°	N-7°-E	標成Pit: P443+444+445+446+447+448
SB-36	1以上	1	東西	3.7	東	-	2.2	北	2.2	西北	N-0°-E	標成Pit: P467+468+472+475
SB-37	2	1	東西	3.9	北	1.7×2.2	3.6	東	3.6	西北 <sup>†</sup>	N-1°-E	標成Pit: P476+477+478+480+482+483

※平面規格の「( )」内の数値は推定値。

※建物が調査区外に延びていたため規格が不明な建物や、柱の一部が現存していない建物については、下記のとおり標記した。

○調査区外に延びる建物：・建物規格：「( )」以上×( )間。・平面規格：底長を「( )」以上とし、柱間寸法を「( )」と表記。

○柱の一部が現存していない建物：・底長・柱間寸法で作成範囲(抜き)での測定し、底長( )。( )×( )×( )と表記。

※建物規格の「( )」とあるのは、「各面」間、面倒または東西に横(または奥行き)1間であることを示す。

※柱間寸法は、東西方向のものは南北から、南北方向のものは北から順に記す。

柱間寸法の括弧内は柱間寸法を示す。柱間寸法は南北または東西の柱間寸法を示す。





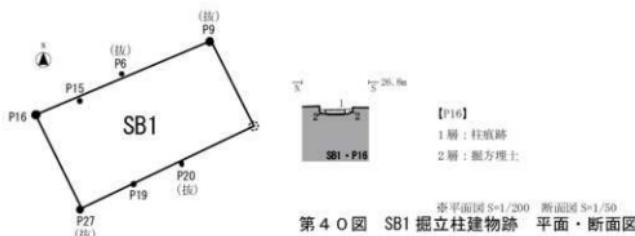


## 2) A区建物跡（第40～70図、第11・12-1・2表）

S B1～24 挖立柱建物跡の計24棟を検出した。確認面はIII・IV層である。建物跡は、標高26～28mの平坦面に立地している。特に調査区中央の標高27～28m地点において多くの建物跡を検出した。以下、その詳細について説明する。

### 【SB1 挖立柱建物跡】（第40・47・48図、第11・12-1表）

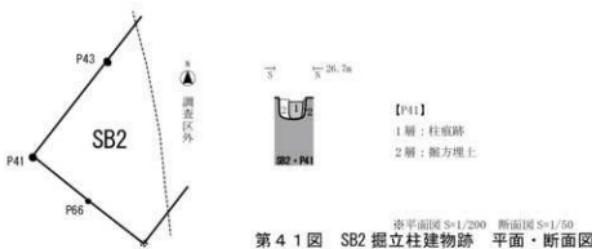
東西3間、南北1間の東西棟建物跡である。建物はP6・9・15・16・19・20・27の7個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、P15・16・19の3個から柱痕跡を確認し、4個（P6・9・20・27）は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長7.7m、梁行が西側柱列で総長4.3mである。方向は真北に対して西に24°傾く（N-24°-W）。柱穴は掘方の規模が長軸18～34cm、平面形が円形・楕円形・不整形で、深さは8～50cmである。柱痕跡は長軸が12～17cm、平面形が円形である。遺物は出土していない。



第40図 SB1 挖立柱建物跡 平面・断面図

### 【SB2 挖立柱建物跡】（第41・47・48図、第11・12-1表）

東西2間、南北1間以上の建物跡である。建物はP41・43・66の3個の柱穴で構成される。SK2・3と重複し、これらより新しい。検出した柱穴のすべてから柱痕跡を確認した。平面規模については、桁行が南柱列で総長5.8m、梁行が西側柱列で総長5.0mである。方向は真北に対して西に52°傾く（N-52°-W）。柱穴は掘方の規模が長軸19～30cm、平面形が円形・楕円形で、深さは14～24cmである。柱痕跡は長軸が10～16cm、平面形が円形である。遺物は出土していない。



第41図 SB2 挖立柱建物跡 平面・断面図

### 【SB3 捜立柱建物跡】(第42・47・48図、第11・12-1表)

東西1間以上、南北1間以上の建物跡である。建物はP42・57・59の3個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、P59から柱痕跡を確認し、2個(P42・57)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長4.2m、梁行が南側柱列で総長1.9mである。方向は真北に対して東に10°傾く(N-10°-E)。柱穴は掘方の規模が長軸18~30cm、平面形が円形・橢円形で、深さは11~23cmである。柱痕跡は長軸が10cm、平面形が円形である。遺物は出土していない。



第4-2図 SB3 捜立柱建物跡 平面・断面図  
※平面図S=1/200 断面図S=1/50

### 【SB4 捜立柱建物跡】(第43・47・48図、第11・12-1表)

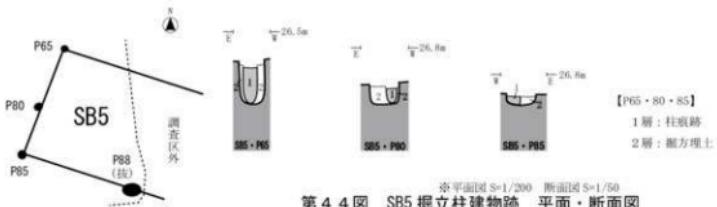
南北2間の建物跡である。建物はP62・79・84の3個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、P62・79の2個から柱痕跡を確認し、P79は柱が切り取られていた。P84は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長4.0mである。方向は真北に対して西に28°傾く(N-28°-W)。柱穴は掘方の規模が長軸24~34cm、平面形が円形・橢円形で、深さは9~19cmである。柱痕跡は長軸が10~15cm、平面形が円形である。遺物は出土していない。



第4-3図 SB4 捜立柱建物跡 平面・断面図  
※平面図S=1/200 断面図S=1/50

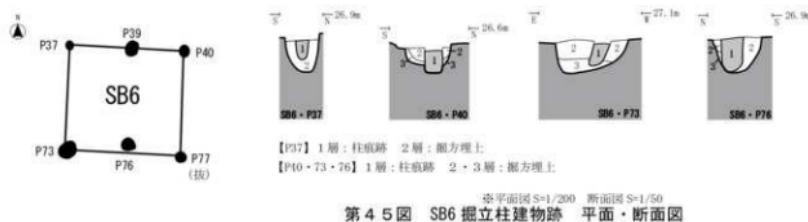
### 【SB5 捜立柱建物跡】(第44・47・48図、第11・12-1表)

東西1間以上、南北2間の建物跡である。建物はP65・80・85・88の4個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、P65・80・85の3個から柱痕跡を確認し、P88は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長4.7m、梁行が南側柱列で総長4.6mである。方向は真北に対して東に21°傾く(N-21°-E)。柱穴は掘方の規模が長軸26~50cm、平面形が円形・橢円形で、深さは8~42cmである。柱痕跡は長軸が13~17cm、平面形が円形・橢円形である。遺物は出土していない。



【SB6 挖立柱建物跡】(第 45・47・48 図、第 11・12-1 表)

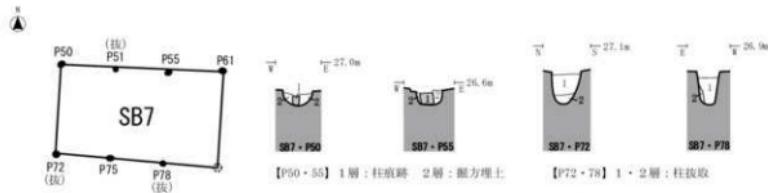
東西 2 間、南北 1 間の東西棟建物跡である。建物は P37・39・40・73・76・77 の 6 個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、P37・39・40・73・76 の 5 個から柱痕跡を確認し、P77 は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長 4.7m、梁行が西側柱列で総長 4.3m である。方向は真北に対して東に  $2^{\circ}$  傾く ( $N - 2^{\circ} - E$ )。柱穴は掘方の規模が長軸 33~75cm、平面形が円形・梢円形で、深さは 26~47cm である。柱痕跡は長軸が 14~29cm、平面形が円形である。遺物は出土していない。



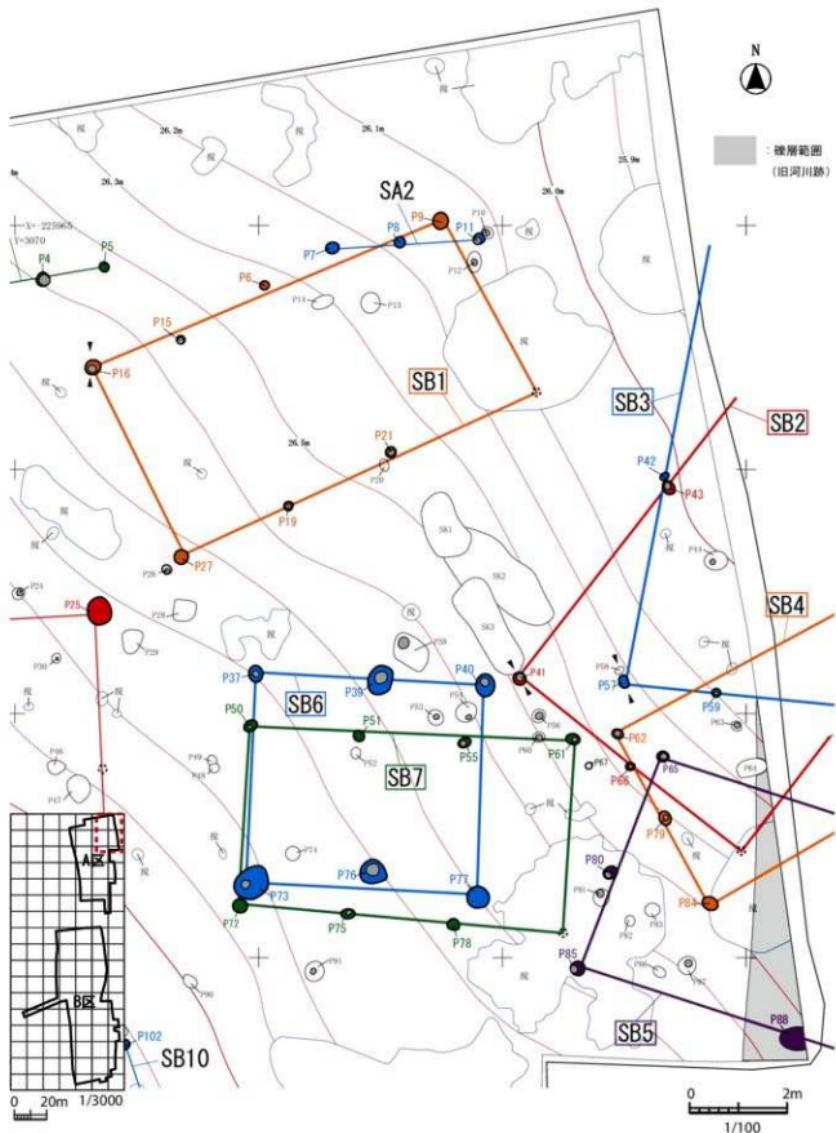
第 4.5 図 SB6 挖立柱建物跡 平面・断面図

【SB7 挖立柱建物跡】(第 46~48 図、第 11・12-1 表)

東西 3 間、南北 1 間の東西棟建物跡である。建物は P50・51・55・61・72・75・78 の 7 個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、P50・55・61・75 の 4 個から柱痕跡を確認し、3 個 (P51・72・78) は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長 6.7m、梁行が西側柱列で総長 3.8m である。方向は真北に対して東に  $2^{\circ}$  傾く ( $N - 2^{\circ} - E$ )。柱穴は掘方の規模が長軸 23~30cm、平面形が円形・梢円形で、深さは 2~33cm である。柱痕跡は長軸が 9~13cm、平面形が円形である。遺物は出土していない。



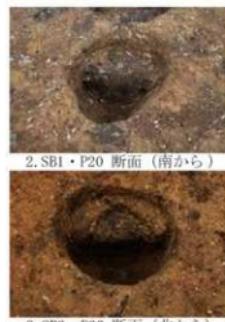
第 4.6 図 SB7 挖立柱建物跡 平面・断面図



第47図 SB1～7 掘立柱建物跡（1）



1. SB1 挖立柱建物跡 完掘状況（北から）



2. SB1・P20 断面（南から）

3. SB2・P66 断面（北から）



4. SR2～7 挖立柱建物跡 完掘状況（南から）



5. SB3・P57 断面（東から）



6. SB4・P79 断面（北から）



7. SB4・P84 断面（東から）



8. SB5・P80 断面（北から）



9. SB6・P37 断面（東から）



10. SB6・P76 断面（西から）



11. SB7・P50 断面（南から）



12. SB7・P72 断面（西から）

第48図 SB1～7 挖立柱建物跡（2）

### 【SB8 挖立柱建物跡】(第49・54・55図、第11・12-1表)

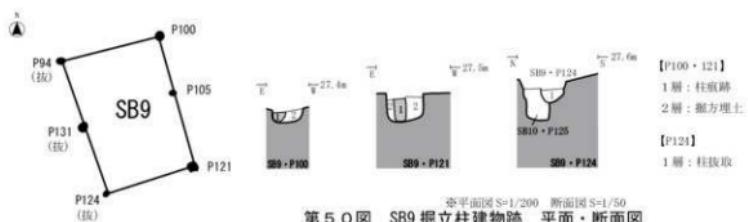
南北2間、東西1間の南北棟建物跡である。建物はP22・25・45・70・71の5個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、P70・71の2個から柱痕跡を確認し、P45は柱が切り取られ、2個(P22・25)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長6.1m、梁行が北側柱列で総長4.3mである。方向は真北に対して西に5°傾く(N-5°-W)。柱穴は掘方の規模が長軸21~58cm、平面形が円形・楕円形で、深さは9~33cmである。柱痕跡は長軸が9~18cm、平面形が円形・楕円形である。遺物は出土していない。



第49図 SB8 挖立柱建物跡 平面・断面図

### 【SB9 挖立柱建物跡】(第50・54・55図、第11・12-1表)

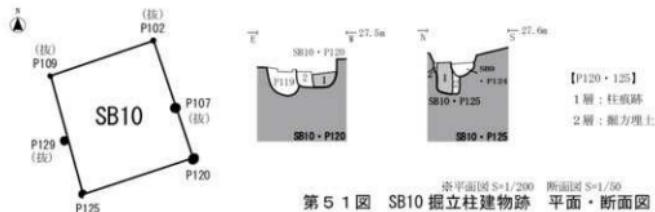
南北2間、東西1間の南北棟建物跡である。建物はP94・100・105・121・124・131の6個の柱穴で構成される。SI1、SB10、SK6と重複し、SI1、SB10より新しく、SK6より古い。検出した柱穴のうち、P100・105・121の3個から柱痕跡を確認し、3個(P94・124・131)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が東側柱列で総長5.5m、梁行が北側柱列で総長4.1mである。方向は真北に対して西に15°傾く(N-15°-W)。柱穴は掘方の規模が長軸27~44cm、平面形が円形・楕円形で、深さは6~23cmである。柱痕跡は長軸が11~16cm、平面形が円形である。遺物は出土していない。



第50図 SB9 挖立柱建物跡 平面・断面図

### 【SB10 挖立柱建物跡】(第51・54・55図、第11・12-1表)

南北2間、東西1間の南北棟建物跡である。建物はP102・107・109・120・125・129の6個の柱穴で構成される。SI1、SB9、P119と重複し、SI1、P119より新しく、SB9より古い。検出した柱穴のうち、P120・125の2個から柱痕跡を確認し、4個(P102・107・109・129)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が東側柱列で総長5.2m、梁行が南側柱列で総長4.6mである。方向は真北に対して西に18°傾く(N-18°-W)。柱穴は掘方の規模が長軸22~42cm、平面形が円形・楕円形で、深さは8~35cmである。柱痕跡は長軸が15~26cm、平面形が円形である。遺物はP120の掘方埋土から縄文土器片、P129の柱抜取穴から土師器片が出土した。



#### 【SB11 掘立柱建物跡】(第52・54・55図、第11・12-1表)

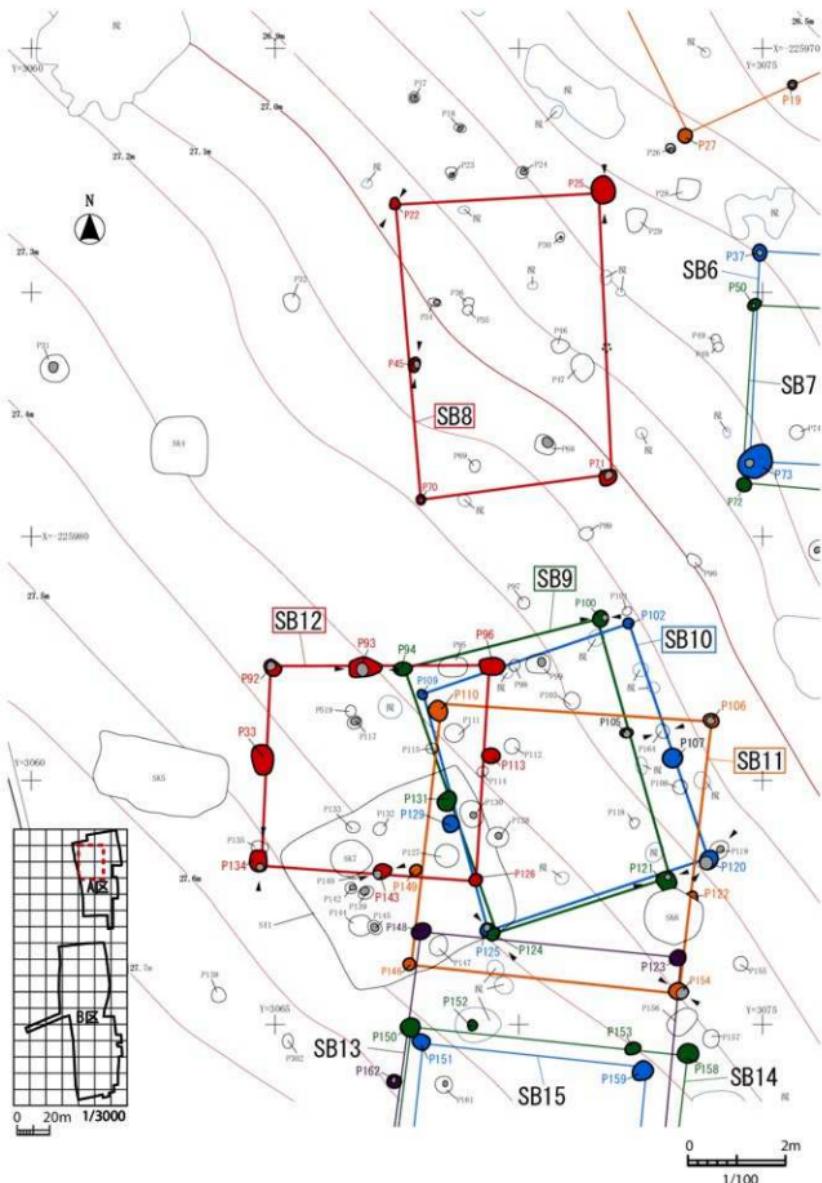
南北2間、東西1間の建物跡である。建物はP106・110・122・146・149・154の6個の柱穴で構成される。SI1、SK6と重複し、SI1より新しく、SK6より古い。検出した柱穴のうち、P106・154の2個から柱痕跡を確認し、4個(P110・122・146・149)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が東側柱列で総長5.6m、梁行が北側柱列で総長5.7mである。方向は真北に対して東に6°傾く(N-6°-E)。柱穴は掘方の規模が長軸26~47cm、平面形が円形・楕円形で、深さは5~30cmである。柱痕跡は長軸が18~26cm、平面形が円形である。遺物は出土していない。



#### 【SB12 掘立柱建物跡】(第53~55図、第11・12-1表)

東西2間、南北2間の東西棟建物跡である。建物はP33・92・93・96・113・126・134・143の8個の柱穴で構成される。SI1、P135と重複し、これらより新しい。検出した柱穴のうち、P92・93・134・143の4個から柱痕跡を確認し、4個(P33・96・113・126)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長4.5m、梁行が西側柱列で総長4.2mである。方向は真北に対して東に2°傾く(N-2°-E)。柱穴は掘方の規模が長軸28~64cm、平面形が円形・楕円形で、深さは12~40cmである。柱痕跡は長軸が17~28cm、平面形が円形・楕円形である。遺物は出土していない。





第54図 SB8~12 掘立柱建物跡（1）



1. SB8 掘立柱建物跡 完掘状況（北から）



2. SB8・P22 断面（東から）



3. SB8・P45 断面（西から）



4. SB9～10 掘立柱建物跡 完掘状況（東から）



5. SB9・P100 断面（北から）



6. SB9・P121 断面（北から）



7. SB10・P102 断面（西から）

8. SB10・P125(左)、  
P124(右) 断面（西から）

9. SB11・P106 断面（東から）



10. SB11・P146 断面（西から）

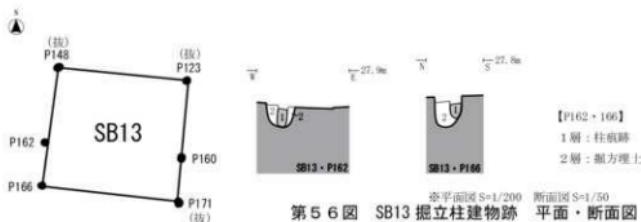


11. SB12・P93 断面（北から）

第55図 SB8～12 掘立柱建物跡（2）

### 【SB13 挖立柱建物跡】(第 56・61・62 図、第 11・12-1 表)

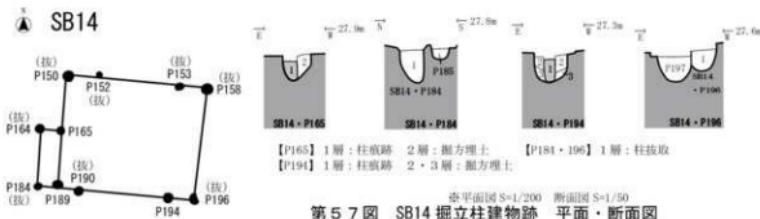
南北 2 間、東西 1 間の建物跡である。建物は P123・148・160・162・166・171 の 6 個の柱穴で構成される。SI1 と重複し、これより新しい。検出した柱穴のうち、P160・162・166 の 3 個から柱痕跡を確認し、3 個 (P123・148・171) は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が東側柱列で総長 5.0m、梁行が北側柱列で総長 5.5m である。方向は真北に対して東に 6° 傾く (N-6° -E)。柱穴は掘方の規模が長軸 30~43cm、平面形が円形・楕円形で、深さは 12~40cm である。柱痕跡は長軸が 12~19cm、平面形が円形・楕円形である。遺物は出土していない。



第 5-6 図 SB13 挖立柱建物跡 平面・断面図

### 【SB14 挖立柱建物跡】(第 57・61・62 図、第 11・12-1 表)

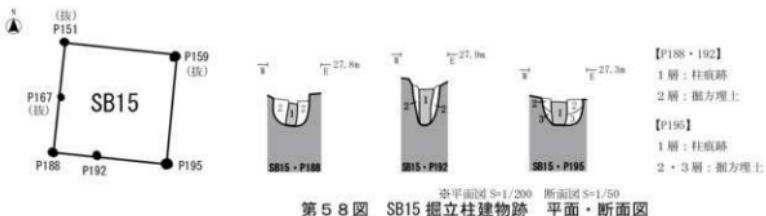
東西 3 間、南北 2 間の身舎の西側に 1 間の庇が付く東西棟建物跡である。建物は P150・152・153・158・164・165・184・189・190・194・196 の 11 個の柱穴で構成される。SB15、P197 と重複し、SB15 より新しく、P197 より古い。検出した柱穴のうち、P165・189・194 の 3 個から柱痕跡を確認し、8 個 (P150・152・153・158・164・184・190・196) は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長 6.4m、梁行が西側柱列で総長 4.5m である。方向は真北に対して東に 6° 傾く (N-6° -E)。柱穴は掘方の規模が長軸 23~44cm、平面形が円形・楕円形で、深さは 11~62cm である。柱痕跡は長軸が 14~20cm、平面形が円形である。遺物は P152 の柱抜取穴から土師器片が出土した。



第 5-7 図 SB14 挖立柱建物跡 平面・断面図

### 【SB15 挖立柱建物跡】(第 58・61・62 図、第 11・12-1 表)

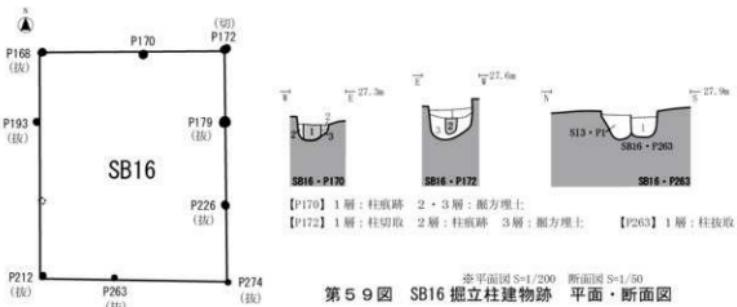
東西 2 間、南北 2 間の東西棟建物跡である。建物は P151・159・167・188・192・195 の 6 個の柱穴で構成される。SB14 と重複し、これより古い。検出した柱穴のうち、P188・192・195 の 3 個から柱痕跡を確認し、3 個 (P151・159・167) は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が南側柱列で総長 4.6m、梁行が西側柱列で総長 4.5m である。方向は真北に対して東に 6° 傾く (N-6° -E)。柱穴は掘方の規模が長軸 30~44cm、平面形が円形・楕円形で、深さは 9~41cm である。柱痕跡は長軸が 14~16cm、平面形が円形・楕円形である。遺物は出土していない。



第58図 SB15 捜立柱建物跡 平面・断面図

## 【SB16 捜立柱建物跡】(第59・61・62図、第11・12-2表)

南北3間、東西2間の南北棟建物跡である。建物はP168・170・172・179・193・212・226・263・274の9個の柱穴で構成される。SI2・3と重複し、これらより新しい。検出した柱穴のうち、P170から柱痕跡を確認し、P172は柱が切り取られていた。7個(P168・179・193・212・226・263・274)は柱が抜き取られていた。平面規模は、桁行が東側柱列で総長9.4m、梁行が北側柱列で総長7.6mである。方向は真北である。(N-0° -E)。柱穴は掘方の規模が長軸25~46cm、平面形が円形、梢円形で、深さは12~52cmである。柱痕跡は長軸が12~19cm、平面形が円形である。遺物は出土していない。

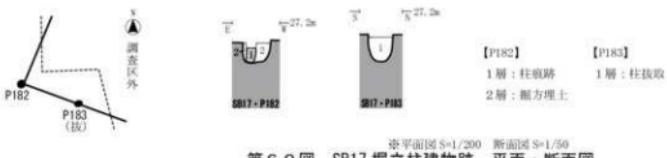


第59図 SB16 捜立柱建物跡 平面・断面図

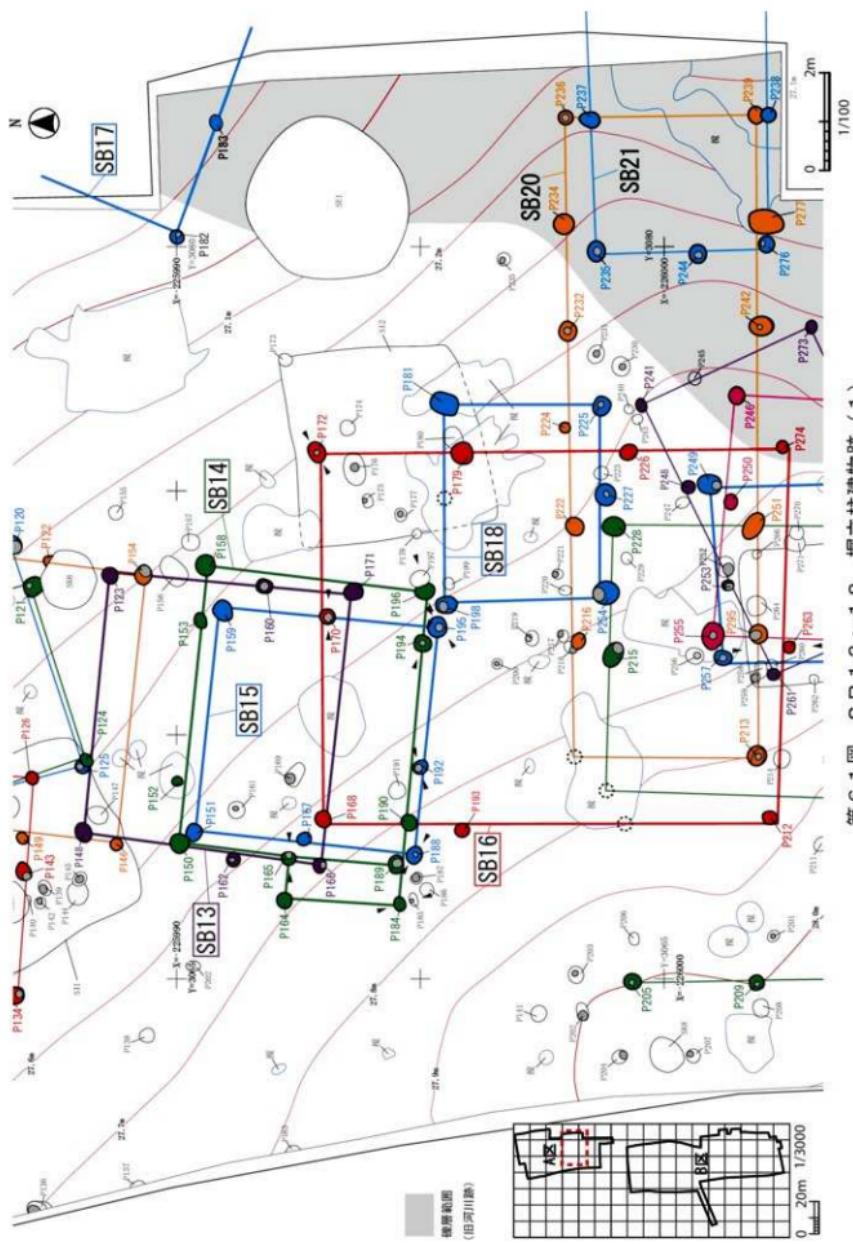
## 【SB17 捜立柱建物跡】(第60~62図、第11・12-2表)

東西1間以上の建物跡である。建物はP182・183の2個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、P182から柱痕跡を確認し、P183は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が南側柱列で総長2.5mである。方向は真北に対して東に20°傾く(N-20° -E)。柱穴は掘方の規模が長軸30~33cm、平面形が円形・梢円形で、深さは20~25cmである。柱痕跡は長軸が12cm、平面形が円形である。遺物は出土していない。

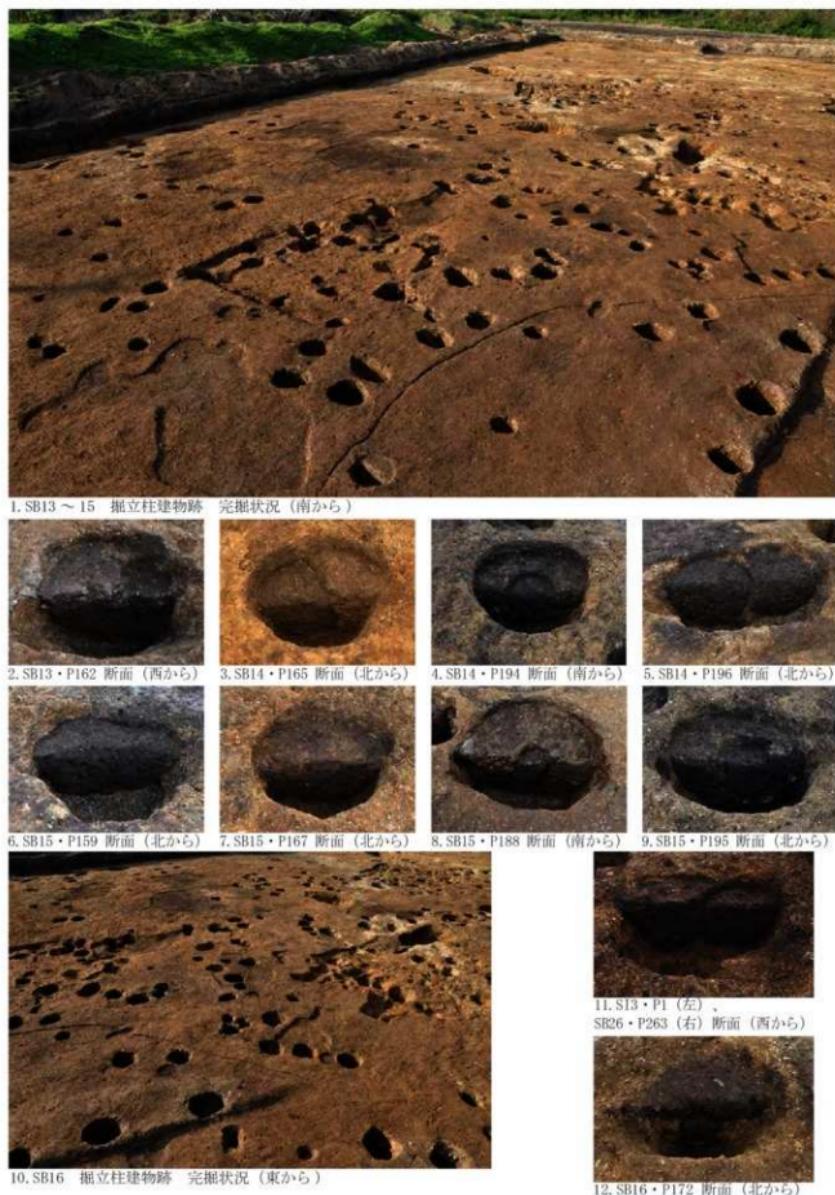
## SB17



第60図 SB17 捜立柱建物跡 平面・断面図



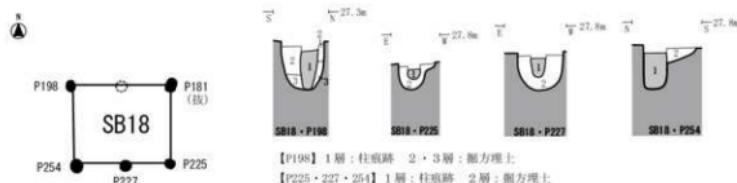
第61図 SB13～18 埋立柱建物跡（1）



第62図 SB13~16 挖立柱建物跡（2）

### 【SB18 挖立柱建物跡】(第 63・70・71 図、第 11・12-2 表)

東西 2 間、南北 1 間の東西棟建物跡である。建物は P181・198・225・227・254 の 5 個の柱穴で構成される。SI2 と重複し、これより新しい。検出した柱穴のうち、P198・225・227・254 の 4 個から柱痕跡を確認し、P181 は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が南側柱列で総長 4.1m、梁行が西側柱列で総長 3.3m である。方向は真北に対して西に 1° 傾く (N-1° -W)。柱穴は掘方の規模が長軸 40~58cm、平面形が円形・楕円形で、深さは 25~45cm である。柱痕跡は長軸が 14~29cm、平面形が円形・楕円形である。遺物は出土していない。



第 6-3 図 SB18 挖立柱建物跡 平面・断面図  
東平面図 S=1/200 断面図 S=1/50

### 【SB19 挖立柱建物跡】(第 64・70・71 図、第 11・12-2 表)

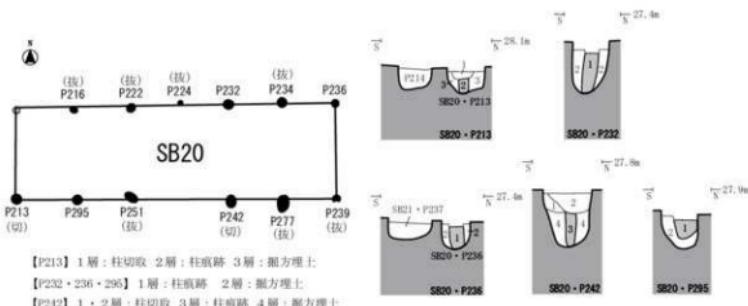
東西 2 間、南北 1 間の東西棟建物跡である。建物は P116・215・228・272・281 の 5 個の柱穴で構成される。SI3 と重複し、これより新しい。検出した柱穴のうち、P215・281 の 2 個から柱痕跡を確認し、3 個 (P116・228・272) は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が南側柱列で総長 5.6m、梁行が東側柱列で総長 5.5m である。方向は真北に対して東に 1° 傾く (N-1° -E)。柱穴は掘方の規模が長軸 25~54cm、平面形が楕円形で、深さは 6~30cm である。柱痕跡は長軸が 8~23cm、平面形が円形である。遺物は出土していない。



第 6-4 図 SB19 挖立柱建物跡 平面・断面図  
東平面図 S=1/200 断面図 S=1/50

### 【SB20 挖立柱建物跡】(第 65・70・71 図、第 11・12-2 表)

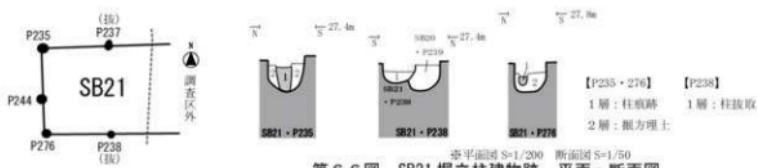
東西 5 間、南北 1 間の東西棟建物跡である。建物は P213・216・222・224・232・234・236・239・242・251・277・295 の 12 個の柱穴で構成される。SI3、SB21、P218 と重複し、SI3、P218 より新しく、SB21 より古い。検出した柱穴のうち、P232・236・295 の 3 個から柱痕跡を確認した。P213・242 の 2 個は柱が切り取られ、P216・222・224・234・239・251・277 の 7 個は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が南側柱列で総長 13.1m、梁行が東側柱列で総長 3.9m である。方向は真北に対して西に 1° 傾く (N-1° -W)。柱穴は掘方の規模が長軸 23~75cm、平面形が円形・楕円形で、深さは 17~45cm である。柱痕跡は長軸が 11~25cm、平面形が円形・楕円形である。遺物は P216 の柱抜取穴から繩文土器片が出土した。



第65図 SB20 堀立柱建物跡 平面・断面図

### 【SB21 堀立柱建物跡】(第66・70・71図、第11・12-2表)

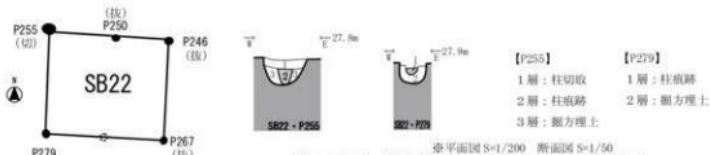
南北2間、東西1間以上の建物跡である。建物はP235・237・238・244・276の5個の柱穴で構成される。SB20と重複し、これより新しい。検出した柱穴のうち、P235・244・276の3個から柱痕跡を確認し、2個(P237・238)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長3.4m、梁行が北側柱列で総長2.7mである。方向は真北に対して西に3°傾く(N-3°-W)。柱穴は掘方の規模が長軸33~45cm、平面形が円形・楕円形・隅丸方形で、深さは12~29cmである。柱痕跡は長軸が14~18cm、平面形が円形・楕円形である。遺物は出土していない。



第66図 SB21 堀立柱建物跡 平面・断面図

### 【SB22 堀立柱建物跡】(第67・70・71図、第11・12-2表)

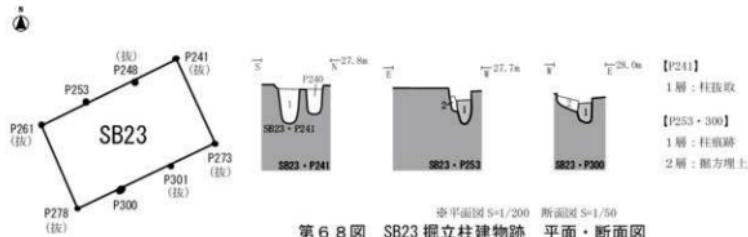
東西2間、南北1間の東西棟建物跡である。建物はP246・250・255・267・279の5個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、P279から柱痕跡を確認し、P255は柱が切り取られ、3個(P246・250・267)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長5.0m、梁行が西側柱列で総長4.2mである。方向は真北に対して東に4°傾く(N-4°-E)。柱穴は掘方の規模が長軸28~54cm、平面形が円形・楕円形で、深さは7~40cmである。柱痕跡は長軸が15~16cm、平面形が円形・楕円形である。遺物は出土していない。



第67図 SB22 堀立柱建物跡 平面・断面図

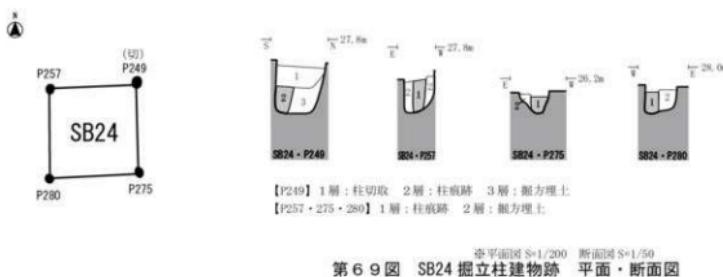
### 【SB23 挖立柱建物跡】(第68・70・71図、第11・12-2表)

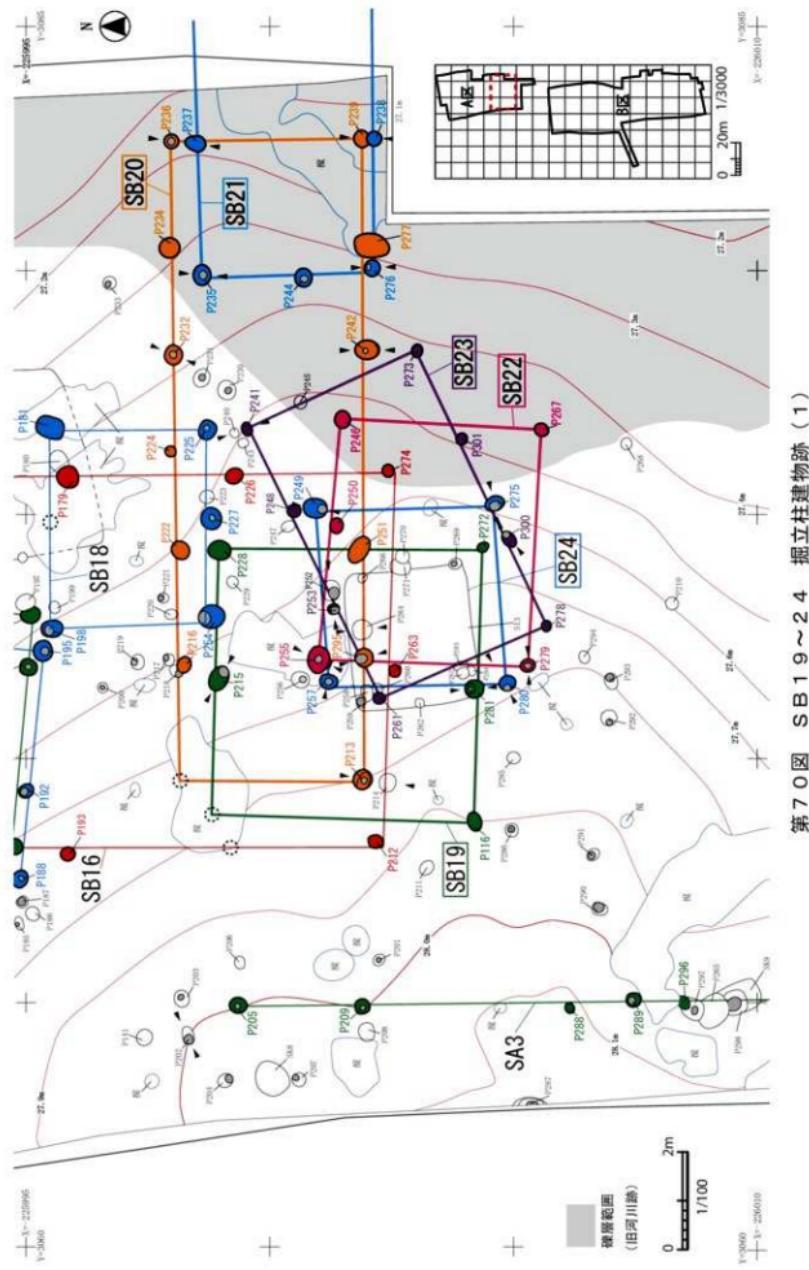
東西3間、南北1間の東西棟建物跡である。建物はP241・248・253・261・273・278・300・301の8個の柱穴で構成される。SI3、P260と重複し、これらより新しい。検出した柱穴のうち、P253・300の2個から柱痕跡を確認し、P241・248・261・273・278・301の6個は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長6.2m、梁行が東側柱列で総長3.8mである。方向は真北に対して西に25°傾く(N-25°-W)。柱穴は掘方の規模が長軸23~38cm、平面形が円形・楕円形で、深さは9~36cmである。柱痕跡は長軸が17~18cm、平面形が円形・楕円形である。遺物はP278の柱抜取穴から土師器片が出土した。

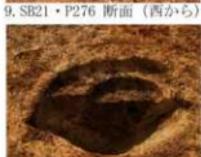
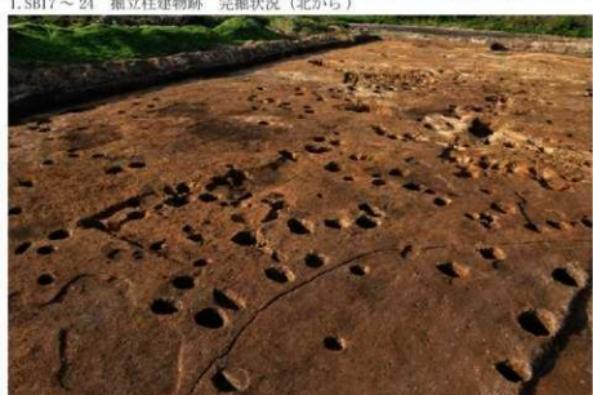


### 【SB24 挖立柱建物跡】(第69~71図、第11・12-2表)

東西1間、南北1間の建物跡である。建物はP249・257・275・280の4個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、P257・275・280の3個から柱痕跡を確認し、P249は柱が切り取られていた。平面規模は、桁行が北側柱列で総長3.6m、梁行が東側柱列で総長3.6mである。方向は真北に対して西に1°傾く(N-1°-W)。柱穴は掘方の規模が長軸35~50cm、平面形が円形・楕円形で、深さは20~50cmである。柱痕跡は長軸が15~23cm、平面形が円形・楕円形である。遺物は出土していない。







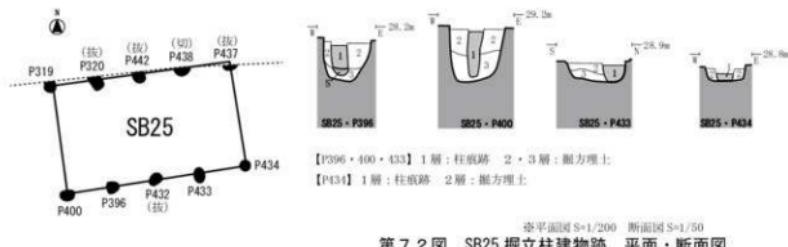
第71図 SB17～24 挖立柱建物跡（2）

## 3) B 区建物跡 (第 72~90 図、第 11・12-2・3 表)

SB25~37 挖立柱建物跡の計 13 棟を検出した。確認面はⅢ・Ⅳ層である。建物跡は調査区北側の標高 29~30m の平坦面に立地している。

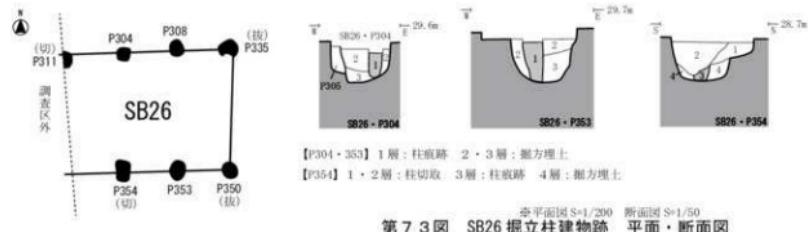
## 【SB 25 挖立柱建物跡】(第 72・83・84 図、第 11・12-2 表)

東西 4 間、南北 1 間の東西棟建物跡である。建物は P319・320・396・400・432・433・434・437・438・442 の 10 個の柱穴で構成される。SB28 と重複し、これより新しい。検出した柱穴のうち、P319・396・400・433・434 の 5 個から柱痕跡を確認し、P438 は柱が切り取られ、4 個 (P320・432・437・442) は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が南側柱列で総長 7.4m、梁行が西側柱列で総長 4.3m である。方向は真北に対して西に 8° 傾く (N-8°-W)。柱穴は掘方の規模が長軸 30~55cm、平面形が円形・楕円形・隅丸方形で、深さは 12~57cm である。柱痕跡は長軸が 17~25cm、平面形が円形・楕円形である。遺物は出土していない。



## 【SB 26 挖立柱建物跡】(第 73・83・84 図、第 11・12-2 表)

東西 3 間以上、南北 1 間の東西棟建物跡である。建物は P304・308・311・335・350・353・354 の 7 個の柱穴で構成される。SI4、SK11、P305・347、SB29・31 と重複し、SI4、P305 より新しく、SK11、P347、SB29・31 より古い。検出した柱穴のうち、P304・308・353 の 3 個から柱痕跡を確認し、P311・354 は柱が切り取られていた。2 個 (P335・350) は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長 6.9m、梁行が東側柱列で総長 5.0m である。方向は真北である (N-0°-E)。柱穴は掘方の規模が長軸 50~84cm、平面形が円形・楕円形・隅丸方形・隅丸長方形で、深さは 24~49cm である。柱痕跡は長軸が 15~27cm、平面形が円形・楕円形である。遺物は P354 の柱切取穴、P335・350 の柱抜取穴から土師器片が出土した。



### 【SB27 堀立柱建物跡】(第74・83・84図、第11・12-2表)

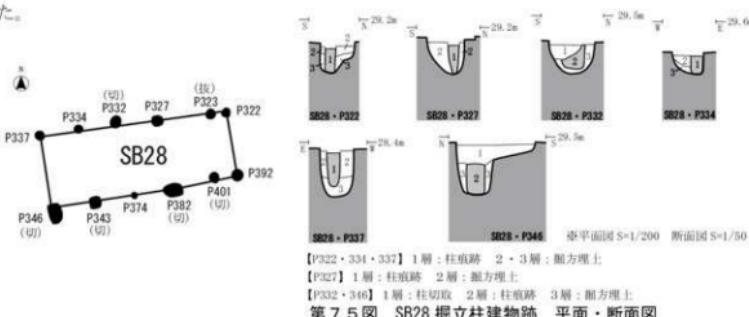
東西3間以上の建物跡である。建物はP306・312・313・314の4個の柱穴で構成される。SB31と重複し、これより新しい。検出した柱穴のうち、P306・313・314の3個から柱痕跡を確認し、P312は柱が抜き取られていた。平面規模は、桁行が南側柱列で総長3.8mである。方向は真北に対して西に23°傾く(N-23°-W)。柱穴は掘方の規模が長軸27~40cm、平面形が円形・楕円形で、深さは14~30cmである。柱痕跡は長軸が13~18cm、平面形が円形・楕円形である。遺物は出土していない。



第74図 SB27 堀立柱建物跡 平面・断面図

### 【SB28 堀立柱建物跡】(第75・83・84図、第11・12-3表)

東西5間、南北1間の東西棟建物跡である。建物はP322・323・327・332・334・337・343・346・374・382・392・401の12個の柱穴で構成される。SI4、SB25・30・31、P328・342と重複し、SI4、SB30・31、P328より新しく、SB25、P342より古い。検出した柱穴のうち、P322・327・334・337・374・392の6個から柱痕跡を確認し、5個(P332・343・346・382・401)は柱が切り取られていた。P323は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が南側柱列で総長7.7m、梁行が東側柱列で総長2.5mである。方向は真北に対して西に8°傾く(N-8°-W)。柱穴は掘方の規模が長軸23~50cm、平面形が円形・楕円形で、深さは13~54cmである。柱痕跡は長軸が12~26cm、平面形が円形・楕円形である。遺物はP327・343・346から土師器片、P382の柱切取穴から土師器片、須恵器片が出土した。



第75図 SB28 堀立柱建物跡 平面・断面図

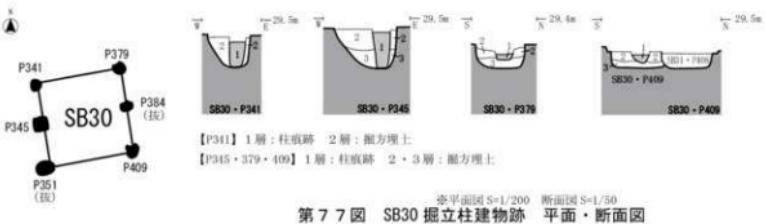
### 【SB29 堀立柱建物跡】(第76・83・84図、第11・12-3表)

東西3間、南北1間の東西棟建物跡である。建物はP325・331・336・348・371・405・411の7個の柱穴で構成される。SB26・30・31・33、SK14、P347・372と重複し、SB26・30・31・33、SK14、より新しく、P347・372より古い。検出した柱穴のうち、P371・405・411の3個から柱痕跡を確認し、P348は柱が切り取られていた。3個(P325・331・336)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が南側柱列で総長4.5m、梁行が西側柱列で総長3.5mである。方向は真北に対して西に9°傾く(N-9°-W)。柱穴は掘方の規模が長軸35~54cm、平面形が円形・楕円形・隅丸方形で、深さは10~38cmである。柱痕跡は長軸が12~21cm、平面形が円形である。遺物はP325の掘方埋土から土師器片、P348の柱切取穴から土師器片が出土した。



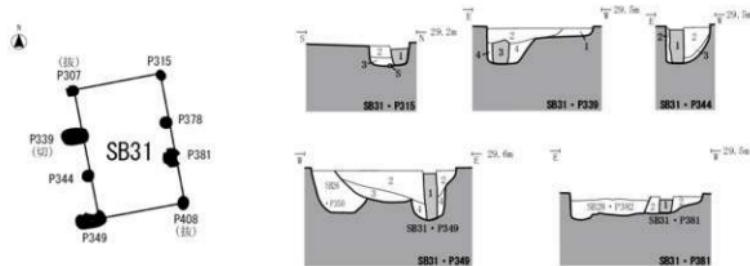
### 【SB30 挖立柱建物跡】(第77・83・84図、第11・12-3表)

南北2間、東西1間の建物跡である。建物はP341・345・351・379・384・409の6個の柱穴で構成される。SB28・29・31・32、P347と重複し、これらより古い。検出した柱穴のうち、P341・345・379・409の4個から柱痕跡を確認し、2個(P351・384)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長3.5m、梁行が南側柱列で総長3.5mである。方向は真北に対して西に8°傾く(N-8°-W)。柱穴は掘方の規模が長軸46~65cm、平面形が円形・隅丸方形・隅丸長方形・不整形で、深さは17~42cmである。柱痕跡は長軸が19~22cm、平面形が円形である。遺物はP341・345の掘方埋土から土師器片、P351・384の柱抜取穴から土師器片が出土した。



### 【SB31 挖立柱建物跡】(第78・83・84図、第11・12-3表)

南北3間、東西1間の南北棟建物跡である。建物はP307・315・339・344・349・378・381・408の8個の柱穴で構成される。SI4、SB26・27・29・30・32、P338・340・347・380と重複し、SI4、SB26・30より新しく、SB27・29・32、P338・340・347・380より古い。検出した柱穴のうち、P315・344・349・378・381の5個から柱痕跡を確認した。P339は柱が切り取られていた。2個(P307・408)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長5.3m、梁行が南側柱列で総長3.5mである。方向は真北に対して西に10°傾く(N-10°-W)。柱穴は掘方の規模が長軸43~128cm、平面形が円形・楕円形で、深さは16~47cmである。柱痕跡は長軸が16~20cm、平面形が円形・楕円形である。遺物はP307の柱抜取穴から土師器片が出土した。



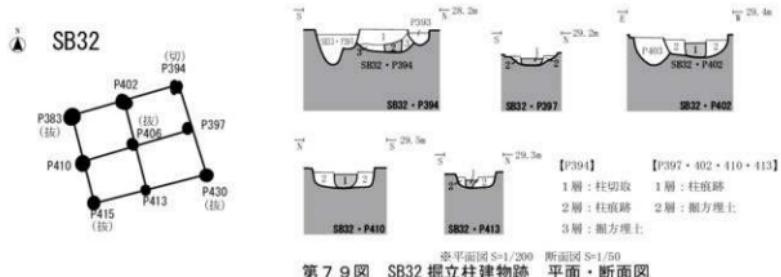
【P315・344】1層：柱痕跡 2・3層：柱方理土  
 【P349】1層：柱痕跡 2・3・4層：柱方理土  
 【P381】1層：柱痕跡 2層：柱方理土

※平面図 S=1/200 断面図 S=1/50

第78図 SB31 堀立柱建物跡 平面・断面図

### 【SB32 堀立柱建物跡】(第79・80・83・84図、第11・12・3表)

東西2間、南北2間の総柱建物跡である。建物はP383・394・397・402・406・410・413・415・430の9個の柱穴で構成される。SB30・31・33、P393・403と重複し、SB30・31、P403より新しく、SB33、P393より古い。検出した柱穴のうち、P397・402・410・413の4個から柱痕跡を確認した。P394は柱が切り取られていた。4個(P383・406・415・430)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長4.6m、梁行が西側柱列で総長3.7mである。方向は真北に対して西に15°傾く(N-15°-W)。柱穴は堀方の規模が長軸42~66cm、平面形が円形・楕円形で、深さは12~25cmである。柱痕跡は長軸が16~26cm、平面形が円形・楕円形である。遺物はP383・406の柱抜取穴から土師器坏(第80図-1)が出土した。



※平面図 S=1/200 断面図 S=1/50

第79図 SB32 堀立柱建物跡 平面・断面図

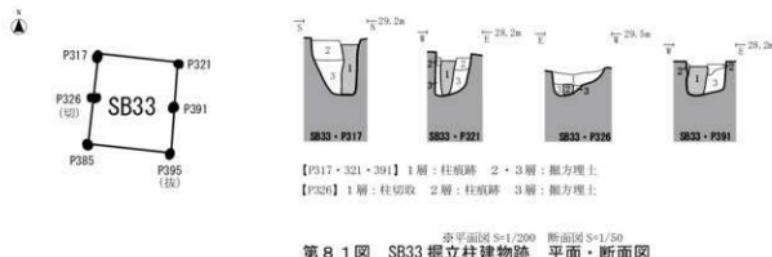


No.	遺物・層	種別	断面	特徴	参考文献
1	SB32・P406 抜取穴	上部器	灰	外縁部 外面：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ、出目処理、色調：外面・明黄褐色(10YR8/3)、内面・黒色(32/0)。底 ～胴部 基：口径(14.2)cm、残存高4.0cm、厚さ0.4cm	C-2

第80図 SB32・P406 出土遺物

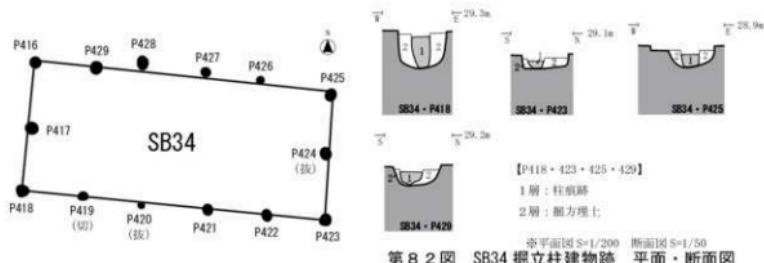
### 【SB33 挖立柱建物跡】(第81・83・84図、第11・12-3表)

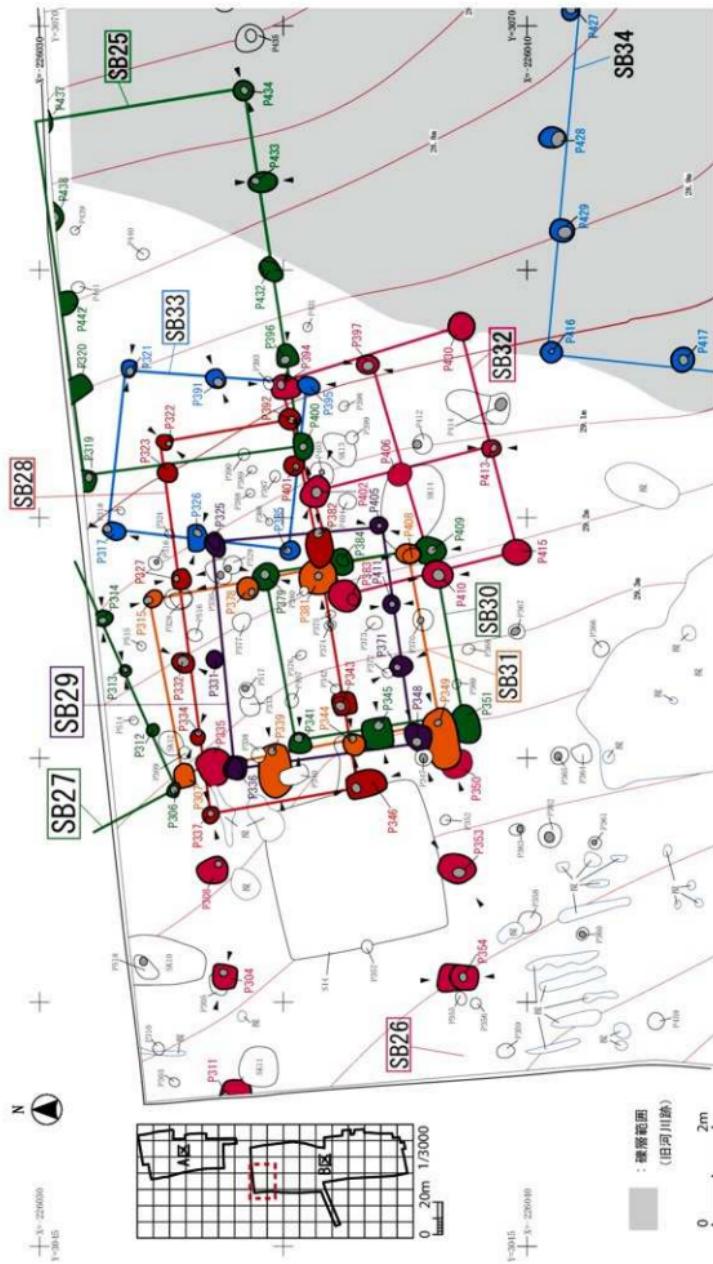
南北2間、東西1間の南北棟建物跡である。建物はP317・321・326・385・391・395の6個の柱穴で構成される。SB29・32と重複し、SB32より新しく、SB29より古い。検出した柱穴のうち、P317・321・385・391の4個から柱痕跡を確認した。P326は柱が切り取られていた。P395は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長3.8m、梁行が北側柱列で総長3.3mである。方向は真北に対して東に6°傾く(N-6°-E)。柱穴は掘方の規模が長軸38~58cm、平面形が円形・楕円形・隅丸長方形で、深さは28~50cmである。柱痕跡は長軸が16~21cm、平面形が円形・楕円形である。遺物はP395の柱抜取穴から土師器片が出土した。



### 【SB34 挖立柱建物跡】(第82・88・90図、第11・12-3表)

東西5間、南北2間の東西棟建物跡である。建物はP416・417・418・419・420・421・422・423・424・425・426・427・428・429の14個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、P416・417・418・421・422・423・425・426・427・428・429の11個から柱痕跡を確認し、P419は柱が切り取られていた。2個(P420・424)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が南側柱列で総長12.4m、梁行が西側柱列で総長5.3mである。方向は真北に対して東に5°傾く(N-5°-E)。柱穴は掘方の規模が長軸25~51cm、平面形が円形・楕円形で、深さは5~43cmである。柱痕跡は長軸が11~33cm、平面形が円形・楕円形である。遺物はP428の掘方埋土から土師器片が出土した。





第83図 SB25~33 挖立柱跡 (1)



1. SB25 挖立柱建物跡 完掘状況（南から）



2. SB25・P396 断面（南から）



3. SB25・P434 断面（南から）



4. SB26～33 挖立柱建物跡 完掘状況（南から）



5. SB26・P353 断面（南から）



6. SB27・P314 断面（南から）



7. SB28・P337 断面（南から）



8. SB29・P348 断面（北から）



9. SB30・P379 断面（東から）



10. SB25・P315 断面（西から）

11. SB32・P403（左）、  
P402（右）断面（北から）

12. SB33・P434 断面（西から）

第84図 SB25～33 挖立柱建物跡（2）

### 【SB35 挖立柱建物跡】(第 85・88・90 図、第 11・12-3 表)

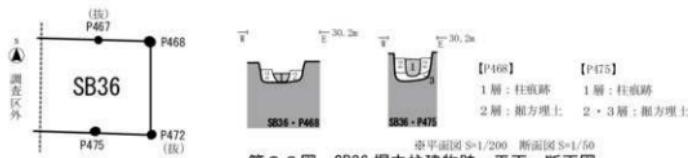
東西 2 間、南北 1 間の東西棟建物跡である。建物は P443・444・445・446・447・448 の 6 個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、P443・444・445・447・448 の 5 個から柱痕跡を確認し、P446 は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長 5.3m、梁行が西側柱列で総長 4.7m である。方向は真北に対して東に 7° 傾く (N-7° -E)。柱穴は掘方の規模が長軸 44~60cm、平面形が円形・隅丸方形で、深さは 12~23cm である。柱痕跡は長軸が 19~26cm、平面形が円形・梢円形である。遺物は P443 の掘方埋土から須恵器片が出土した。



第 8-5 図 SB35 挖立柱建物跡 平面・断面図

### 【SB36 挖立柱建物跡】(第 86・89・90 図、第 11・12-3 表)

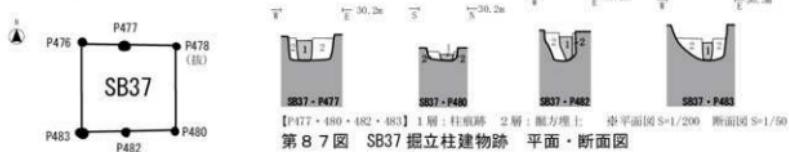
東西 1 間以上、南北 1 間の東西棟建物跡である。建物は P467・468・472・475 の 4 個の柱穴で構成される。P473 と重複し、これより新しい。検出した柱穴のうち、P468・475 の 2 個から柱痕跡を確認し、2 個 (P467・472) は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が東側柱列で総長 3.7m、梁行が北側柱列で総長 2.2m である。方向は真北である (N-0° -E)。柱穴は掘方の規模が長軸 33~50cm、平面形が円形・梢円形で、深さは 17~33cm である。柱痕跡は長軸が 21~22cm、平面形が円形・梢円形である。遺物は P467 の柱抜取穴から土師器片が出土した。



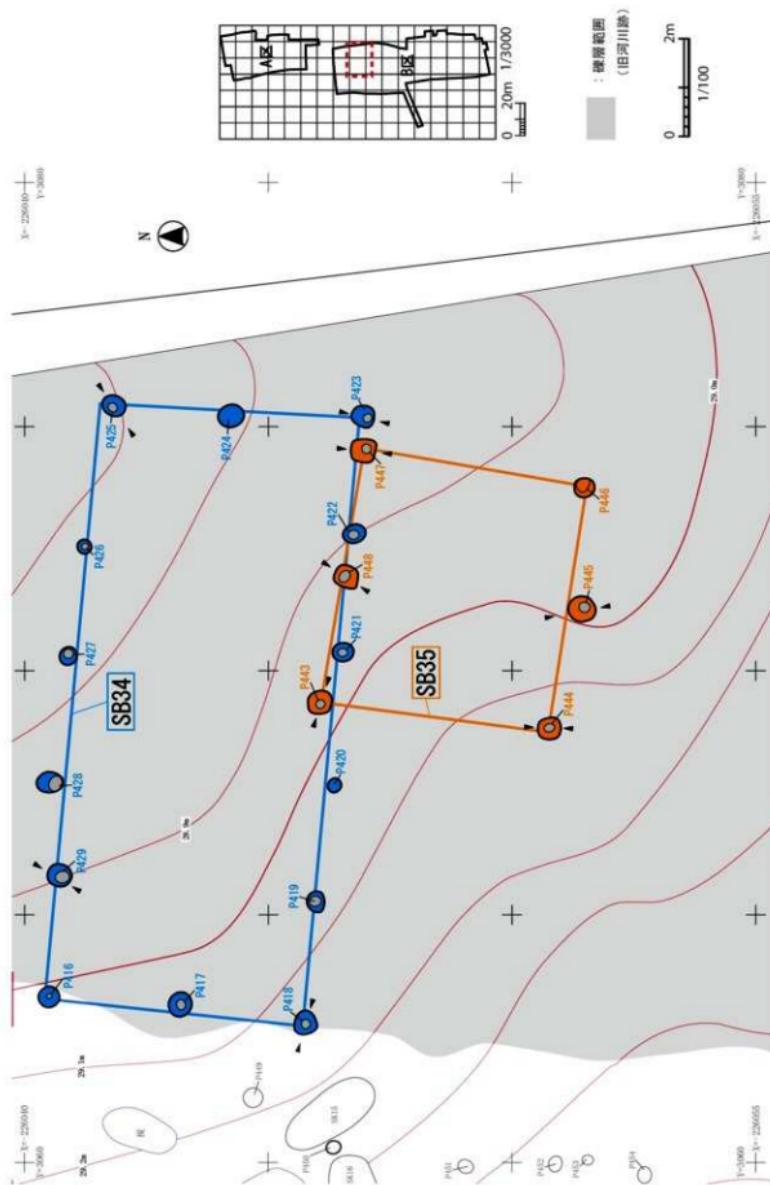
第 8-6 図 SB36 挖立柱建物跡 平面・断面図

### 【SB37 挖立柱建物跡】(第 87・89・90 図、第 11・12-3 表)

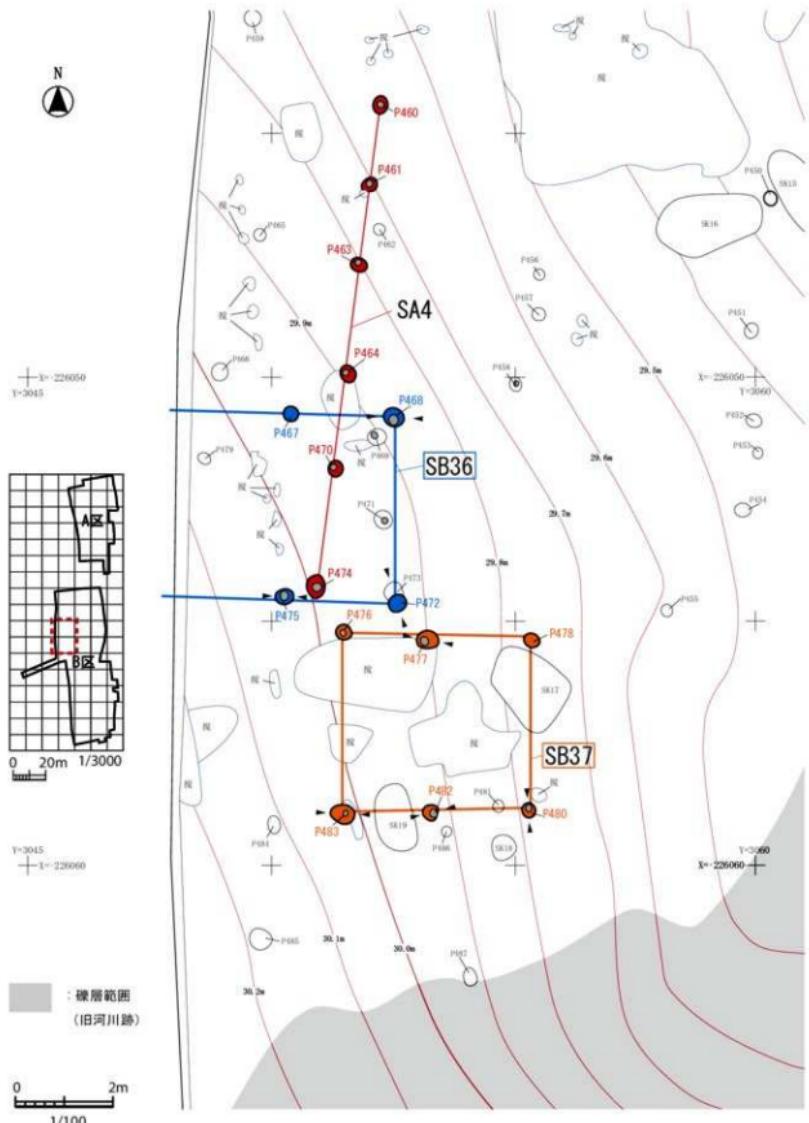
東西 2 間、南北 1 間の東西棟建物跡である。建物は P476・477・478・480・482・483 の 6 個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、P476・477・480・482・483 の 5 個から柱痕跡を確認し、P478 は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長 3.9m、梁行が東側柱列で総長 3.6m である。方向は真北に対して東に 1° 傾く (N-1° -E)。柱穴は掘方の規模が長軸 33~47cm、平面形が円形・梢円形で、深さは 7~36cm である。柱痕跡は長軸が 13~19cm、平面形が円形・梢円形である。遺物は P483 の掘方埋土から土師器片が出土した。



第 8-7 図 SB37 挖立柱建物跡 平面・断面図



第88図 SB34・35 樹立柱建物跡



第89図 SB36・37 掘立柱建物跡



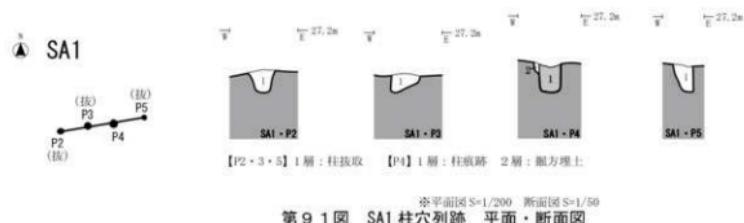
第90図 SB34～37 掘立柱建物跡

#### 4) 柱穴列跡 (第 91~96 図、第 13・14 表)

A 区北端・南端、B 区中央部で 4 条確認した。確認面は IVa 層である。それぞれの特徴については第 13・14 表にまとめた。

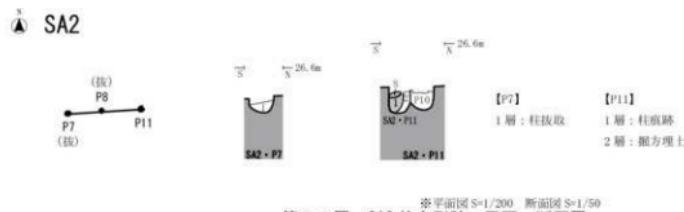
##### 【S A 1 柱穴列跡】(第 91・95・96 図、第 13・14 表)

東西方向に延びる 3 間の柱穴列である。A 区北側で確認した。柱列は P2・3・4・5 の 4 個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、P4 から柱痕跡を確認し、3 個 (P2・3・5) は柱が抜き取られていた。総長 3.5m で、柱間寸法は西から 1.2m・1.0m・1.3m である。方向は真北に対して西に 80° 傾く (N-80° -W)。柱穴は長軸 21~29cm の円形で、深さは 20~30cm である。柱痕跡は長軸 22cm の円形である。遺物は出土していない。



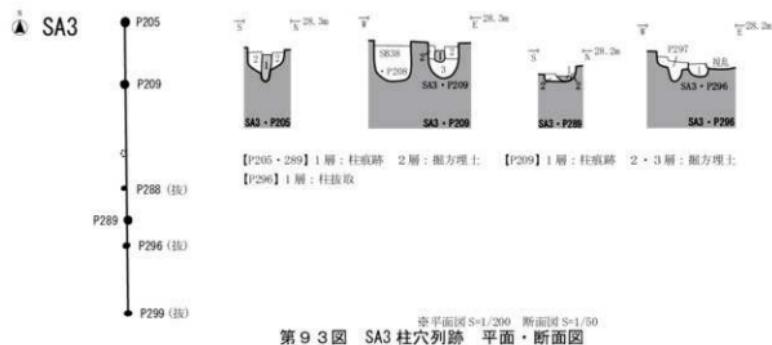
##### 【S A 2 柱穴列跡】(第 92・95・96 図、第 13・14 表)

東西方向に延びる 2 間の柱穴列である。A 区北側で確認した。柱列は P7・8・11 の 3 個の柱穴で構成される。P10 と重複し、これより古い。検出した柱穴のうち、P11 から柱痕跡を確認し、2 個 (P7・8) は柱が抜き取られていた。総長 3.0m で柱間寸法は西から 1.4m・1.6m である。方向は真北に対して西に 86° 傾く (N-86° -W)。柱穴は長軸 22~29cm の円形・不整形で、深さは 10~26cm である。柱痕跡は長軸 15cm の円形である。遺物は出土していない。



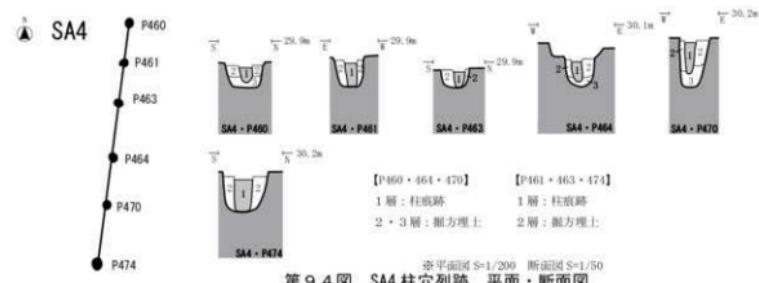
### 【SA3 柱穴列跡】(第93・95・96図、第13・14表)

南北方向に延びる5間の柱穴列である。A区南側で確認した。柱列はP205・209・288・289・296・299の6個の柱穴で構成される。SK9、P265・297・298と重複し、これらより新しい。検出した柱穴のうち、P205・209・289から柱痕跡を確認し、3個(P288・296・299)は柱が抜き取られていた。総長11.9mで、柱間寸法は北から2.5m・4.3m・1.3m・1.0m・2.8mである。方向は真北に対して東に1°傾く(N-1°-E)。柱穴は長軸22~32cmの円形・楕円形で、深さは8~31cmである。柱痕跡は長軸11~16cmの円形である。遺物は出土していない。



### 【SA4 柱穴列跡】(第94~96図、第13・14表)

南北方向に延びる5間の柱穴列である。B区北側で確認した。柱列はP460・461・463・464・470・474の6個の柱穴で構成される。検出した柱穴のすべてから柱痕跡を確認した。総長10.0mで、柱間寸法は北から1.7m・1.6m・2.3m・1.9m・2.5mである。方向は真北に対して西に8°傾く(N-8°-W)。柱穴は長軸34~42cmの円形・楕円形で、深さは18~50cmである。柱痕跡は長軸13~19cmの円形である。遺物はP474掘方埋土から土師器片が出土している。



第13表 石垣造跡 柱穴列跡 属性表 SA1~4

遺構 NO.	遺構 方向	平面規模		柱穴列の方向		備考 【構成Pn・重複関係・その他】
		折行長さ(m)	/柱間寸法	柱穴列傾斜角度 /真北基準		
SA1	3間 東西	3.5	1.2+1.0+1.3	西80° N-80° W	構成P1 : P2・3・4・5,	
SA2	2間 東西	3.0	1.4+1.6	南96° N-96° W	構成P1 : P7・8・11, P10より左	
SA3	5間 北北	11.9	2.5+4.1+3+1.2+2.8	東1° N-1° E	構成P1 : P205・209・288・289・296・299, P265・297・298, SR9より新。	
SA4	5間 北北	10.0	3.7+1.6+2.3+1.9+2.5	西9° N-9° W	構成P1 : P460・461・463・464・470・474,	

\*柱間寸法は、東西方向のものは西から、南北方向のものは北から順に記した。

第14表 石垣造跡 柱穴列跡 柱穴跡 属性表 SA1~4

遺構 番号	柱穴跡 (長軸・短軸 cm, 埋没高 m)						柱 体 距	柱 高 度	備 考 〔重複・出土遺物等〕
	平面部 直角	直角 短軸	残存 深度	埋没 高さ	埋土 厚さ	平面部 長軸			
SA 1	2 円形	27	23	24	26.6	直六:15cm	—	—	— 直抜取
	3 円形	29	29	28	26.6	直六:14cm	—	—	— 直抜取
	4 円形	29	28	30	26.4	直六:14cm	円形	22	4A う
	5 円形	24	28	28	26.4	直六:14cm	—	—	— 直抜取
SA 2	7 扁椭形	29	25	10	26.1	直六:16cm	—	—	— 直抜取
	8 不規則	23	23	18	26.0	直六:9cm	—	—	— 直抜取
	11 円形	22	22	28	25.8	23cm	円形	15	1A Jn P19より直 抜取。埠1 黒褐色土
SA 3	205 円形	29	29	30	27.5	44cm	円形	13	10 1A う
	209 円形	30	30	30	27.6	直六:18cm 圓錐:2.4cm	円形	11	11 6A 1+
	208 不規則	22	19	10	27.9	直六:9cm	—	—	— 直抜取
SA 4	209 円形	32	29	8	27.9	12cm	円形	16	14 4A Jn
	208 楕円形?	26	211	13	27.6	直六:38cm	—	—	— P265・297・P258, SR9より新。 直抜取。埠1 黑褐色土
	209 楕円形	31	22	31	27.7	直六:16cm	—	—	— 直抜取
400	椭円形	36	22	25	28.4	直六:15cm 圓錐:2.10cm	円形	15	13 4A 1+
	401 楕円形	27	18	28	28.4	6cm	円形	14	14 4A Jn
403	403 円形	24	32	18	29.6	4A+B	円形	13	13 4A Jn
	404 円形	30	30	47	29.4	直六:14cm 圓錐:2.12cm	円形	14	12 4A 1+
470	470 円形	25	25	30	28.4	直六:6cm 圓錐:2.44cm	円形	13	12 4A 1+
	474 円形	42	40	39	29.6	6cm	円形	19	17 4A Jn 土師器

### ●ビット（柱穴・小穴）類型



【柱穴跡】 柱穴跡 (壁面・埋土・埋土・埋土)

### ●土色

- 1: 黒色 (109R2/1)
- 2: 黒褐色 (109R2/1)
- 3: 黃褐色 (109R2/2)
- 4: 黑褐色 (109R2/2)
- 5: 黑褐色 (109R2/3)
- 6: 黄褐色 (109R1/2)
- 7: 黑褐色 (109R1/4)
- 8: 黄褐色 (109R1/1)
- 9: 黑褐色 (109R1/2)
- 10: にじみ 黑褐色 (109R0/3)
- 11: にじみ 黑褐色 (109R5/20)
- 12: 黑褐色 (109R4/2)
- 13: 黑褐色 (109R4/3)
- 14: 黑褐色 (109R4/4)
- 15: 黑褐色 (109R4/5)
- 16: にじみ 黑褐色 (109R6/4)
- 17: 黑褐色 (109R6/4)
- 18: 黄褐色 (109R5/1)
- 19: 黑褐色 (109R5/2)
- 20: 黄褐色 (109R5/3)
- 21: 黄褐色 (109R5/4)
- 22: 黑褐色 (109R5/5)
- 23: 黄褐色 (109R4/25)
- 24: 黄褐色 (109R3/2)

### ●土質

- A: シルト B: 砂質シルト

### ●混入物

- a: 地山ブロック多く含む b: 地山ブロック多く含む c: 地山ブロック少な含む
  - d: 地山ブロック微量含む e: 地山ブロック多く含む f: 地山ブロック含む
  - g: 地山粒子子分量含む h: 季節性
  - j: その他の「上記以外のもの」
- 参考標識の有無なし。下記の内訳については記述を省略した
- 地化物別一覧表 柱土ブロック→埋土ブ

### 【記載例】

- 1a, 1b, 1c, 1d, 1e, 1f, 1g, 1h, 1j: 黒褐色 (109R2/1), 土色: シルト, 混入物: 地山ブロック多く含む

### ●その他の記載事項

#### ■柱穴・セメント跡の記載例

- ・「柱穴」は概定範囲を示す

#### ■記述・ゼット制御の「柱穴・埋土・埋土 (埋土上)」記載事項

- ・柱穴の場合は「柱穴埋土」を記憶する

#### ■「柱穴・壁面」等の記載: 「柱穴・柱穴・埋土」(「柱穴」: 壁面上部が壇以上に分離した場合を示す)

- ・「柱穴・壁面」等の記載: 「柱穴・柱穴・埋土」(「柱穴」: 壁面上部が壇以上に分離した場合を示す)

#### ■「柱穴・柱穴の壁面・埋土・埋土」(「柱穴」: 壁面上部が壇以上に分離した場合を示す)

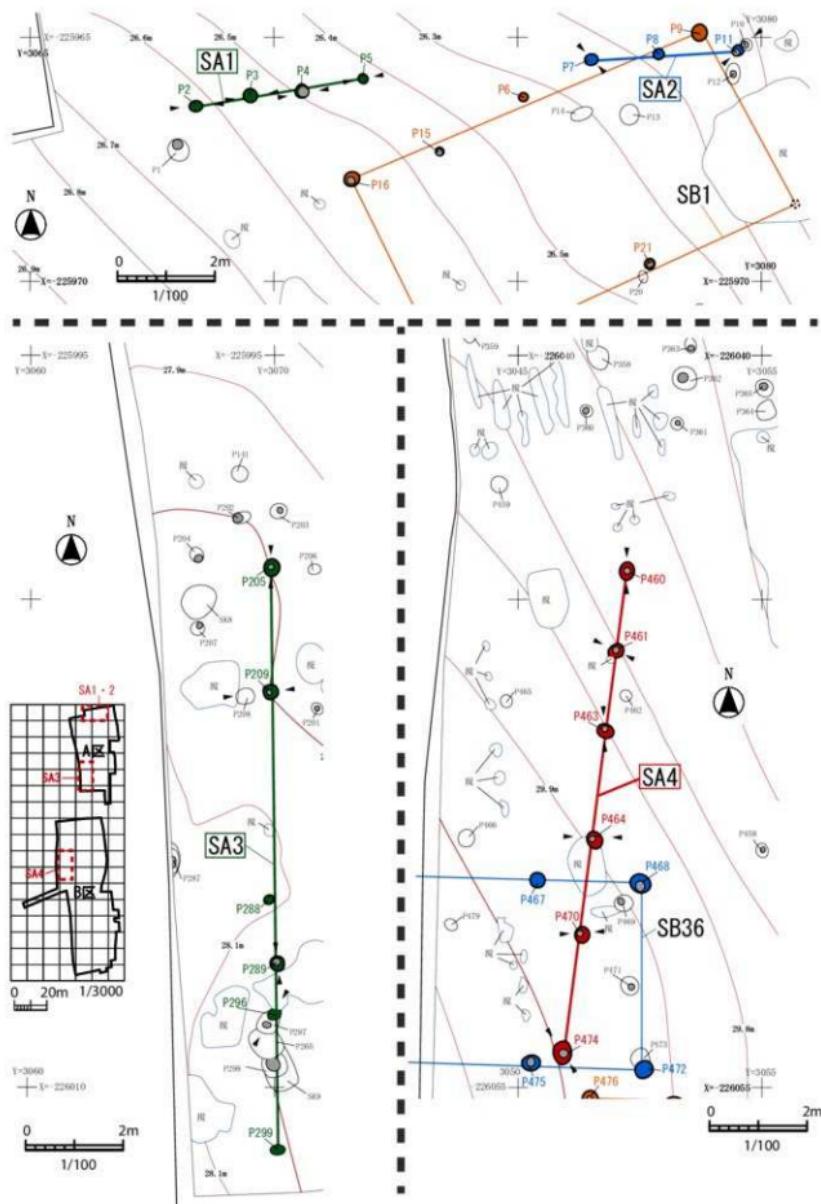
- ・「柱穴・柱穴の壁面・埋土・埋土」(「柱穴」: 壁面上部が壇以上に分離した場合を示す)

#### ■参考標識の記載事項

- ・直抜取: 柱が削き取られているもの

- ・柱切取: 柱が切り取られているもの

- ・この他: 壁面剥落・出土遺物を記載



第95図 S A 1~4 柱穴列跡 (1)



1. SA1 柱穴列跡 完掘状況（北から）



2. SA1・P4 断面（南から）



3. SA2・P8 断面（南から）



4. SA4 柱穴列跡 完掘状況（南から）



5. SA3・P205 断面（南から）



6. SA3・P209 断面（南から）



7. SA3・P288 断面（東から）



8. SA3・P289 断面（東から）



9. SA4・P460 断面（東から）



10. SA4・P474 断面（東から）



11. SA4・P463 断面（東から）



12. SA4・P470 断面（南から）

第96図 SA1~4 柱穴列跡（2）

### (3) 土坑・井戸跡

土坑 32 基、井戸 1 基を検出した。それぞれの特徴については第 15 表にまとめた。

第 15 表 石垣遺跡 土坑・井戸跡属性表

遺構No.	平面形	規模 (m)	深さ (m)	断面形	堆積土	出土遺物	備考
SK 1	楕円形	1.34×0.89	0.25	U字形	人為	—	SK2より新しい。
SK 2	楕円形	2.69×1.00	0.35	直状	人為	—	SK2・P11、SK3・3より古い。
SK 3	楕円形	2.11×0.69	0.44	不整形	自然	圓文土器	SK2より新しい。 陷し穴。
SK 4	方形	1.17×1.14	0.20	直状	自然	—	—
SK 5	不整形	2.72×1.46	0.79	不整形	自然	圓文土器	—
SK 6	円形	1.20×1.17	0.23	直状	自然	—	SB9・P121、SB11・P122より新しい。
SK 7	楕円形	0.71×0.56	0.20	U字形	人為	—	P140、S11より新しい。
SK 8	楕円形	0.70×0.58	0.12	直状	人為	—	—
SK 9	楕円形	1.71×1.63	0.24	直状	人為	—	S43・P296、P265・297・298より古い。
SK 10	不整形	1.53×1.04	0.39	直状	自然	—	P518より新しい。
SK 11	円形	0.80×0.80	0.22	U字形	自然	土師器	SH20・P31より新しい。
SK 12	円形	0.53×0.48	0.14	U字形	自然	—	P309より古い。
SK 13	楕円形	0.88×0.50	0.13	不整形	人為	土師器	P309より古い。
SK 14	不整形	1.78×1.12	0.24	不整形	人為	—	SB29・P405、SB30・P409、SB31・P408、SB32・P406、SB32・P410より古い。
SK 15	圓丸長方形	2.10×0.94	0.87 (1.10)	漏斗形	自然	—	陷し穴。
SK 16	楕円形	2.15×1.24	0.28	直状	自然	—	—
SK 17	楕円形	1.77×1.18	0.35~0.45	不整形	自然	—	—
SK 18	円形	0.50×0.49	0.09	直状	自然	—	—
SK 19	圓丸長方形	1.34×0.78	0.24	直状	自然	土師器	—
SK 20	楕円形	0.45×0.44	0.15	U字形	人為	—	—
SK 21	円形	0.80×0.73	0.13	U字形	自然	—	—
SK 22	楕円形	0.92×1.23	0.42	不整形	自然	—	—
SK 23	長楕円形	2.31×1.08	0.24	直状	自然	—	—
SK 24	楕円形?	(1.14)×0.74	0.33	U字形	自然	—	S16より古い。
SK 25	楕円形	1.21×0.91	0.62	U字形	自然	土師器	—
SK 26	円形	0.73×0.70	0.46	U字形	自然	—	—
SK 27	楕円形	1.23×0.97	0.19	直状	自然	土師器	—
SK 28	圓丸長方形	2.99×1.17	0.22	直状	人為	土師器 須恵器	S19より新しい。
SK 29	楕円形	1.18×0.77	0.48	U字形	人為	圓文土器	S19より古い。
SK 30	長楕円形	1.30×0.66	0.77	U字形	自然	—	S19より新しい。
SK 31	楕円形	0.83×0.69	0.29	U字形	自然	—	S19、SK32より新しい。
SK 32	円形	1.50×1.36	0.42	U字形	自然	—	S19、SK31より古い。
SE 1	円形	3.34×3.31	1.59	漏斗形	自然	—	—

#### 【SK 1 土坑】(第 97 図、第 15 表)

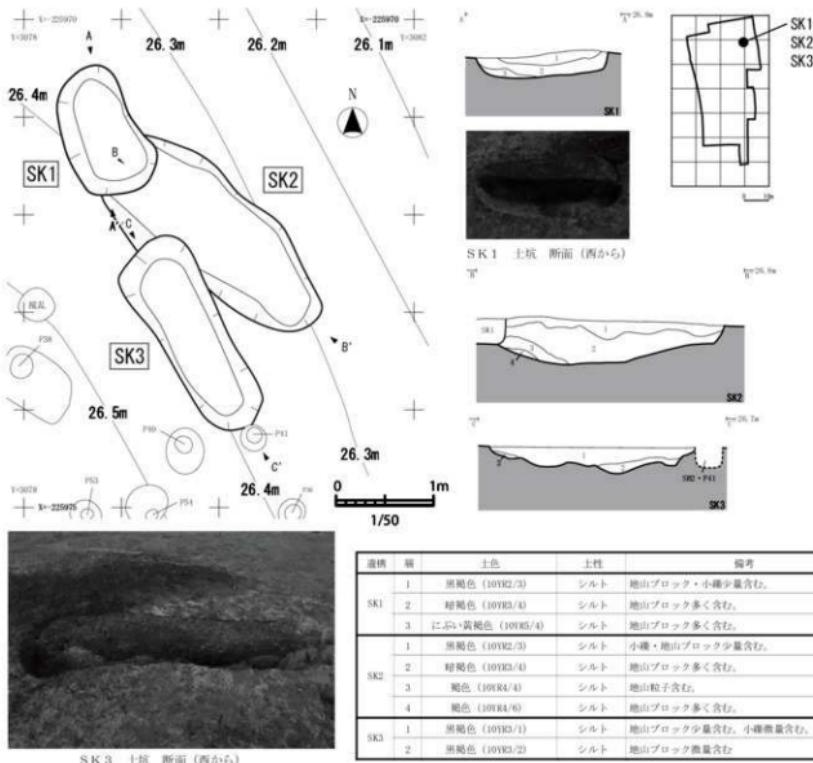
A 区の北側の標高 26.4m の平坦面に位置する。確認面は IVa 層である。SK2 と重複し、これより新しい。平面形は長軸 1.34m、短軸 0.89m の南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは 25cm である。断面形は U 字形、底面は平坦である。堆積土は 3 層に分かれ、いずれも人為堆積である。遺物は出土していない。

## 【SK2土坑】(第97図、第15表)

A区の北側の標高 26.3m の平坦面に位置する。確認面はIVa 層である。SB2、SK1・3 と重複し、これらより古い。平面形は長軸 2.6m、短軸 1.0m の南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは 35cm である。断面形は皿状、底面は平坦である。堆積土は 4 層に分かれ、いずれも人為堆積である。遺物は出土していない。

## 【SK3土坑】(第97図、第15表)

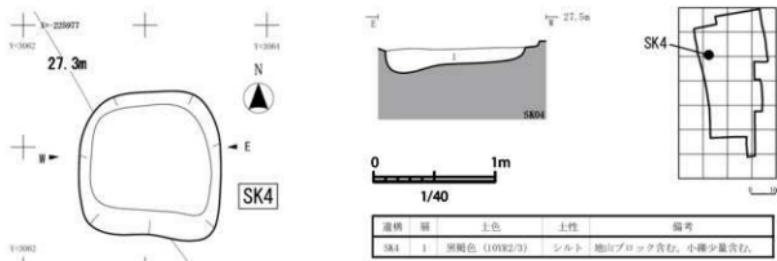
A区の北側の標高 26.4m の平坦面に位置する。確認面はIVa 層である。SK2 と重複し、これより新しい。平面形は長軸 2.11m、短軸 0.69m の南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは 44cm である。断面形は不整形、底面には凹凸がある。堆積土は 2 層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は堆積土から繩文土器片が出土した。



第97図 SK1・2・3 土坑

## 【SK4土坑】(第98図、第15表)

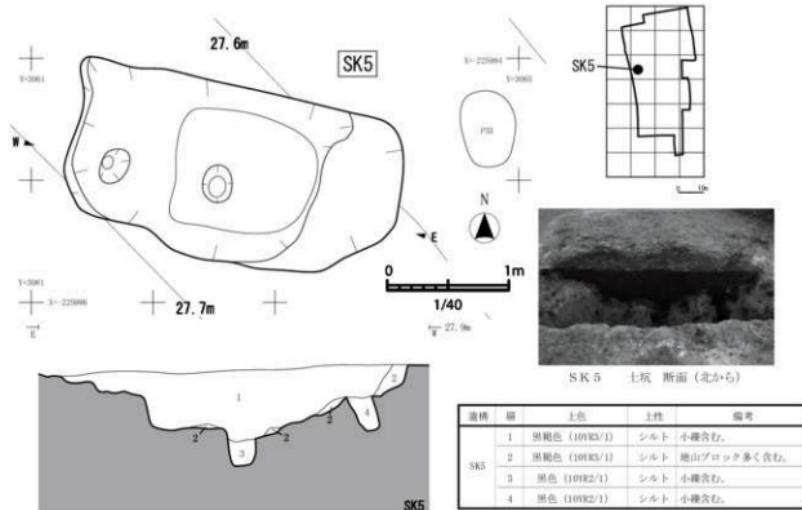
A区の北側の標高27.3mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。平面形は長軸1.17m、短軸1.14mの方形を呈し、深さは20cmである。断面形は皿状、底面は平坦である。堆積土は自然堆積の単層である。遺物は出土していない。



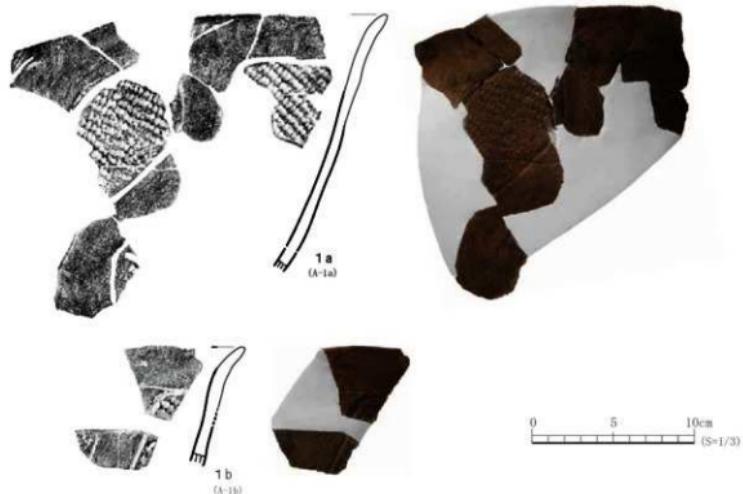
第98図 SK4 土坑

## 【SK5土坑】(第99・100図、第15表)

A区の北側の標高27.6mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。平面形は長軸2.72m、短軸1.46mの東西方向に長軸をもつ不整形を呈し、深さは79cmである。断面形は不整形で、底面には凹凸があり、西側に直径31cm、深さ28cm、中央に直径31cm、深さ20cmの小穴がある。堆積土は4層に分かれ、いずれも自然堆積である。形状から陥し穴と推定される。遺物は堆積土から縄文土器深鉢(第100図1a・b)が出土した。



第99図 SK5 土坑(1)

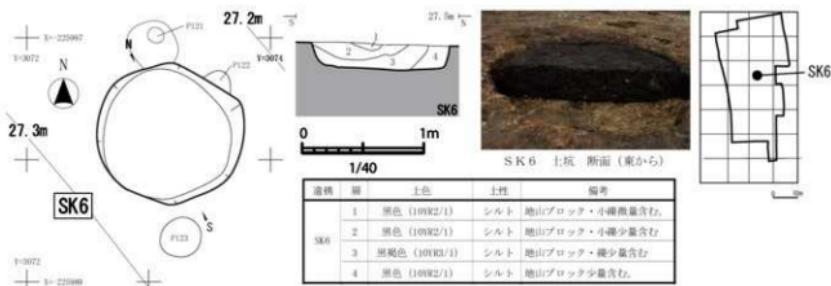


No.	遺構・層	種別	部種	現存	特徴【柱法(外面・内面)・色調(外面・内面)・法縫・その他の特徴の順に記載】	参考
1a・b 堆積土	SK5	甃支土器	深鉢	口縁部 ～側面部 ～底面	外縁：織文(1.0)・(北端織文)・沈継・「ガキ」、内面：ナデ、色調：内外面・灰褐色(7.0IVa/2)、法縫：隙厚0.5	A-1a A-1b

第100図 SK5 土坑（2）

## 【SK6土坑】（第101図、第15表）

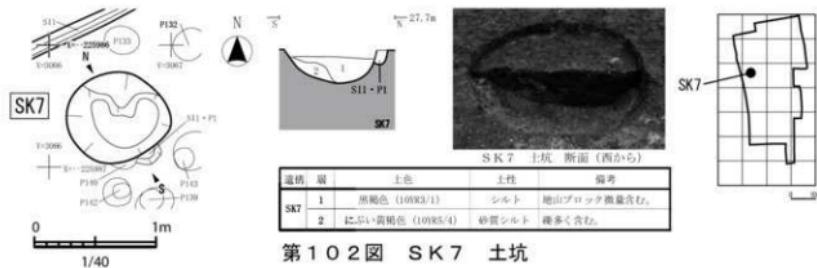
A区の中央の標高27.3mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。SB9・11と重複し、これらより新しい。平面形は長軸1.2m、短軸1.17mの円形を呈し、深さは23cmである。断面形は皿状、底面は平坦である。堆積土は4層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。



第101図 SK6 土坑

## 【SK7土坑】（第102図、第15表）

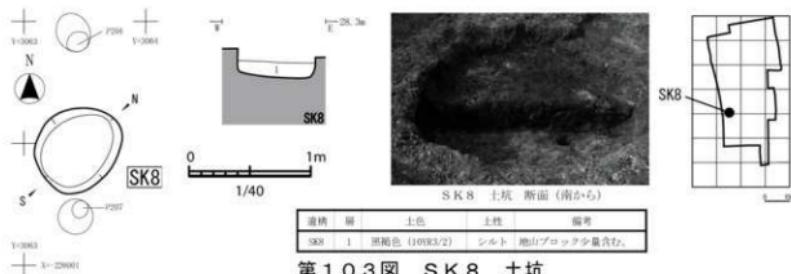
A区の北側の標高27.4mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。SI1、P140と重複し、これらより新しい。平面形は長軸0.71m、短軸0.56mの楕円形を呈し、深さ20cmである。断面形はU字形、底面は平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも人為堆積である。遺物は出土していない。



第102図 SK7 土坑

## 【SK8土坑】(第103図、第15表)

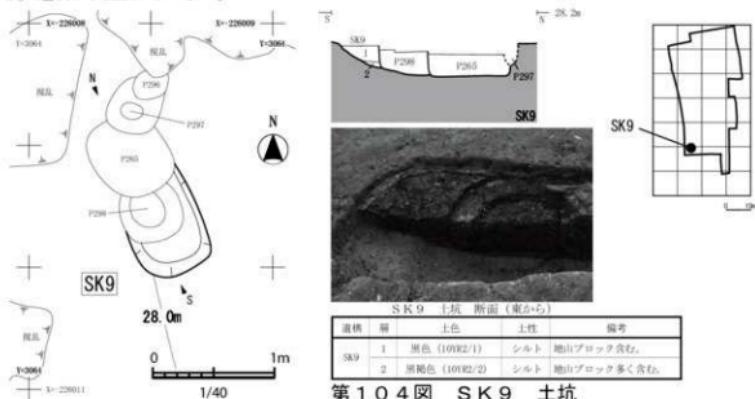
A区の西側の標高28.0mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。平面形は長軸0.7m、短軸0.58mの南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは12cmである。断面形は皿状、底面は平坦である。堆積土は人為堆積の単層である。遺物は出土していない。



第103図 SK8 土坑

## 【SK9土坑】(第104図、第15表)

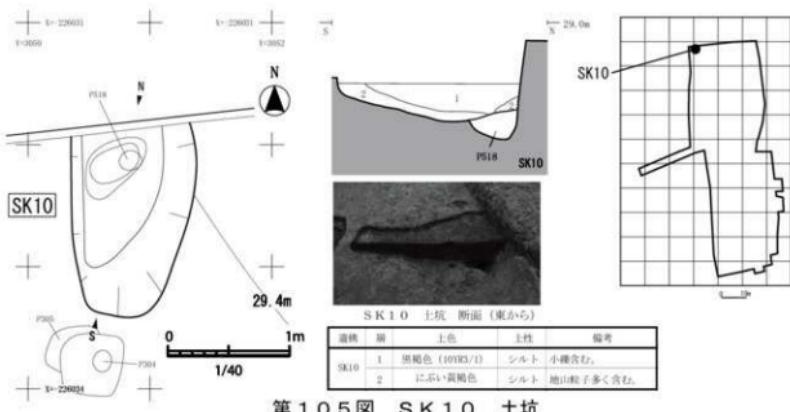
A区の南側の標高28.0mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。SA3、P265・297・298と重複し、これらより古い。平面形は長軸1.71m、短軸1.63mの南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは24cmである。断面形は皿状、底面は平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも人為堆積である。遺物は出土していない。



第104図 SK9 土坑

## 【SK10土坑】(第105図、第15表)

B区の北側の標高 29.4m の平坦面に位置する。確認面はIVa 層である。P518 と重複し、これより新しい。平面形は長軸 1.53m、短軸 1.04m の南北方向に長軸をもつ不整形を呈し、深さは 39cm である。断面形は皿状、底面は平坦である。堆積土は 2 層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。



第105図 SK10 土坑

## 【SK11土坑】(第106図、第15表)

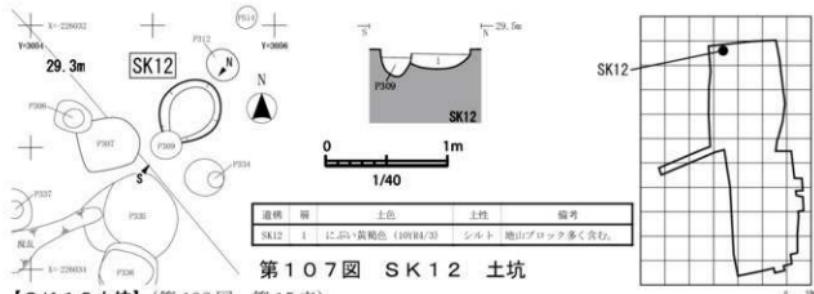
B区の北側の標高 29.5m の平坦面に位置する。確認面はIVa 層である。SB26 と重複し、これより新しい。平面形は長軸 0.8m、短軸 0.8m の円形を呈し、深さは 22cm である。断面形は U 字形、底面は平坦である。堆積土は 2 層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は土坑底面から土師器片が出土している。



第106図 SK11 土坑

## 【SK12土坑】(第107図、第15表)

B区の北側の標高 29.3m の平坦面に位置する。確認面はIVa 層である。P309 と重複し、これより古い。平面形は長軸 0.53m、短軸 0.48m の円形を呈し、深さは 14cm である。断面形は U 字形、底面は平坦である。堆積土は自然堆積の単層である。遺物は出土していない。



【SK13土坑】(第108図、第15表)

B区の北側の標高29.1mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。P399と重複し、これより古い。平面形は長軸0.88m、短軸0.5mの南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは13cmである。断面形は不整形、底面は平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも人為堆積である。遺物は堆積土1層から土師器壺(第108図1・2)が出土した。

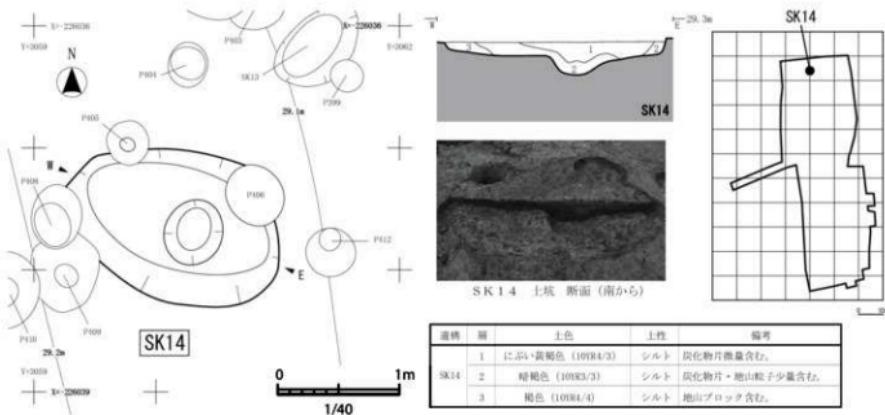


No.	道標・層	種別	断面	残存	特徴	参考	等級
1	SK13 1層	土師器	壺	口縁部 ～胴部	外側：クロロナメ、内側：ヘラミガキ、黑色処理。色調：外側・にぶい・黄褐色(10YR6/3)、内側・褐色(82/0)。	C-3	
2	SK13 1層	土師器	壺	胴部下端～脚部 ～底盤	外側：ヨクヨクナメ、胴部下端～脚部：ヘラミガキ、底部切り離し、脚部～底盤：手持ちヘラ削り・西調整。内側：ヘラミガキ、黑色処理。色調：外側・にぶい・褐色(7.5YR5/4)、内側・黒色(82/0)。出量：底径7.0cm・残存高2.0cm・器厚0.4～0.6cm	C-4	

第108図 SK13 土坑

【SK14土坑】(第109図、第15表)

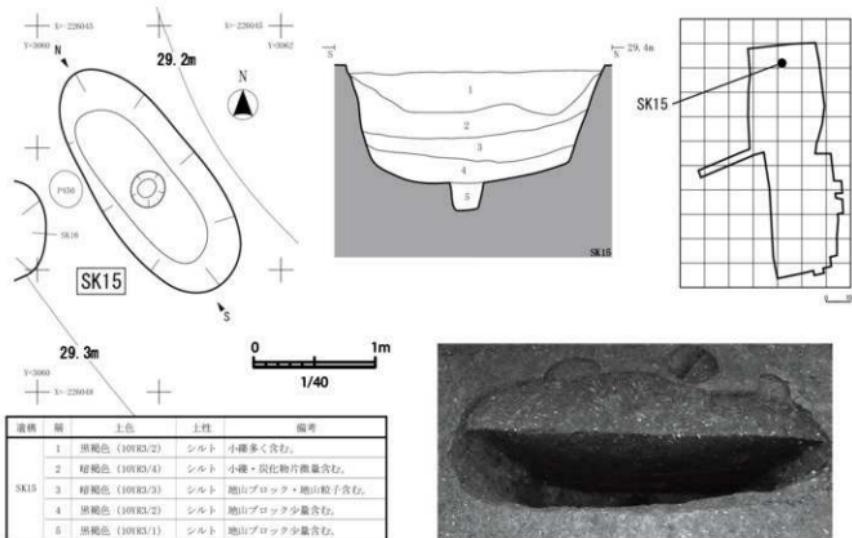
B区の北側の標高29.1mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。SB29・30・31・32と重複し、これらより古い。平面形は長軸1.78m、短軸1.12mの東西方向に長軸をもつ不整形を呈し、深さは24cmである。断面形は不整形、底面は平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも人為堆積である。遺物は出土していない。



第109図 SK14 土坑

## 【SK15土坑】(第110図、第15表)

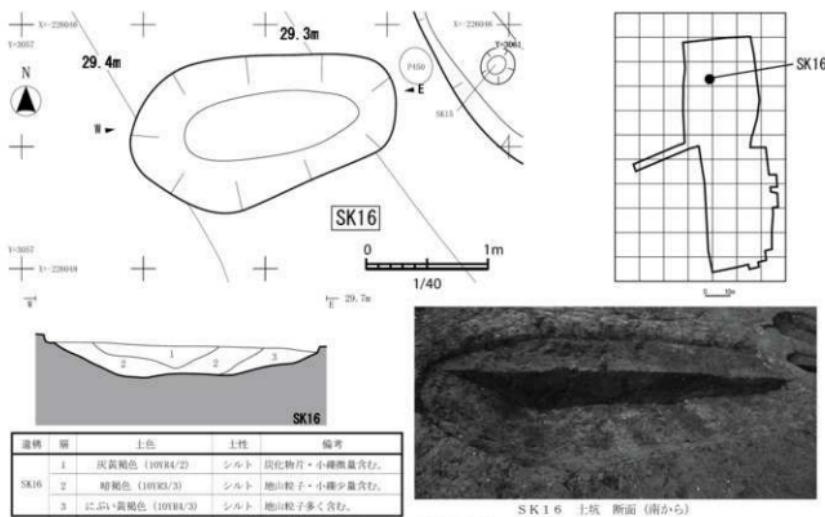
B区の北側の標高29.2mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。平面形は長軸2.1m、短軸0.94mの南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、深さは87cmである。中央に直径30cm、深さ22cmの小穴がある。断面形は漏斗形、底面は平坦である。堆積土は5層に分かれ、いずれも自然堆積である。形状から陥れ穴と推定される。遺物は出土していない。



第110図 SK15 土坑

## 【SK16土坑】(第111図、第15表)

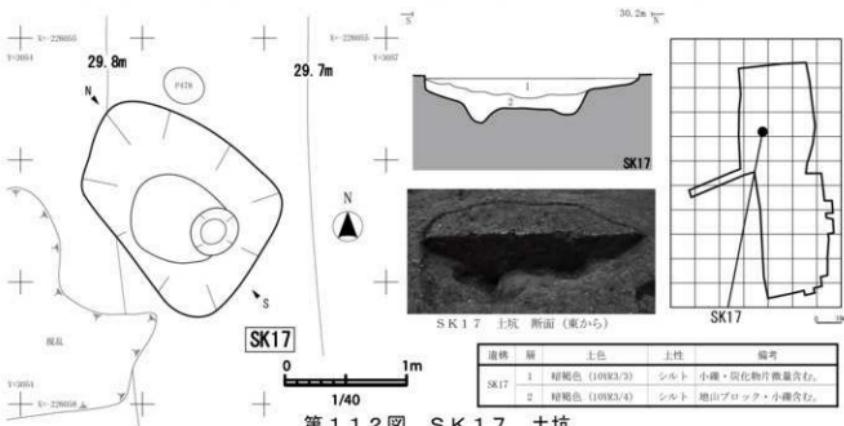
B区の北側の標高29.3mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。平面形は長軸2.15m、短軸1.24mの東西方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは28cmである。断面形は皿状、底面は平坦である。堆積土は3層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。



第111図 SK16 土坑

## 【SK17土坑】(第112図、第15表)

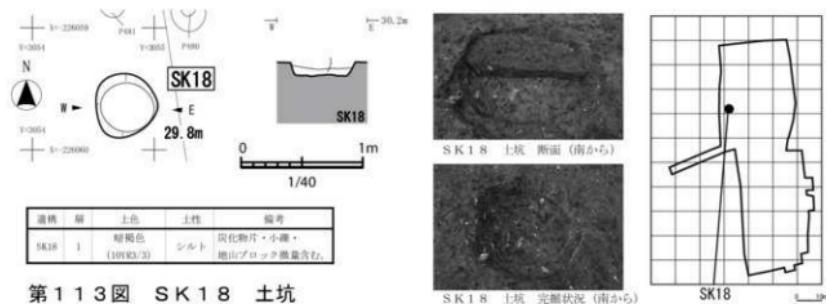
B区の中央の標高29.8mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。平面形は長軸1.77m、短軸1.18mの南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは35~45cmである。断面形は不整形、底面には凹凸がある。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。



第112図 SK17 土坑

## 【SK18土坑】(第113図、第15表)

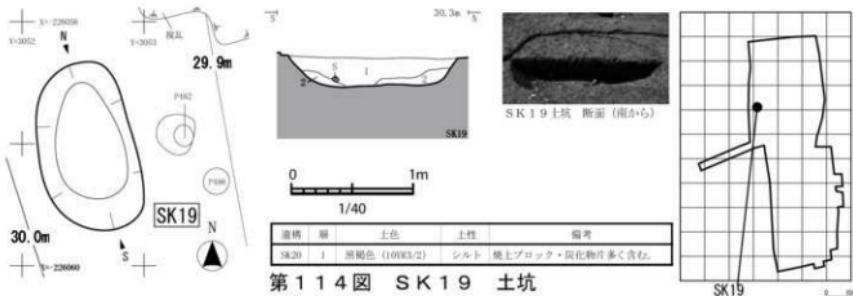
B区の中央の標高29.8mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。平面形は長軸0.5m、短軸0.49mの円形を呈し、深さは9cmである。断面形は皿状、底面は平坦である。堆積土は自然堆積の単層である。遺物は出土していない。



第113図 SK18 土坑

## 【SK19土坑】(第114図、第15表)

B区の中央の標高30.0mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。P518と重複し、これより新しい。平面形は長軸1.34m、短軸0.78mの南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、深さは24cmである。断面形は皿状、底面は平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。堆積土1層から土師器片が出土した。



第114図 SK19 土坑

## 【SK20土坑】(第115図、第15表)

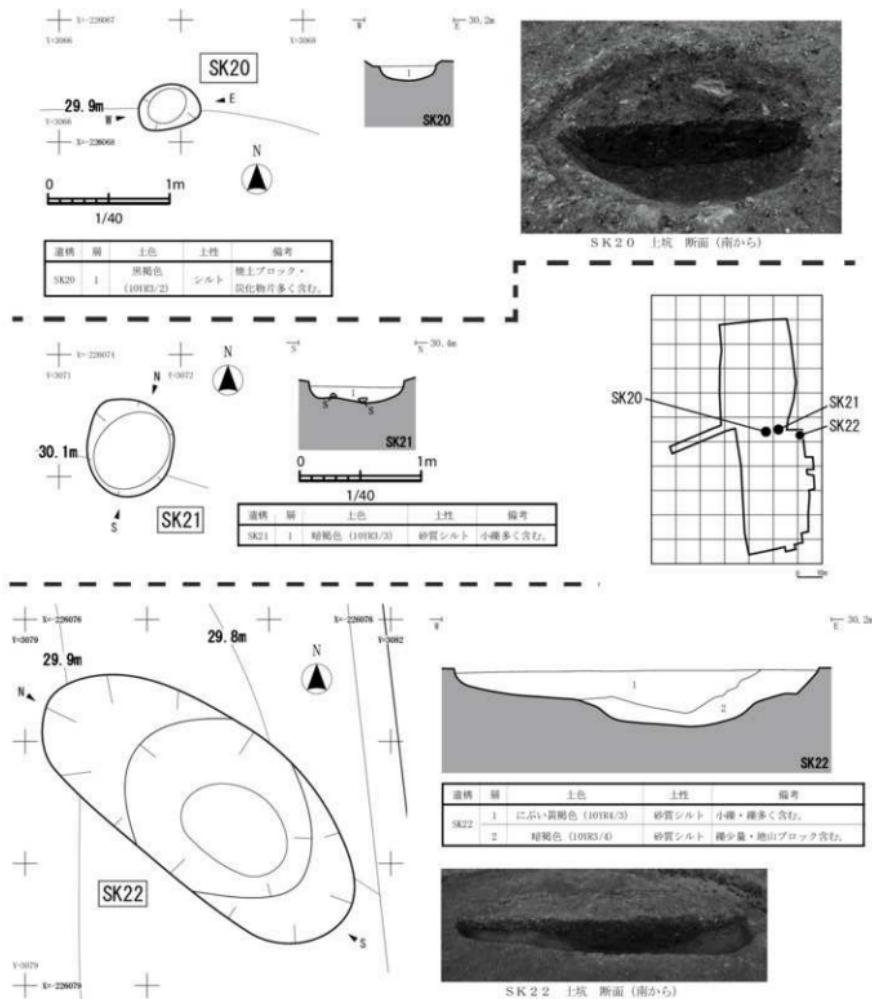
B区の中央の標高29.9mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。平面形は長軸0.45m、短軸0.44mの南北方向に長軸をもつ梢円形を呈し、深さは15cmである。断面形はU字形、底面は平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも人為堆積である。遺物は出土していない。

## 【SK21土坑】(第115図、第15表)

B区の中央の標高30.1mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。平面形は長軸0.8m、短軸0.73mの円形を呈し、深さは13cmである。断面形はU字形、底面は平坦である。堆積土は自然堆積の単層である。遺物は出土していない。

## 【SK20・21・22土坑】(第115図、第15表)

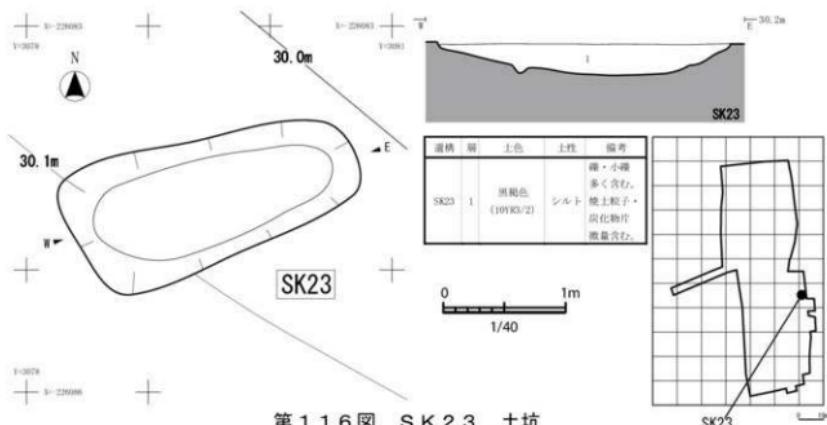
B区の中央、東側の標高29.9mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。平面形は長軸3.02m、短軸1.23mの東西方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは42cmである。断面形は不整形、底面は平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。



第115図 SK20・21・22 土坑

## 【SK23土坑】(第116図、第15表)

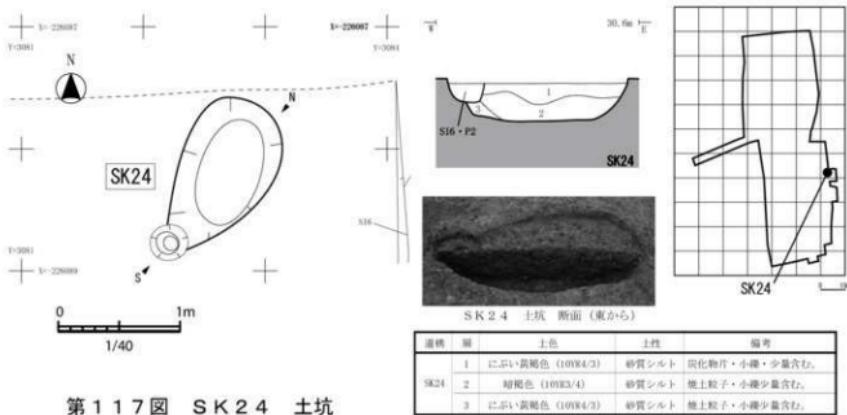
B区の中央、東側の標高30.1mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。平面形は長軸2.31m、短軸1.08mの東西方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは24cmである。断面形は皿状、底面は平坦である。堆積土は自然堆積の単層である。遺物は出土していない。



第116図 SK23 土坑

## 【SK24土坑】(第117図、第15表)

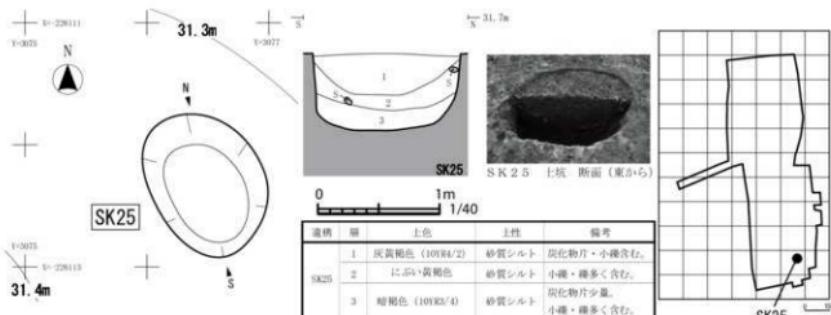
B区の中央、東側の標高30.2mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。SI6と重複し、これより古い。平面形は長軸1.14m、短軸0.74mの南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは33cmである。断面形はU字形、底面は平坦である。堆積土は3層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。



第117図 SK24 土坑

## 【SK25土坑】(第118図、第15表)

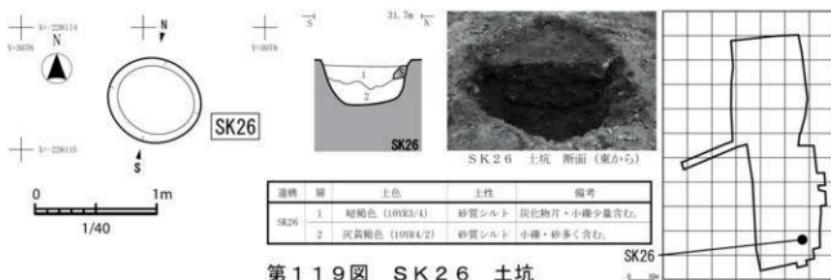
B区の南側の標高31.3mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。平面形は長軸1.21m、短軸0.91mの南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは62cmである。断面形はU字形、底面は平坦である。堆積土は3層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は堆積土から土師器片が出土した。



第118図 SK25 土坑

## 【SK26土坑】(第119図、第15表)

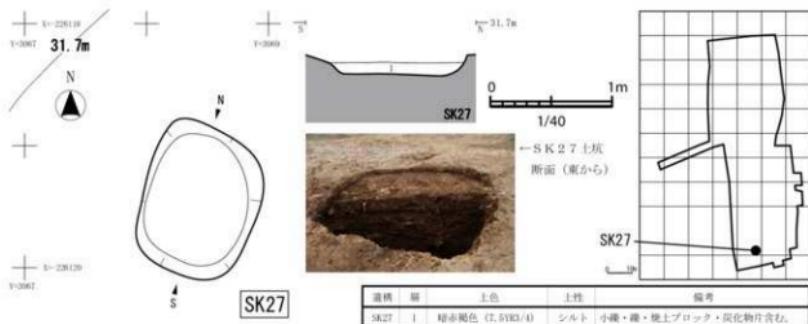
B区の南側の標高31.3mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。平面形は長軸0.73m、短軸0.7mの円形を呈し、深さは46cmである。断面形はU字形、底面は平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。



第119図 SK26 土坑

## 【SK27土坑】(第120図、第15表)

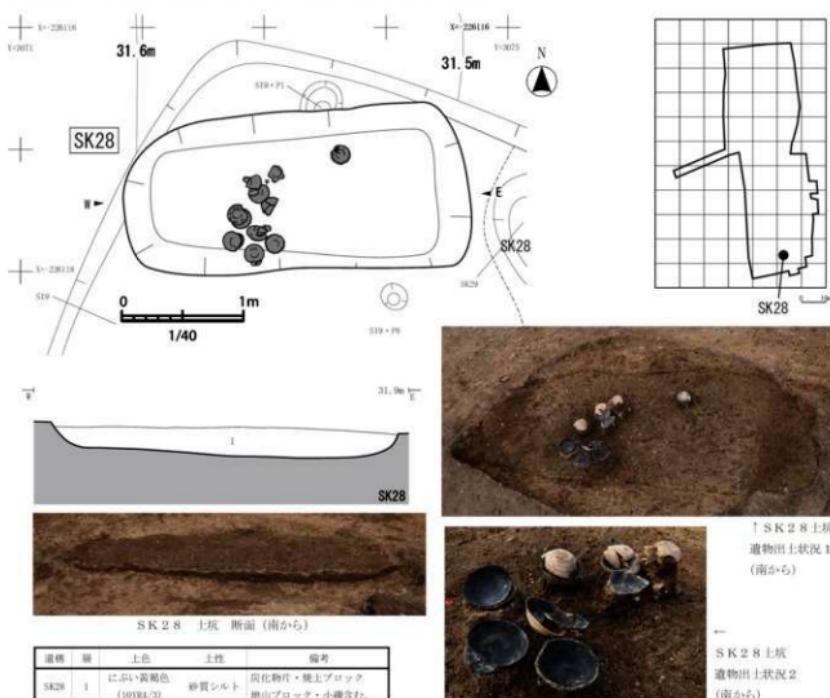
B区の南側の標高31.7mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。平面形は長軸1.23m、短軸0.97mの南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは19cmである。断面形は皿状、底面は平坦である。堆積土は自然堆積の単層である。遺物は堆積土1層から土師器片が出土した。



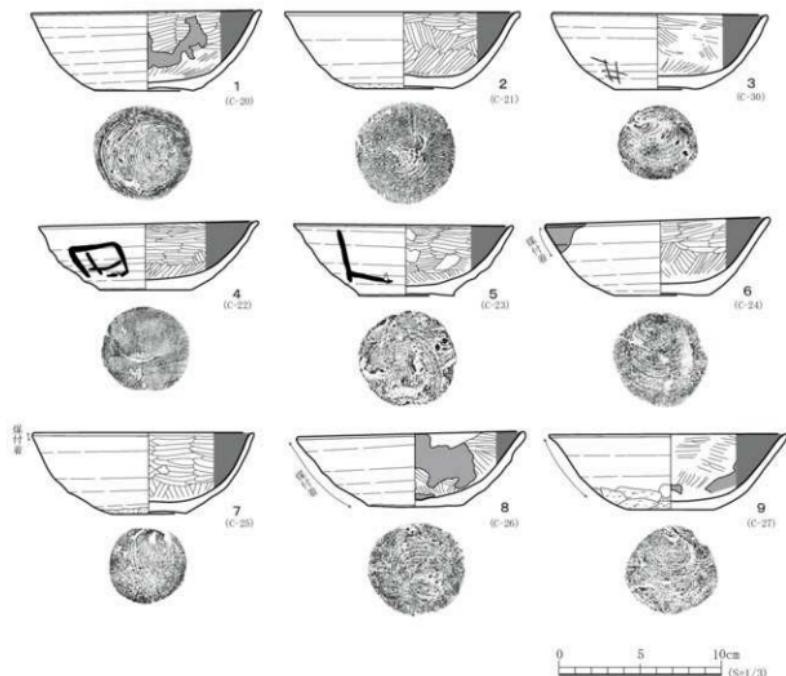
第120図 SK27 土坑

## 【SK28土坑】(第121~125図、第15表)

B区の南側の標高31.5mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。SI9と重複し、これより新しい。平面形は長軸2.9m、短軸1.17mの南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、深さは22cmである。断面形は皿状、底面は平坦である。堆積土は1層で、人為堆積である。遺物は堆積土1層から土器器坏(第122~125図1~24)、須恵器坏(第125図25)が出土した。

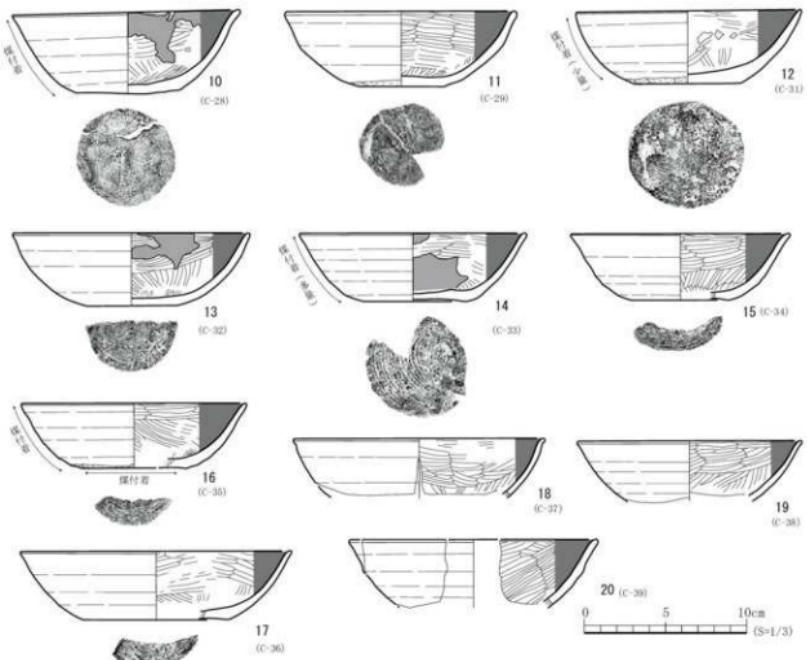


第121図 SK28 土坑(1)



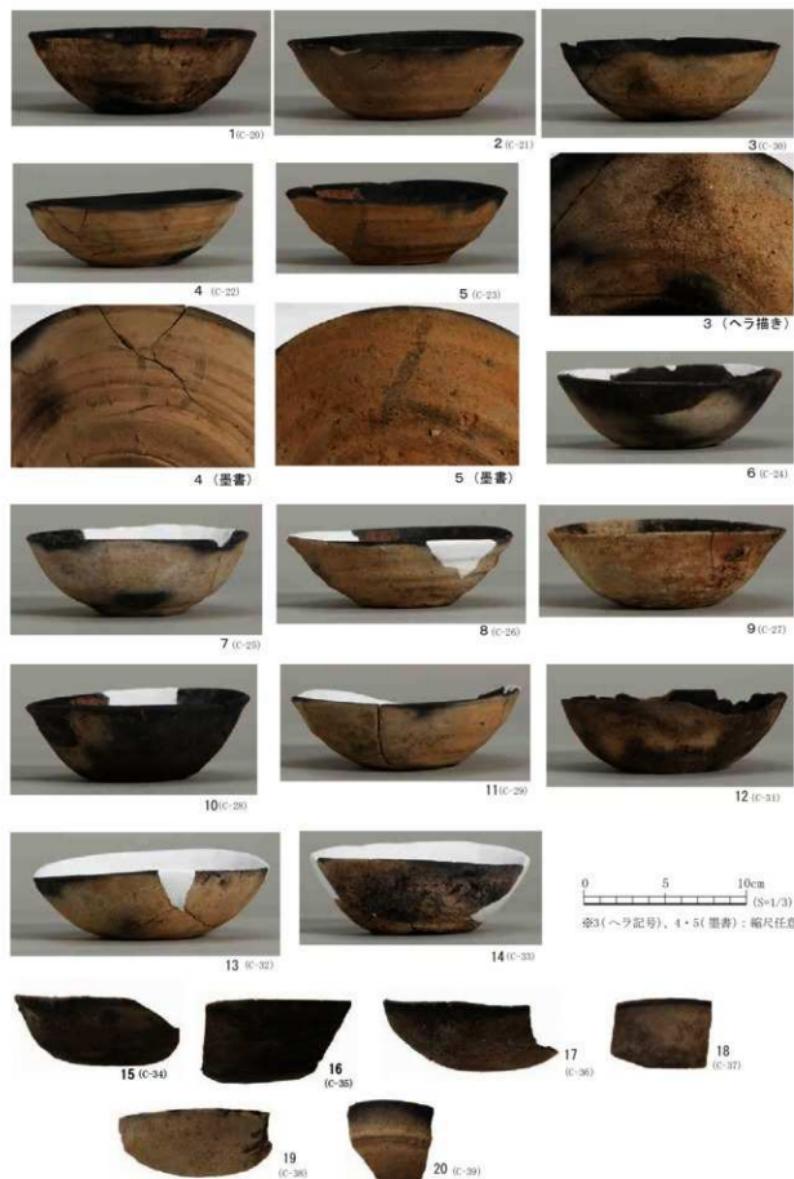
No.	遺構・類	傾倒	断層	残存	特徴【目録(外側・内面)】一色調(外側・内面)→煤付→その他の特徴の順に記載】	参考
1	SK28 1層	上側部	坪	口縁部 ～底部	外側：クロナツ、洞部下平手持ちへク割り、底部削鉗系切り→周縁部子持ちハラ削り、内面：ヘラミガキ、黒色地彌、外側：に似い黄褐色(10YR5/3)。内面：黒色(N2/0)。法量：口径14.4cm、高さ4.9cm、底径6.0cm、厚さ0.3~0.8cm、煤付着、煤付着→灯明直。	C-20
2	SK28 1層	上側部	坪	口縁部 ～底部	外側：クロナツ、洞部下端削鉗系切り無調整、底部削鉗系切り→一回転へク割り再調整、内面：ヘラミガキ、黒色地彌、外側：に似い褐色(7.5YR6/0)。内面：黒色(N2/0)。法量：口径14.3cm、高さ4.7cm、底径6.0cm、厚さ0.3~0.8cm、煤付着、煤付着→灯明直。	C-21
3	SK28 1層	上側部	坪	口縁部 ～底部	外側：クロナツ、底部削鉗系切り無調整、内面：ヘラミガキ、黒色地彌、外側：に似い黄褐色(10YR6/3)。内面：黒色(N2/0)。法量：口径13.2cm、高さ4.7cm、底径5.5cm、厚さ0.3~0.8cm、残存は100%、洞部下平手持ちハラ削き有り	C-30
4	SK28 1層	上側部	坪	口縁部 ～底部	外側：クロナツ、底部削鉗系切り無調整、内面：ヘラミガキ、黒色地彌、外側：に似い褐色(7.5YR6/0)。内面：黒色(N2/0)。法量：口径13.4cm、高さ4.5cm、底径5.6cm、厚さ0.3~0.9cm、残存100%。施主：非常に良好、墨書き「田」	C-22
5	SK28 1層	上側部	坪	口縁部 ～底部	外側：クロナツ、底部削鉗系切り無調整、内面：ヘラミガキ、黒色地彌、外側：に似い褐色(7.5YR5/4)。内面：黒色(N2/0)。法量：口径13.4cm、高さ4.4cm、底径5.8cm、厚さ0.3~1.0cm、外側：煤付着、煤付着→灯明直、残存100%。墨書き「人」	C-23
6	SK28 1層	上側部	坪	口縁部 ～底部	外側：クロナツ、底部削鉗系切り無調整、内面：ヘラミガキ、黒色地彌、外側：に似い黄褐色(10YR6/3)。内面：黒色(N2/0)。法量：口径13.6cm、高さ4.8cm、底径5.8cm、厚さ0.4~0.9cm、残存95%、外側：煤付着→灯明直	C-24
7	SK28 1層	上側部	坪	口縁部 ～底部	外側：クロナツ、洞部下端持ちへク割り、底部削鉗系切り無調整、内面：ヘラミガキ、黒色地彌、外側：に似い黄褐色(10YR6/3)。内面：黒色(N2/0)。法量：口径13.5cm、高さ5.0cm、底径4.6cm、厚さ0.3~0.8cm、残存70%、外側：煤付着/内面：煤付着→灯明直	C-25
8	SK28 1層	上側部	坪	口縁部 ～底部	外側：クロナツ、底部削鉗系切り→手持ちへク割り再調整、内面：ヘラミガキ、黒色地彌、外側：に似い黄褐色(10YR6/3)。内面：黒色(N2/0)。法量：口径13.9cm、高さ4.8cm、底径5.9cm、厚さ0.4~0.8cm、残存80%、外側：煤付着→灯明直	C-26
9	SK28 1層	上側部	坪	口縁部 ～底部	外側：クロナツ、洞部下端手持ちへク割り、底部削鉗系切り無調整、内面：ヘラミガキ、黒色地彌、外側：に似い褐色(10YR7/3)。内面：黒色(N2/0)。法量：口径14.5cm、高さ4.8cm、底径5.3cm、厚さ0.4~0.7cm、外側：煤付着/内面：煤付着→灯明直	C-27

第122図 SK28 土坑(2)

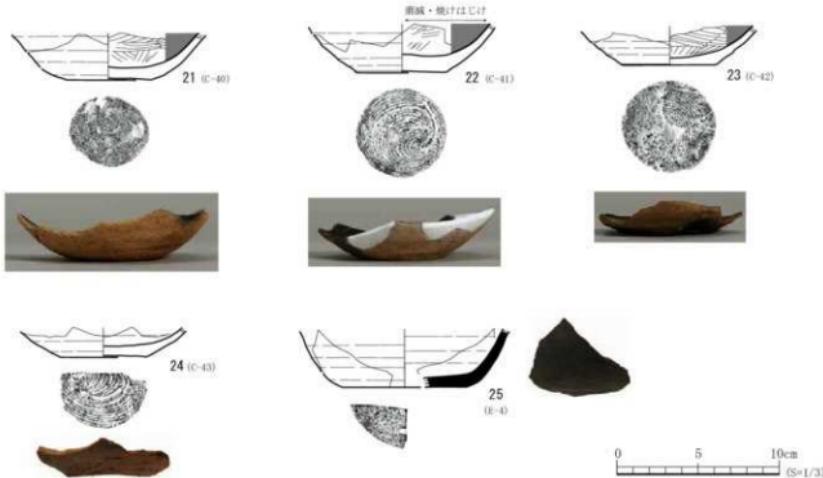


No.	遺構・層	種別	遺構	理・存	特徴【外底（外面・内面）】一括算（外面・内面）一括算→その他の他の特徴の箇に記載】	備考
10	SK28 1層	土解剖	环	口縁部 ～底部	外底：ロコナダ、底部回転切り無調整、内面：ヘラミガキ。黑色処理。色調：外底、灰褐色(10YR5/2)、内面、黒色(52/0)。法量：口径13.8cm、深高5.2cm、底径6.4cm、厚0.4~0.8cm。内外面：煤付着（内面）、煤付着（外側）-灯明斑。	C-28 (C-28)
11	SK28 1層	土解剖	环	口縁部 ～底部	外底：ロコナダ、脚部下端手扱ち～ハラ削り、底部切り離し技術不明→手打ち～ハラ削り再調整、内面：ヘラミガキ。黑色処理。色調：外面、にぶい褐色(7.5YR6/4)、内面、黒色(52/0)。法量：口径13.9cm、深高4.7cm、底径5.2cm、厚0.4~0.7cm、残存90%。灯明斑？	C-29 (C-29)
12	SK28 1層	土解剖	环	口縁部 ～底部	外底：ロコナダ、脚部下端手扱ち～ハラ削り、底部切り離し技術不明→手打ち～ハラ削り再調整、煤少量化付着。内面：ヘラミガキ。黑色処理。表面地だけにけ、磨耗。色調：外底、にぶい黄褐色(10YR6/3)、内面、黒色(52/0)。法量：口径13.7cm、深高4.6cm、底径6.6cm、厚0.4~1.6cm、残存90%。灯明斑？	C-31 (C-31)
13	SK28 1層	土解剖	环	口縁部 ～底部	外底：ロコナダ、底部回転切り無調整、煤多量付着。内面：ヘラミガキ。黑色処理。煤少量化付着。内面：にぶい黄褐色(10YR6/3)。内面、黒色(52/0)。法量：口径14.0cm、深高4.5cm、底径5.4cm、厚0.3~0.6cm、残存50%。灯明斑？	C-32 (C-32)
14	SK28 1層	土解剖	环	口縁部 ～底部	外底：ロコナダ、底部回転切り無調整、煤多量付着。内面：ヘラミガキ。黑色処理。煤少量化付着。内面：にぶい黄褐色(10YR7/4)。内面、黒色(52/0)。法量：口径13.8cm、深高4.0cm、底径5.4cm、厚0.3~0.7cm、残存50%。灯明斑？	C-33 (C-33)
15	SK28 1層	土解剖	环	口縁部 ～底部	外底：ロコナダ、底部回転切り無調整、煤付着。内面：ヘラミガキ。黑色処理。煤付着。内面：外底、灰褐色(10YR5/2)。内面、黒色(52/0)。法量：口径13.6cm、深高4.1cm、底径5.0cm、厚0.4~0.6cm、残存1/3。灯明斑？	C-34 (C-34)
16	SK28 1層	土解剖	环	口縁部 ～底部	外底：ロコナダ、脚部下端～ハラ削り、煤付着、使はげ（外側）、底部切り離し技術不明→手打ち～ハラ削り再調整、内面：ヘラミガキ。黑色処理。内面：にぶい黒色(7.5YR4/2)。内面、黒色(52/0)。法量：口径13.8cm、深高4.0cm、底径6.4cm、厚0.3~0.7cm、灯明斑？	C-35 (C-35)
17	SK28 1層	土解剖	环	口縁部 ～底部	外底：ロコナダ、底部切り離し技術不明→手打ち～ハラ削り再調整。内面：ヘラミガキ。黑色処理。表面地だけにけ、磨耗。内面：黒色(52/0)。法量：口径16.6cm、深高4.2cm、底径9.0cm、厚0.3~0.5cm、灯明斑？	C-36 (C-36)
18	SK28 1層	土解剖	环	口縁部 ～脚部	外底：ロコナダ。内面：ヘラミガキ。黑色処理。色調：外底、にぶい黄褐色(10YR7/3)。内面、黒色(52/0)。法量：口径15.1cm、深高3.7cm、底径5.2cm、厚0.2~0.4cm	C-37 (C-37)
19	SK28 1層	土解剖	环	口縁部 ～脚部	外底：ロコナダ。内面：ヘラミガキ。黑色処理。色調：外底、にぶい黄褐色(10YR7/3)。内面、黒色(52/0)。法量：口径13.8cm、残存高3.7cm、底径5.0cm、厚0.2~0.4cm、灯明斑？	C-38 (C-38)
20	SK28 1層	土解剖	环	口縁部 ～脚部	外底：ロコナダ。内面：ヘラミガキ。黑色処理。色調：外底、にぶい黄褐色(7.5YR6/4)。内面、黒色(52/0)。法量：口径15.2cm、残存高4.2cm、厚0.4~0.6cm	C-39 (C-39)

第123図 SK28 土坑（3）



第124図 SK28 土坑(4)



No.	遺物・層	種別	器種	残存	特徴【佐法(外側・内面)→色調(外側・内面)→法縁→その他の特徴の順に記述】	登録
21	SK28 1層	土製器	环	脚部 ～底部	外面：ロクロナダ、底部切軋系切り無調整、内面：ヘラミガキ、黒色処理、色調：外面、にぶい褐色 (7.BV86/4)、内面、黒色(32/0)、法縁：底径5.2cm、残存高3.4cm、器厚0.5～0.7cm	C-40
22	SK28 1層	土製器	环	脚部 ～底部	外面：ロクロナダ、底部切軋系切り無調整、内面：ヘラミガキ、黒色処理、磨拭、表面焼けはじけ、色調：外 面、にぶい褐色(7.BV87/4)、内面、黒褐色(32/0)、法縁：底径5.6cm、残存高3.0cm、器厚0.4～1.1cm、灯明 跡？	C-41
23	SK28 1層	土製器	环	脚部 ～底部	外面：ロクロナダ、底部切軋系切り無調整、内面：ヘラミガキ、黒色処理、色調：外面、にぶい褐色 (7.BV85/4)、内面、黒色(32/0)、法縁：底径5.8cm、残存高2.4cm、器厚0.3～0.7cm	C-42
24	SK28 1層	土製器	环	底部	外面：ロクロナダ、底部切軋系切り無調整、内面：ロクロナダ、色調：内外面、にぶい褐色(7.BV86/4)、法 縁：底径5.2cm、残存高1.8cm、器厚0.3～0.6cm、赤燒土器	C-43
25	SK28 1層	土製器	环	脚部 ～底部	外面：ロクロナダ、底部切軋系切り技術不明、表面へうがり無調整、内面：ロクロナダ、色調：内外面、黄褐色 (7.BV85/1)、法縁：底径7.6cm、残存高3.5cm、器厚0.1～0.8cm	E-4

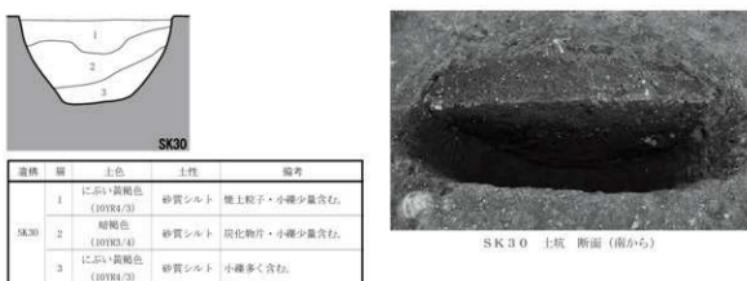
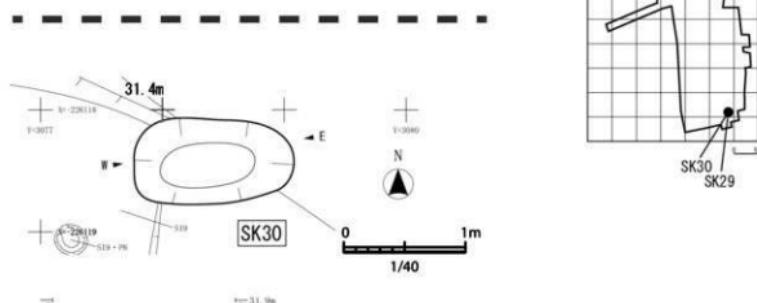
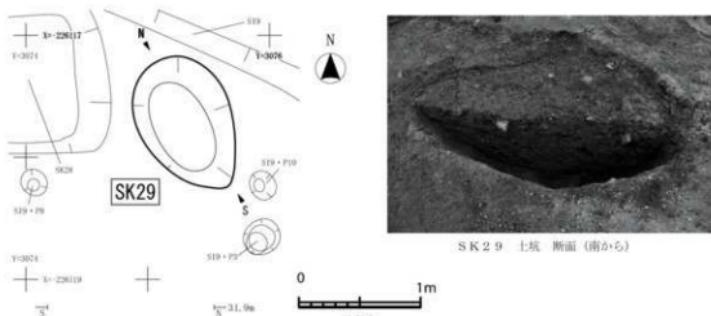
第125図 SK28 土坑（5）

## 【SK29土坑】(第126図、第15表)

B区の南側の標高31.5mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。SI9と重複し、これより新しい。平面形は長軸1.18m、短軸0.77mの南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは48cmである。断面形はU字形、底面は平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも人為堆積である。遺物は堆積土2層から縄文土器片が出土した。

## 【SK30土坑】(第126図、第15表)

B区の南側の標高31.4mの平坦面に位置する。確認面はIVa層である。SI9と重複し、これより新しい。平面形は長軸1.3m、短軸0.66mの東西方向に長軸をもつ長楕円形を呈し、深さは77cmである。断面形はU字形、底面は平坦である。堆積土は3層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。



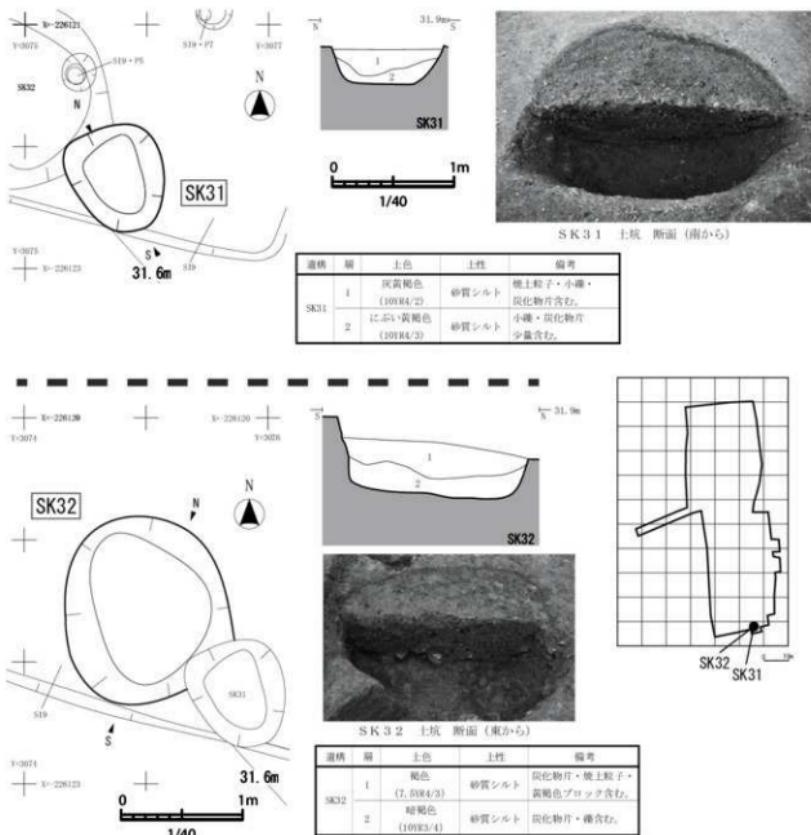
第126図 SK29・30 土坑

## 【SK31土坑】(第127図、第15表)

B区の南側の標高 31.6m の平坦面に位置する。確認面はIVa層である。SI9、SK32と重複し、これらより新しい。平面形は長軸 0.83m、短軸 0.69m の南北方向に長軸をもつ橢円形を呈し、深さは 29cm である。断面形はU字形、底面は平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。

## 【SK32土坑】(第127図、第15表)

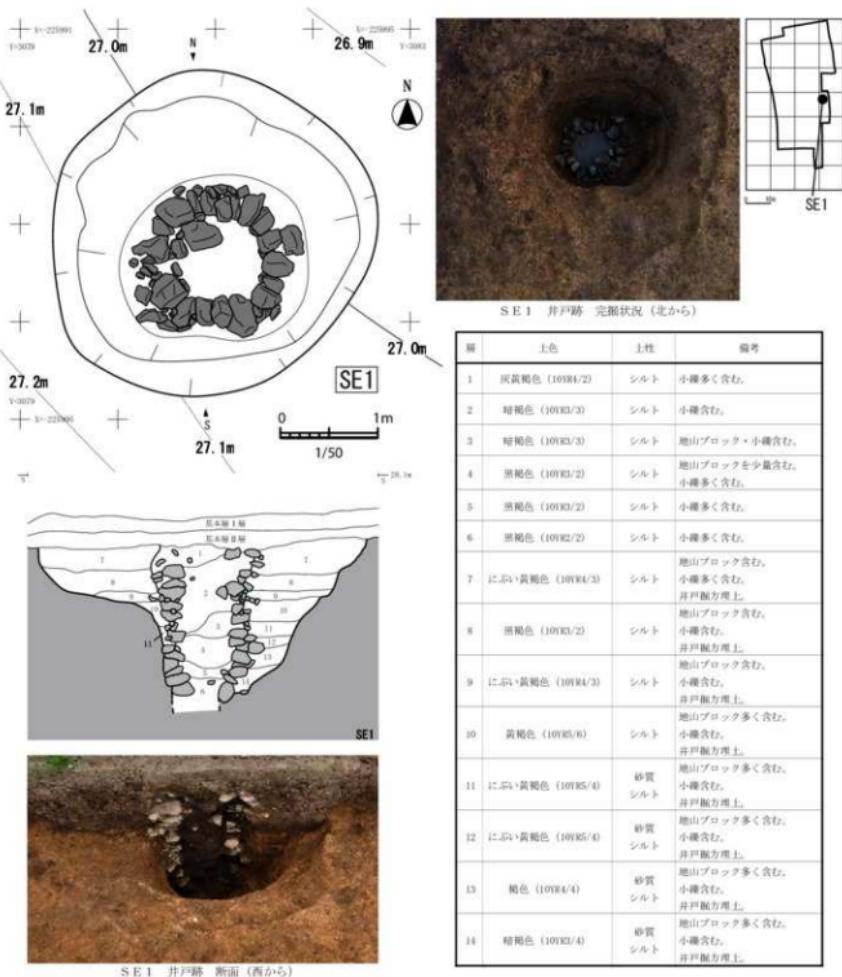
B区の南側の標高 31.6m の平坦面に位置する。確認面はIVa層である。SI9、SK31と重複し、SI9 より新しく、SK31より古い。平面形は長軸 1.5m、短軸 1.36m の円形を呈し、深さは 42cm である。断面形はU字形、底面は平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。



第127図 SK31・32 土坑

## 【SE 1 井戸跡】(第128図、第15表)

A区中央東寄りの標高27mの平坦面に立地する。基本層Ⅲe層から掘り込まれ、確認面はⅣa層である。石組の井戸であり、平面形は長軸3.34m、短軸3.31mの円形を呈し、深さは1.58mである。断面形は漏斗形である。堆積土は14層に分かれ、1~6層は自然堆積、7~14層は人為堆積である。6層掘削時に水が湧き、掘ることを止めたため、底面形は不明である。遺物は出土していない。



第128図 SE 1 井戸跡

## (4) ピット (第9~13図、第16-1~3表)

ピットには、柱痕跡が認められる「柱穴跡」と柱痕跡が認められない「小穴跡」がある。このうち、本項で報告する「柱穴」は、掘立柱建物や柱穴列などを構成する柱穴跡であった可能性も考えられるが、現地調査・整理作業段階において、これらで構成する構造物を認定することができなかつたため、ここではピットとして報告することとした。

ピットは256個検出した（第9~13図）。確認面はIVa層である。それぞれの規模、柱痕跡の有無、堆積土、埋土、重複関係については第16-1~3表にまとめた。これらのピットは、長軸15~80cm、短軸11~61cmの円形・梢円形・隅丸長方形・隅丸方形・不整形を呈し、深さ3~44cmである。これらはA区からB区の北側に多く分布する。遺物はP53・68・128・161・309・340・404・414・459・500・501・503・506・513から出土している。P53・68・506から縄文土器片、P161・309・404・414・459・500・501・503・513から土師器片、P128から土師器片・須恵器片、P340から磁器片が出土した。



石垣遺跡 作業風景



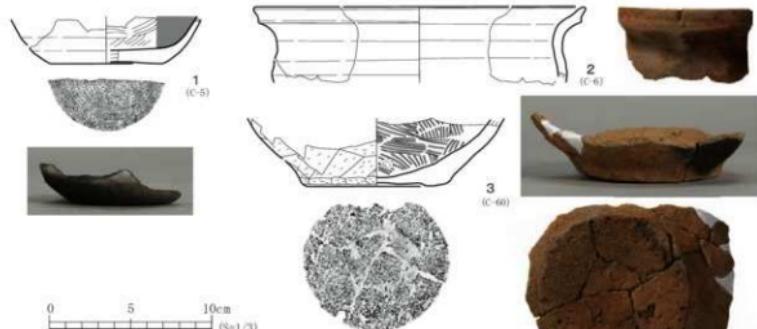




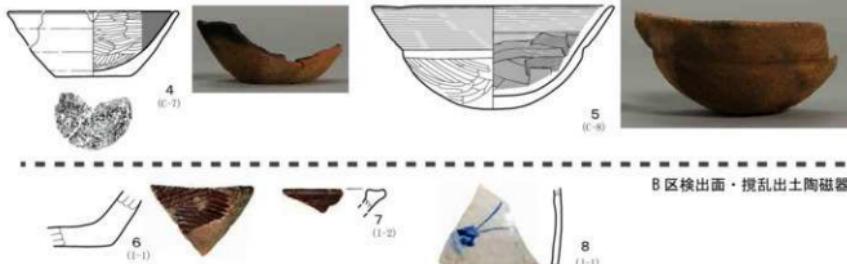
## (5) 遺構検出面、排土等出土遺物 (第129図)

このほか、遺構検出面・排土・搅乱などから縄文土器・土師器・須恵器・陶器・磁器・石器が出土した。このうち図示できたものは、土師器壺(第129図1・4)、甕(第129図2・3)、鉢(第129図5)、陶器擂鉢(第129図6・7)、磁器徳利(第129図8)である。

## B区検出面出土土師器



## 排土出土土師器



## B区検出面・搅乱出土陶磁器

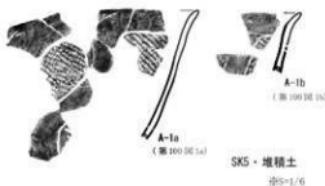
No.	遺構・層	種別	断面	既存	特徴【柱茎(外面・内面)・一色調(外面・内面)・一広葉×その他の特徴の順に記載】	登録
1	相区 検出面	土師器	环	脚部 ～底部	外面：ロクロナギ・底部切欠き無調整、内面：ヘラミガキ・黑色処理、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)、内面・黒色(52/0)、底量：底径0.80cm・残存高2.9cm・厚さ0.4~0.9cm	C-5
2	相区 検出面	土師器	甕	口縁部	外面：ロクロナギ・内面：ロクロナギ、色調：外面・にじみ・褐色(7,5YR3/3)、内面・にじみ・赤褐色(5YR5/4)、 底量：口径2.0cm・残存高4.7cm・器厚0.5~0.6cm	C-6
3	相区 検出面	土師器	甕	底部	外蓋：ヘラリ削り・底部輪台技法、内面：ハケメド・底部削オサム、色調：外面・にじみ・褐色(7,5YR5/4)、内面・にじみ・褐色(7,5YR4/4)、 底量：ロクロナギ・底部切り妻・技法不明・凹削り・内側再調整、内面：ヘラミガキ・黑色処理、色調：外面・にじみ・黄褐色(10YR5/3)、内面・黒色(52/0)、 底量：口径1.5cm・底径0.8cm・残存高1.2cm・厚さ0.4~1.3cm	C-60
4	相区 排土	土師器	环	口縁部 ～底部	外蓋：ロクロナギ・底部切欠き技法不明・凹削り・内側再調整、内面：ヘラミガキ・黑色処理、色調：外面・にじみ・褐色(10YR5/3)、内面・黒色(52/0)、 底量：口径1.5cm・底径0.8cm・残存高1.0cm・厚さ0.4~0.6cm	C-7
5	相区 排土	土師器	鉢	口縁部 ～底部	外蓋：ヘラリ削・頭部ヨコナガ・脚部レム・底部ヘラミガキ、内面：ヘラナゲ→ヨコナギ、色調：外面・にじみ・褐色(7,5YR6/4)、内面・褐色(7,5YR6/6)、 底量：口径14.3cm・底径6.3cm・厚さ0.3~0.8cm	C-8
No.	層	種別	断面	既存	特徴	登録
6	B区検出面	陶器	擂鉢	底部	底量：残存高3.5cm・底厚1.2~1.8cm、おろし目、鉢輪、底地・時期不明	J-1
7	B区検出面	陶器	擂鉢	口縁部	底量：底径0.6~1.0cm、鉢輪、底地：岸型、17世紀中葉	J-2
8	B区搅乱	磁器	徳利	脚部	底量：底径0.3~0.4cm、染付草花文、底地不明、19世紀代	J-1

第129図 その他の出土遺物-検出面・排土-



## (1) 繩文土器 (第130図)

縄文土器は65点出土した。図示できたものは、SK5から出土した深鉢（第100図1a・b）1点のみである。全体として小破片が多く、器形・文様の検討が十分に行えないものが多かった。第100図1a・bは、平口縁で口縁部が外反する深鉢である。胴部を沈線によって区画したのちLR縄文を施したものであり、中期後葉の大木9式に位置付けられる。大木9式土器は、大木9a式、大木9b式に2分される（宮城県教育委員会1988ほか）。土器は、破片資料であるが、体部文様帶にみられるステッキ状あるいは楕円の表現が縦に配置される点から大木9b式に位置付けられると考えられる。



第130図 石垣遺跡出土縄文土器

## (2) 土師器

### 1) 土師器の特徴

826点出土し、このうち63点を図示した。これらは、非ロクロ成形のもの（364点）とロクロ成形のもの（462点）に分けられる。以下、非ロクロ成形とロクロ成形に分けてその特徴について示す。

#### ①非ロクロ成形（第131図）

非ロクロ成形の土師器はSI8・9堅穴住居跡及び検出面・廃土から出土し、このうち21点図示した。出土器種は、鉢、器台、壺、甕である。

鉢（第34図1～4b・第129図5）は、いずれも半球形に近い胴部に、外上方にのびる口縁が付くもので、底部が丸底のもの（第34図2・第129図5）、平底のもの（第34図1）、凹むもの（第34図3・4b）がある。器面調整は、内外面の口縁部にヨコナデ・口縁部～底部に丁寧なヘラミガキを施すもの（第34図1・3・4a・4b）、内外面の口縁部にハケメ→ヨコナデ・外面の胴部にヘラミガキ・内面の胴部～底部にヘラナデを施すもの（第34図2）、外面の口縁部にヨコナデ・胴部～底部にヘラミガキ、内面の口縁部にヨコナデ・胴部～底部にヘラナデを施すもの（第129図5）がある。

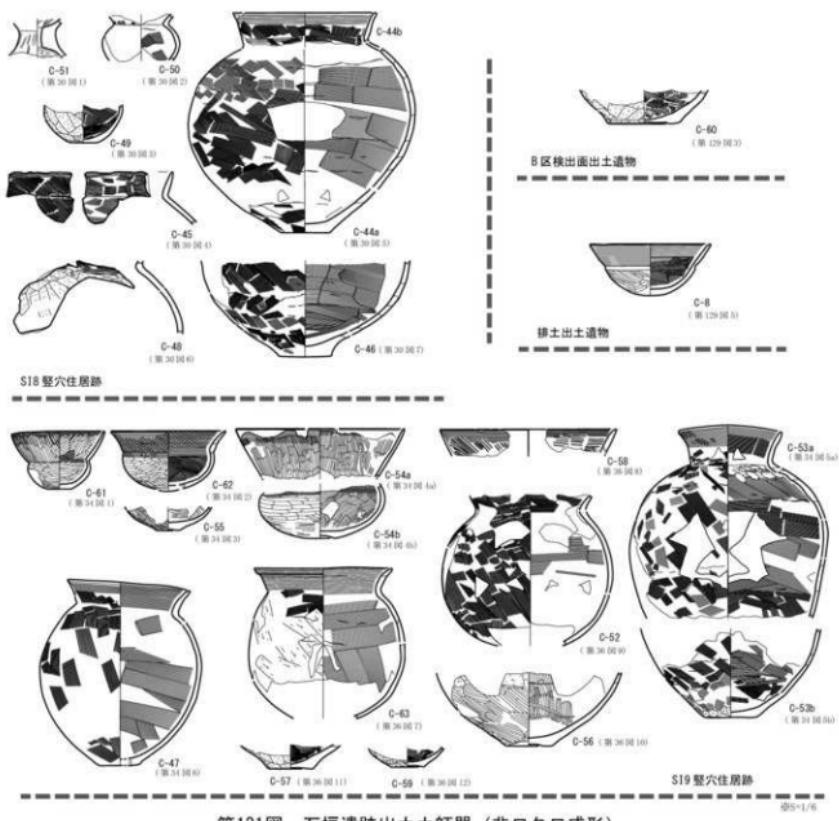
器台（第30図1）は、受部の一部と脚上部のみが残存しており、全体の器形は不明である。受部内面・脚部外面にヘラミガキ、脚部内面に指オサエを施し、貫通孔が認められる。

壺（第34図5a・5b）は、平底で短く外傾する単純口縁の壺で、外面の口縁部～胴部下間にハケメ→口縁部ヨコナデ・胴部ナデ・底部ヘラ削りを施し、内面の口縁部にハケメ→ヨコナデ・胴部上間にヘラナデ→指オサエ・胴部下間にハケメ→ヘラナデを施す。第36図10は、底部資料のため、甕の可能性もあるが、内外面に丁寧なヘラミガキを施していることから、壺の底部である可能性が高いと考えられる。

甕は8点図示した。出土した甕のうち、口縁部が残存しているものは、いずれも口縁部が外傾して立ち上がる単純口縁のもので、底部は平底である。甕の器面調整については、第30図5の甕は、内外面の口縁部にハケメ→ヨコナデ、外面の胴部にハケメ→胴部上間にナデ、内面の胴部にヘラナデを施す。第34図6の甕は、外面の頸部～胴部下間にハケメ、内面の胴部～底部にヘラナデ、内外面の口縁部にヨコナデを施し、底部中央に焼成後の穿孔が認められた。第36図7の甕は、外面の口縁部にヨコナデ・胴部にハケメ→胴部上半～下半にヘラ削り、内面の口縁部にヨコナデ・胴部にヘラナデを施す。第36図9図の甕は、外面の口

縁部にヨコナデ・頭部～胸部下間にハケメ、内面の頭部にハケメ・胸部にヘラナデを施す。この他、甕の口縁～頸部資料では、内外面の口縁部にハケメ→口縁上部にヨコナデを施すもの（第30図4・第36図8）、頸部にハケメ→胸部上間にヘラ削りを施すもの（第30図6）、底部資料では、外面にハケメ→ナデ、内面にヘラナデを施すもの（第30図7）がある。壺また甕の底部資料はいずれも平底で、外面にヘラ削りを施し、内面がヘラナデのもの（第36図11・12）とハケメのもの（第129図3）がある。なお、壺・甕類のうち、輪台充填技法が確認されたものは2点（第36図10・第129図3）ある。

この他、小型の壺また甕と思われる破片資料（第30図2・3）も出土している。



第131図 石垣遺跡出土土師器（非ロクロ成形）

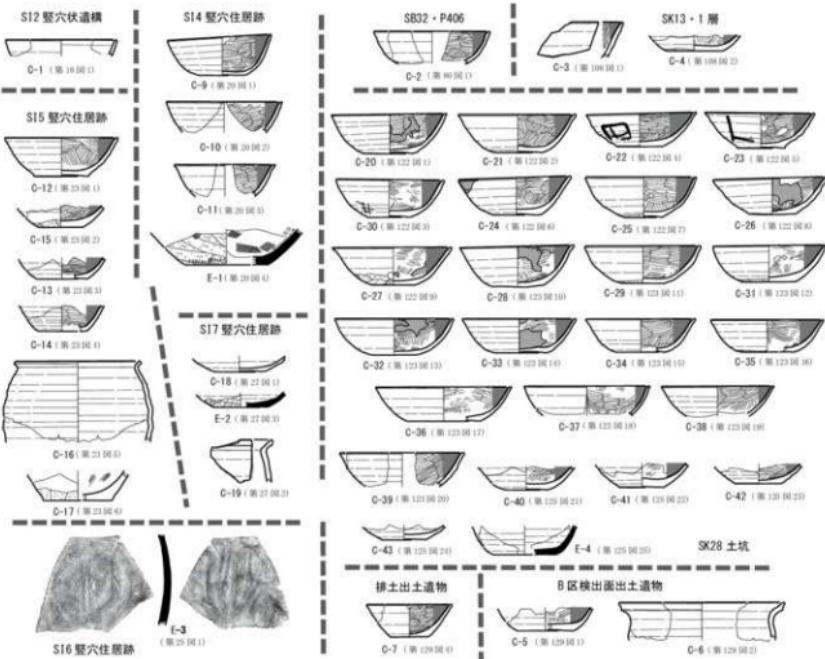
## ②ロクロ成形（第132図）

ロクロ成形の土師器は462点出土した。器種は、壺、高台付壺、甕である。このうち、図示できたものは、SI2 積穴状構造、SI4・5・7 積穴住居跡、SB32 掘立柱建物跡柱穴（P406）、SK13・28 土坑、検出面・排土から出土した42点である。なお、SK28 土坑出土遺物は、遺物の出土状況から一括廃棄された土器群であると

判断される。

壺は38点図示した。内面黒色処理・ミガキ調整を施したもの(36点)と非黒色処理のもの(1点)(註1)に分けられる。壺の器形は、塊形を呈するもので、底部から内窓気味に立ち上がり口縁部に至るものである。口縁端部の形態は、外上方に外傾するものがほとんどだが、端部付近が外反するものも認められた。底部が残存している資料のうち、底部の切り離し技法の内訳は、回転糸切り無調整のものが16点、回転ヘラ切り無調整のものが1点、回転糸切り→手持ちヘラ削り再調整のものが1点、回転糸切り→周縁部のみ手持ちヘラ削り再調整のものが1点、切り離し技法不明→手持ちヘラ削り再調整のものが4点、切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整のものが6点である。外面の調整については、ロクロ成形後、特に調整を行わないものが多いが、胴部下端にヘラ削りを施すものも7点認められた。なお、SK28 土坑から出土した壺には、ヘラ描きの認められるものが1点(第122図3)、墨書の認められるものが2点(第122図4:「田」、第122図5:「人」)認められたほか、内面・外面に煤が付着し、器面が非熱を受け部分的に剥落しているものが17点(第122図1・2・5~9、第123図10~17・19、第125図22)確認され、これらは「灯明皿」として利用されたと考えられる。

甕は4点図示した。口縁部へ胴部資料(第23図5・第27図2・第129図2)は、頸部にくびれを持つもので、このうち、第23図5の甕は、胴部中位に最大径を持つものである。底部資料(第23図6)は、外面の胴部下端にヘラ削り、内面にナデを施すものである。



第132図 石垣遺跡出土土師器(ロクロ成形)・須恵器

※5/16

## 2) 土師器の時期

### ①非ロクロ成形

今回の調査で出土した非ロクロ成形の土師器は、器台、輪台充填技法で製作された壺・甕の存在、土器の器形・製作技術の諸点から古墳時代前期の特徴を有しており、当地域における土師器編年の塩釜式（氏家1957）に位置づけられる。塩釜式については、丹羽茂、次山淳、辻秀人、青山博樹などにより編年案が示されている（丹羽1985、次山1992、辻1995、青山2010）。これらの編年（第18表）を参考にし、当該時期の土師器が多く出土したSI8 竪穴住居跡及び9 竪穴住居跡出土土器の編年的位置付けについて検討する。

丹羽編年 (1985)	I 段階	II A 段階			II B 段階	III 段階
次山編年 (1992)	1 段階	2 段階		3 段階	4 段階	5・6 段階
辻編年 (1994・1995)	II-1 期	II-2 期	III-1 期	III-2 期	III-3 期	III-4 期
青山編年 (2010・2011)	塩釜 1 式 (古相)	塩釜 1 式 (新相)	塩釜 2 式 (古相)	塩釜 2 式 (新相)	塩釜 3 式 (古相)	塩釜 3 式 (新相)

第18表 塩釜式土器 編年対照表(田嶋2012)

### 【SI9 竪穴住居跡出土土器】

SI9 では、鉢・壺・甕が 216 点出土し、このうち 12 点について図示した。

鉢は、いずれも半球形に近い胴部に、外上方にのびる口縁部を呈するもので、「小型丸底鉢」とよばれる器形のものである。口径が 15cm 以下の小型のもののほかに、20cm 以上の大型のものも含まれる。底部は丸底・平底・凹底があり、器面調整は内外面に丁寧なヘラミガキを施すものと内外面の口縁部にハケメが残り、内面にヘラナデを施すものが認められた。この小型丸底鉢は、次山編年 2 段階、辻編年 III-1 期、青山編年 塩釜 2 式（古）段階から出現し、大型の丸底鉢は青山編年 塩釜 2 式（新）段階以降に出現するとされている。また、底部が凹底のものは青山編年 塩釜 2 式（新）段階に通有の特徴として定着することが指摘されている（青山2010）。加えて、器面調整が丁寧なヘラミガキのものとハケメ痕跡を残すものが共存しており、粗雑化の要素が一部みられる。以上の特徴から、これらの鉢類は次山編年の 2～3 段階・辻編年の III-1～2 段階・青山編年の 塩釜 2 式（古）～2 式（新）に相当すると考えられる。

甕は、いずれも口縁部が外傾して立ち上がる単純口縁のもので、口唇端部を丸くおさめ、胴部中位に最大径があるものである。外面の調整は、口縁部～頸部については、頸部までヨコナデが及ぶものと口縁部中位までヨコナデを施すものがあり、胴部については、ハケメを残すもの、ハケメ→胴部中位までヘラ削りを施すものがある。口唇端部を丸くおさめるものは次山編年 2 段階以降、口縁部～頸部までヨコナデが及ぶものは次山編年 3 段階以降に位置付けられている。外面胴部の調整では、胴部中位までヘラ削りを施すものが含まれるが、ハケメを残すものが主体である。以上の特徴から、これら甕は、次山編年の 2～4 段階・辻編年の III-1～3 段階・青山編年の 塩釜 2（古）～塩釜 3（古）式に幅におさまるものとして捉えておきたい。

### 【SI8 竪穴住居跡出土土器】

SI8 では、鉢・器台・壺・甕が 27 点出土し、このうち 7 点について図示した。SI9 と比較すると土師器の出土点数は少ない。

器台は、貫通孔がある脚部資料で、全体の器形は不明であり、その位置づけは難しい。器面調整の面では、内外面ともにヘラミガキを施し、貫通孔径は比較的小さいものである。これらの特徴から丹羽編年のII段階以降のものであると想定しておきたい。

甕については、口縁形態・外面調整の面で、SI9 出土土器と共通した特徴を有しており、これに近い時期のものであると考えられる。

#### 【検出面・排土出土土器】

この他、検出面・排土からも非ロクロ成形の土師器が出土しているが、これらの特徴が SI8・9 と類似していること、SI9 の周辺で出土したことから、本来は SI9 に帰属するものであると考えられ、SI9 出土土器と同様の年代幅におさまるものと考えられる。

#### 【まとめ】

以上の検討から、SI8・9 穫穴住居跡、検出面・排土から出土した非ロクロ成形の土師器は、古墳時代前期の塙釜式の範疇におさまるもので、鉢・甕の器面調整や形態の特徴から、丹羽編年のII段階、次山編年の2~4段階、辻編年のIII-1~III-3期、青山編年の塙釜2(古)~塙釜3(古)式の枠内で捉えることができると考えられ、塙釜式の中でもおおよそ中頃から後半にかけてのものと推定される。

なお、亘理郡内において、発掘調査により古墳時代前期の土器が出土した遺跡は、北から亘理町の堤の内遺跡(鈴木 2002)・館南廻遺跡(古川ほか 1991)・堀の内遺跡(亘理町教育委員会 1997)・宮前遺跡(丹羽 1983)、山元町の北経塚遺跡(山田ほか 2010・2013)などが挙げられるが、当該時期の土器が多く出土しているのは宮前遺跡のみであり、亘理郡における古墳時代前期の土器変遷については不明な点が多い。今回石垣遺跡で出土した土器群についても、出土量は決して多いとはいはず、土器組成の面でも欠落している器種があることから、その詳細な位置付けについては、今後、周辺地域の調査事例の増加を待って、検討することとしたい。

## ②ロクロ成形

今回の調査で出土したロクロ成形の土師器は、形態的特徴や製作技法から表杉ノ入式(氏家 1957)の範疇に含まれる。表杉ノ入式は平安時代全般に対応するものと考えられており、多賀城周辺の出土している土師器坏類の様相からいくつかの段階に細分されている(白鳥 1980・1982、加藤 1982、柳澤 1994、村田 1994・1995)。これらの編年を参考にし、土師器坏類が比較的多く出土した SK28 土坑出土土器を中心にその年代について検討を行う。

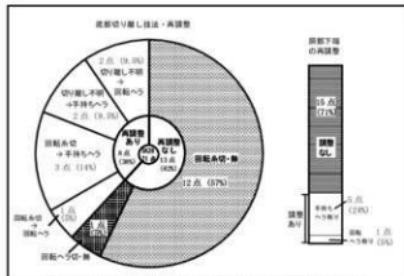
#### 【SK28 土坑出土土器】

SK28 土坑からは、土師器坏・高台付坏・甕が出土した。出土状況から一括廃棄された土器群であると考えられ、このうち、坏類は、図示しなかったものも含めると、250 点中、内黒処理のものが 195 点、非内黒処理のものが 55 点である。器形は、底部から内窵して立ち上がる壘形のもので、口縁端部が外傾して立ち上がるものが主体だが、端部が外反して立ち上がるものもわずかに含まれる。外面調整は、胴部下端にヘラ削りの再調整を施すものが 21 点中 6 点に認められた。底部切り離し技法は、回転糸切りのものが主体で、切り離し後再調整を施すものが 21 点中 8 点あり、再調整は回転ヘラ削り・手持ちヘラ削り両者が認められた。法量は、口径 13.2~16.6cm、底径 4.6~9.0cm、器高 4.0~5.2cm で、口径 13~14cm 台・底径 5~6cm 台のものが主体である。底径/口径比は 0.34~0.59 と幅があるが、0.42~0.48 のものが多い。器高/口径比は 0.25~0.38 で、0.35 前後のものが主体である(第 133 図)。

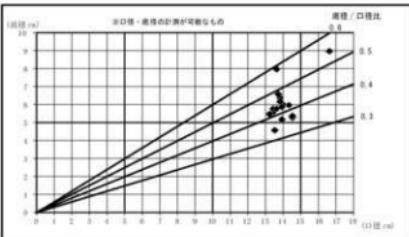
以上、SK28 土坑出土の坏類の主な特徴をまとめると、次のとおりである。①内黒処理を施したもの主体（全体の約 8 割）で、須恵器の割合は少ない、②器形が塊形、③底部切り離し技法は回転糸切りが主体、④切り離し後再調整を施すものは全体の 4 割程度（手持ちヘラ削りが主体）、⑤胴部下端にヘラ削りの再調整を施すものが約 3 割、⑥底径／口径比は 0.45 前後が主体。器高／口径比は 0.35 前後が主体である。

豆理郡内において、SK28 土坑出土土器群と類似する土器は、豆理町宮前遺跡第 54 号住居跡（丹羽 1981）・三十三間官衙遺跡 SX114 土器埋設遺構（鈴木ほか 2006）、山元町涌沢遺跡 SX118 土器廃棄土坑（宮城県教育委員会 2012）などで出土しているが、その出土量・事例は少なく、未報告のものも含まれるため、周辺地域での位置付けは難しい（註 2）。

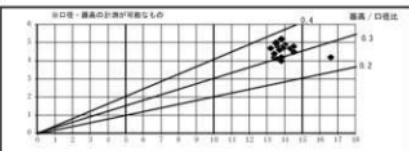
そこで、当該時期の土器変遷について検討が進められている多賀城周辺出土の土器群と比較すると、SK28 土坑出土土器と法量の面で類似するものには、多賀城跡第 61 次調査第 10 層出土土器群（柳沢 1992）、山王遺跡第 9 次調査 SX543 出土土器群（石川ほか 1991）が挙げられ、前者は 9 世紀後半、後者は 10 世紀前葉に位置付けられている（村田・柳沢）。これらの事例について、製作技法・土器組成の面でみてみると、前者は、底部切り離し後再調整が施されるものが約 1/2 で手持ちヘラ削りが主体、内黒処理のものが全体の 8 割以上を占め、胴部下端のヘラ削り再調整を施すものが約 1/2 であるのに対し、後者は、底部切り離し後の再調整・胴部下端の再調整が施されるものは全体の 1 割以下で、内黒処理のものが全体の約 3 割であり、両者の間に製作技法・土器組成の違いがみられる。この両者の特徴と、SK28 土坑出土の坏類の特徴を比較すると、法量の面では両者に類似しているが、製作技法・土器組成の面では、多賀城第 61 次調査第 10 層出土土器群に近い特徴を有している。したがって、SK28 土坑出土土器の年代は、9 世紀後半を中心とするものと考えられる。



石垣遺跡 SK28 出土土師器坏底部・胴部下端の調整

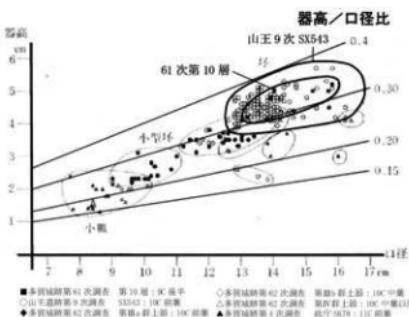


石垣遺跡 SK28 出土土師器坏 底径 / 口径比



石垣遺跡 SK28 出土土師器坏 高径 / 口径比

第 133 図 石垣遺跡 SK28 出土土師器坏の特徴



【※出典（柳澤 1993）一部加筆】  
第 134 図 多賀城跡周辺の土師器坏類の高径 / 口径比

### 【SI2 堅穴状遺構、SI4・5・7 堅穴住居跡、その他の遺構出土土器】

SI2・4・5・7 から出土した坏類は、口縁部～底部まで残存している資料は少ないが、口径 12～14cm 台、底部 5～6cm、器高 4～5cm 台のもので、底径／口径比は 0.47～0.48、器高／口径比は 0.35～0.40 である。器形は、底部から内窪して立ち上がる塊形のもので、底部切り離し技法は、回転糸切り無調整のものと、切り離し後再調整を施すもの（切り離しは不明）が同等数認められた。これらの特徴と SK28 土坑出土土器を比較した場合、器形・製作技法・法量の面で類似点が多く、また、遺跡内の遺構の分布を考慮した場合、同時存在が可能であることから、堅穴住居・堅穴状遺構出土土器は、SK28 土坑と同様の年代幅（9世紀後半頃）におさまるものと想定される。また、SB32 挖立柱建物跡柱穴（P406）、SK13 土坑、検出面・排水から出土した土師器についても、SK28・堅穴住居跡と同様の年代と考えられる。

#### （3）須恵器（第 132 図）

19 点出土し、このうち 4 点図示した。出土した器種は、坏・甕である。今回の調査で出土した土師器が 826 点（うちロクロ土師器は 462 点）であるのに対し、須恵器の出土数は非常に少ない。出土した須恵器は遺構に伴うものであるが、出土点数が少ないとから、ここでは、それぞれの個別の特徴と共に伴している土師器の年代からおよその時期について検討する。

今回図示できたものは、SI4 堅穴住居跡出土の甕または鉢（第 20 図 4）、SI6 堅穴状遺構出土の甕（第 25 図 1）、SI7 堅穴住居跡出土の坏（第 27 図 3）、SK28 土坑出土の坏（第 125 図 25）である。

SI4 出土の甕または鉢（第 20 図 4）は底部資料で、外面に平行タタキ→ヘラ削り、内面にナデを施す。内面の胴部下半に磨減している箇所が認められることから、鉢の可能性も考えられる。共伴している土師器坏の年代から、9世紀後半頃のものと思われる。

SI6 出土の甕（第 25 図 1）は胴部資料で、外面に平行タタキ→ナデ、内面にナデを施す。同住居でロクロ成形の土師器片が出土していることから、平安時代のものと思われる。

SI7 出土の坏（第 27 図 3）は底径 6.6cm の回転糸切り無調整の底部資料で、外面の胴部下端にヘラ削りを施す。器形と底部切り離し技法の特徴、共伴している土師器坏の年代から 9世紀後半頃のものと思われる。

SK28 出土の坏（第 125 図 25）は底径 7.6cm の底部資料で、底部切り離し後、回転ヘラ削り再調整を行うものである。破片資料のため、全体の器形は不明であるが、底部からの立ち上がりから、比較的の深身の坏であると考えられる。共伴している土師器の年代から、9世紀後半頃のものと思われる。

#### （4）陶器・磁器

陶器は 2 点、磁器は 2 点出土した。このうち、図示できたものは、B 区検出面出土の陶器・播鉢 2 点（第 129 図 6・7）、B 区攪乱出土の磁器・徳利 1 点（第 129 図 8）である。

播鉢には口縁部資料（第 129 図 7）と底部資料（第 129 図 6）があり、いずれも内外面に鉄軸がかかる。口縁部資料は、口唇部の形態的特徴から生産地は岸窯のものと推定され、その年代は 17 世紀中葉頃とみられる。底部資料は、内面におろし目があるが、その生産地・時期は不明である。

徳利は胴部資料で、19 世紀代のものとみられ、その生産地は不明である（註 3）。

#### （5）石器

石器は、玉髓製の剥片が出土した。

## 2. 検出した遺構の特徴と時期

今回の調査では、堅穴住居跡 5 軒、堅穴状遺構 4 軒、掘立柱建物跡 37 棟、柱穴列跡 4 条、土坑 32 基、井戸跡 1 基、ビット 256 個を検出した。ここでは、これら遺構の堆積土の特徴・出土遺物・遺構の重複関係等からその時期について検討する。

### (1) 出土遺物・遺構の重複関係等からみた各遺構の時期

今回、調査で検出した遺構の堆積土のうち、自然堆積のものは、黒褐色・暗褐色シルトを主体とするものである。検出した遺構は、出土遺物や遺構の規模、重複関係から、大きく縄文時代・古墳時代・平安時代・近世に分けられるが、その堆積土に大きな差異は認められなかった。そこで、今回の調査で検出した遺構について、出土遺物や重複関係等から各遺構の時期を検討する。

#### 1) 堅穴住居跡・堅穴状遺構

堅穴住居跡 5 軒 (SI4・5・7~9)、堅穴状遺構 4 軒 (SI1~3・6) が確認された (註 4)。これらは、いずれも平面形が 2.5~6.9m の隅丸方形を呈し、床面に柱穴が配置される。

堅穴住居跡は、カマドが付設されるもの (SI4・5・7) と炉が付設されるもの (SI8・9) がある。SI4 堅穴住居跡は、堆積土・床面施設 (P1・2・5・SK1) から 9 世紀後半代の土師器壺、須恵器甕または鉢が出土している。SI5 堅穴住居跡は、床面・カマド燃焼部・カマド構築土・カマド煙出しビットから 9 世紀後半代の土師器壺、須恵器片が出土している。SI7 堅穴住居跡は、堆積土、床面施設 (P1)、カマド燃焼部、カマド煙道から 9 世紀後半代の土師器壺・甕、須恵器壺が出土している。SI8 堅穴住居跡は、住居堆積土・床面・床面施設 (SK1) から古墳時代前期頃の土師器器台・鉢ないしは壺・甕等が出土している。SI9 堅穴住居跡は、堆積土・床面・床面施設 (P5・SK1・2) から古墳時代前期頃の土師器鉢・壺・甕等が出土している。

堅穴状遺構は、SI2 堅穴状遺構の堆積土から縄文土器片、9 世紀後半代の土師器壺破片が出土し、SI6 堅穴状遺構の堆積土から 9 世紀後半代の土師器片・須恵器甕が出土した。SI1、3 堅穴状遺構は、堆積土から遺物が出土していないものの、SI2 と平面形や規模、堆積土が類似することから SI2 と同様の 9 世紀後半代であると想定される。

以上のことから堅穴住居跡・堅穴状遺構は、出土遺物から古墳時代前期に属する SI8・9 と、9 世紀後半代に属する SI1~7 に分けられる。

#### 2) SB1~37 掘立柱建物跡・柱穴列跡

掘立柱建物跡 37 軒、柱穴列跡 4 条を検出した。遺物は SB10・14・20・23・26・28~37 と SA4 から確認されており、縄文土器片、土師器片、須恵器片が出土している。これらは、柱の掘方埋土や柱の切取穴・抜取穴の埋め戻し土に混入したと考えられ、数量が少なく、小破片が多いため、建物の詳細な年代を特定することは難しいが、少なくとも平安時代以降のものといえる。遺構の重複関係から年代の推定が可能な建物としては、SB9~13・16・18~21・23・25~29・31~33 がある。これらはいずれも堅穴住居跡・堅穴状遺構よりも新しいため、少なくとも平安時代以降のものと考えられる。

今回の石垣遺跡の調査では、掘立柱建物跡や柱穴列跡から中世や近世と考えられる遺物が出土していないものの、P340・遺構検出面・搅乱から近世の陶磁器が出土している。また隣接する的場遺跡では、石垣遺跡の柱穴と類似する規模や堆積土の近世の掘立柱建物跡が確認されている。

以上のことから、石垣遺跡の掘立柱建物跡や柱穴列跡は、周辺に平安時代の堅穴住居跡・堅穴状遺構があることから、古いものは平安時代までさかのぼる可能性があるものの、柱穴の規模や堆積土から近隣遺跡での調査事例を踏まえ、近世を主体とした遺構であると考えたい。

### 3) 土坑

土坑は 32 基確認され、縄文土器片・土師器片・須恵器片が出土している。このうち、出土遺物から時代がある程度推定できる土坑としては SK5・28 が挙げられる。SK5 土坑は、底面にピットが掘り込まれており、「陥し穴」と推定される。SK5 は、堆積土中から縄文時代中期後葉の深鉢破片が出土した。SK28 土坑は、隅丸長方形を呈し、土師器・須恵器片が多く出土しており、総数 278 点のうち 25 点を図示した。SK28 は人為堆積であり、遺物が土坑内に一括して廃棄されたのち、埋められたものと想定される。出土した土器は、9 世紀後半代のものと思われる。遺物が少量出土している土坑に SK3・13・19・25・27・29 がある。SK3・29 は、縄文土器片が出土しているが、器形や文様から詳細な時期を判別することが難しいため、少なくとも縄文時代以降のものと考えられる。SK13・19・25・27 土坑はロクロ土師器片が出土しており、平安時代以降のものとみられる。

この他、遺構の重複関係から年代の推定が可能な土坑としては、SK6・7・9・11・14・24・29~32 がある。古墳時代前期の堅穴住居跡である SI9 と重複するものとしては、SK29~32 土坑がある。SK29・32 は、SI9 よりも古いことから古墳時代前期以前のものと想定される。さらに SK29 は、先に述べた縄文土器片が出土したことを考慮すれば、縄文時代以降、古墳時代前期以前のものと想定される。SK30・31 は、SI9 よりも新しいことから古墳時代前期以降のものと想定される。平安時代の堅穴住居跡と重複するものには、SK7・24 がある。SK7 土坑は、SI1 と重複し、これよりも新しいことから平安時代以降のものと想定される。SK24 土坑は SI6 と重複し、これより古いことから平安時代以前のものと考えられる。近世の掘立柱建物跡・柱穴列跡の柱穴と重複するものとして、SK6・9・14 がある。SK6 土坑は SB9・11 の柱穴と重複し、これらよりも新しいことから、近世以降のものと考えられる。SK9 は SA3 と重複し、これよりも古いことから、近世以前のものと想定される。SK14 は SB29~32 と重複し、これらよりも古いことから、近世以前のものと想定される。

SK1・2・4・8・10・12・15・16~18・20~23・26 土坑については、出土遺物がなく、所属時期は不明である。SK15 は、底面にピットが掘り込まれており、「陥し穴」と推定される。隣接する的場遺跡で形状や堆積土が類似する土坑がみられることから、縄文時代のものと考えられる。

### 4) 井戸跡

井戸跡は 1 基確認された。SE1 は、遺物が確認されず、また他の遺構との重複関係もないため、所属時期は不明である。調査区内にある遺構とその位置関係から考えると、井戸跡は、堅穴住居跡や堅穴状遺構に伴うよりも、掘立柱建物跡に関連するものと想定され、近世に属すると考えられる。

### 5) ピット

ピットは、256 個が確認されており、掘方の形状や規模、堆積土が掘立柱建物跡の柱穴と類似する。また分布範囲も掘立柱建物跡と共通する部分が多いことから、掘立柱建物跡の柱穴と同様の年代である可能性が推定される。

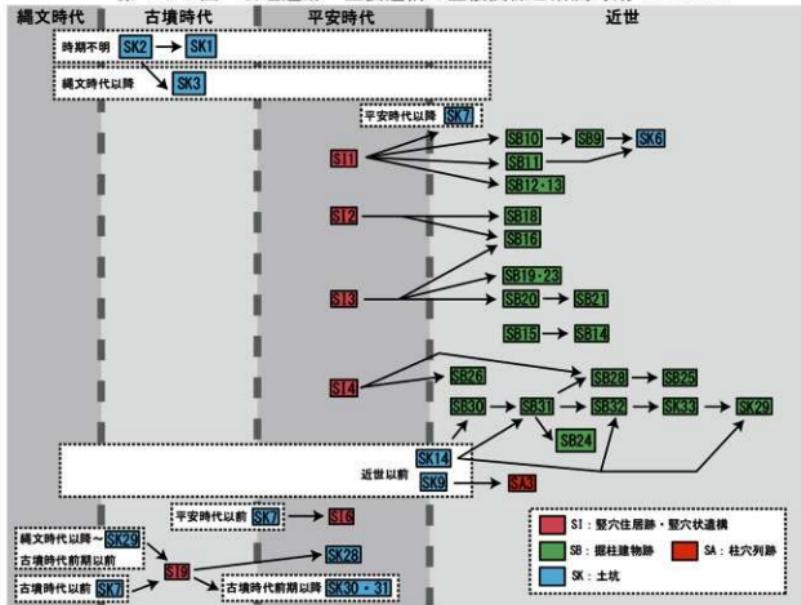
## (2) まとめ

以上の検討より、検出した遺構のおおよその時期は次のとおりである。

第19表 石垣遺跡 主要遺構の所属時期 ※( )表記は、推定の時代を示す。

時期	遺構名
縄文時代	SK5・15 土坑
縄文時代以降	SK3 土坑
縄文時代以降～平安時代	SK29 土坑
古墳時代前期以前	SK32 土坑
古墳時代前期	SI8・9 竪穴住居跡
古墳時代前期 以降	SK30・31 土坑
平安時代以前	SK24 土坑
平安時代	SI4・5・7 竪穴住居跡、 SI(1)・2・(3)・6 竪穴状遺構／SK28 土坑
平安時代以降	SK(7・19・25・27) 土坑
近世以前	SK(9・14) 土坑
近世	SB(1～37) 挖立柱建物跡／SA(1～4) 柱穴列跡、 SK(6・11) 土坑／SE(1) 井戸跡
時期不明	SK1・2・4・8・10・12・16～18・20～23・26 土坑

第135図 石垣遺跡 主要遺構の重複関係と所属時期 (※Pitを除く)



### 3. 各時代の遺構の特徴と変遷

石垣遺跡は、阿武隈山地から東に延びる丘陵上の標高 26~32m の低位段丘上段の平坦面に位置し、山寺川と涌沢川の合流地点の北側に立地する。なお、隣接する遺跡には、涌沢川を挟んで南側に的是場遺跡、山寺川を挟んで北側に涌沢遺跡がある。今回の調査区である A・B 区は、南北 200m、東西 60m と細長く、縄文・古墳時代・平安時代～近世の遺構が確認された。ここでは、各遺構の特徴とその変遷等について検討したい。それぞれの遺構の詳細については、本報告第III章 3 を参照されたい。

#### (1) 縄文時代の遺構（第 136 図）

A・B 区において確認した縄文時代の遺構は、土坑 2 基 (SK5・15) である。これらは、遺構底面に直径約 30cm の小穴があり、その形状から「陥し穴」と推定される。このうち、遺物が出土したのは、SK5 であり、その特徴から縄文時代中期後葉のものとみられる。SK5 は、A 区北側の標高 27.6m に位置し、平面形が不整形の長軸 2.72m、短軸 1.46m、深さは 79cm である。SK15 は、B 区北側の標高 29.2m に位置し、平面形が隅丸長方形の長軸 2.1m、短軸 0.94m、深さは 87cm である。SK15 については、遺物や重複関係から時代を判別することができないものの、遺構の形状や堆積土が隣接する的場遺跡で確認された陥し穴と類似することから、縄文時代のものと想定される。なお、今回の調査区では陥し穴と推定される土坑以外に縄文時代と特定できる遺構は検出されなかった。

#### (2) 古墳時代の遺構（第 136 図）

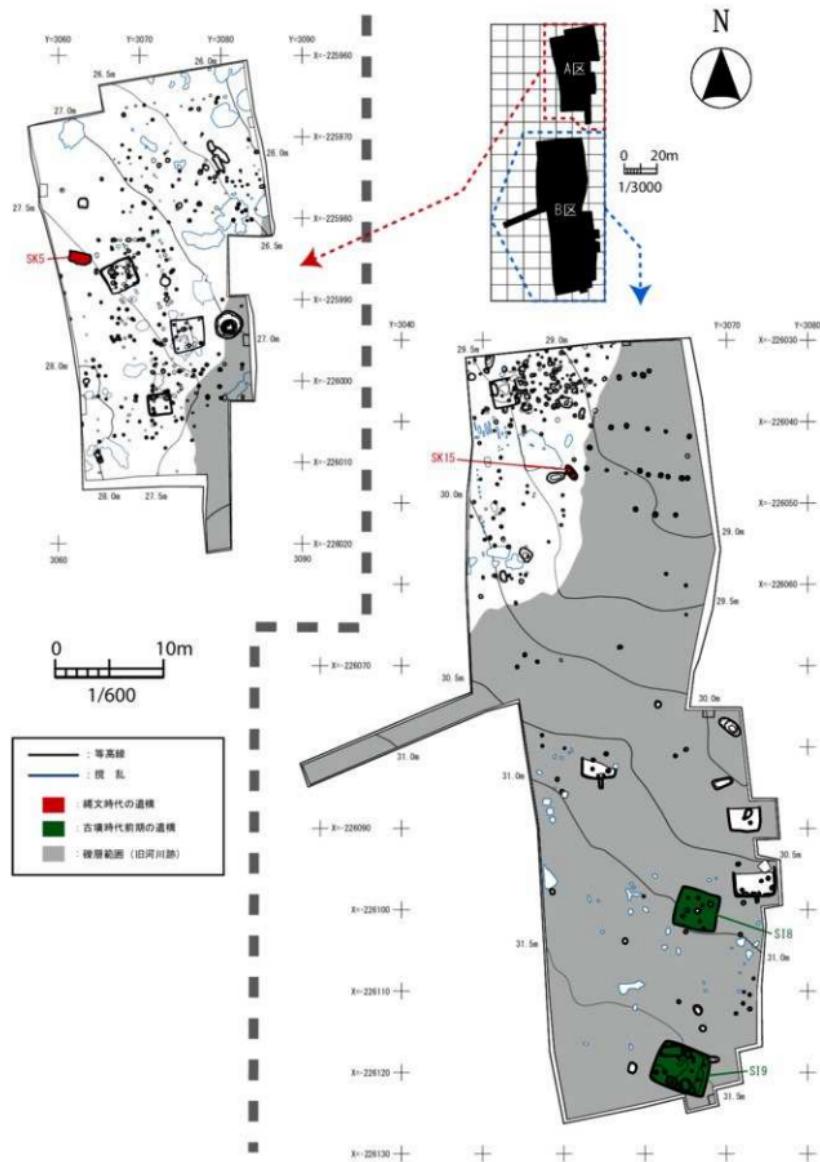
堅穴住居跡は、涌沢川の北側、B 区南端で 2 軒 (SI8・9) を検出した。SI8 堅穴住居跡は、平面形が 4.8m × 5.2m の隅丸方形を呈し、住居中央やや西寄りから炉が確認された。地山を床としており、床面からは柱穴跡 5 個、ピット 1 個、土坑 2 基を検出した。SI9 堅穴住居跡は、平面形が 5.5m × 6.9m の隅丸長方形を呈し、住居中央から炉が確認された。掘方埋土と地山を床としており、床面からは、柱穴 7 個、ピット 3 個、土坑 2 基を検出した。住居跡は、床面の掘方埋土に重複関係が認められ、東方向に拡張をしていることが確認された。SI8・9 は、古墳時代前期の遺物が出土しており、それぞれの住居から出土した遺物がほぼ同じ年代幅をもつものであった。このことから、SI8・9 は、同時期と考えられる遺物が出土し、堅穴の規模や床面に周溝を持たないという点で類似性がみられること、遺構の立地関係を総合的に考えると、これらは同時期に存在した可能性が高いと想定される（註 5）。

#### (3) 平安時代の遺構（第 137 図）

A・B 区において確認した平安時代の遺構は、堅穴住居跡 3 軒 (SI4・5・7)、堅穴状遺構 4 軒 (SI1 ~ 3, 6)、土坑 1 基 (SK28) である。遺物は、SI2・4~7、SK28 から出土しており、その特徴から 9 世紀後半のものと考えられる。この他の遺構 (SI1・3) については、SI2 と類似した平面形や規模、堆積土が確認されることから SI2 と同様の年代であると想定した。

#### 【堅穴住居跡・堅穴状遺構】

SI4 堅穴住居跡は、B 区北側に位置し、平面形が 3.4m × 3.2m の隅丸方形を呈する。地山と掘方埋土を床とし、住居東壁にカマドを付設する。床面からは、柱穴 3 個、ピット 2 個、カマド南側と住居北東隅に土坑 2 基が確認された。SI5 堅穴住居跡は、B 区中央に位置し、平面形が 2.5m 以上 × 4.1m の隅丸方形を呈する。地山を床とし、住居南壁にカマドを付設する。床面からは、柱穴 4 個が確認された。SI7 堅穴住居跡は、B 区南側に位置し、平面形が 3.5m 以上 × 5.11m の隅丸方形を呈する。地山を床とし、



第136図 石垣遺跡 縄文時代・古墳時代の遺構

住居南壁にカマドを付設する。床面には、柱穴 3 個、ピット 1 個、カマドの西側に土坑が 1 基確認され、周溝はカマド付設部を除く壁際を巡る。

SI1 壁穴状遺構は、A 区中央に位置し、平面形が 2.9m × 3.2m の隅丸方形を呈する。地山・掘方埋土を床とし、床面からは、柱穴が 4 個確認され、周溝は壁穴の南東隅と北辺、東辺、西辺で確認された。SI2 壁穴状遺構は、A 区中央に位置し、平面形が 3.8m × 3.9m の隅丸方形を呈する。地山・掘方埋土を床とし、床面からは、柱穴 4 個が検出された。SI3 壁穴状遺構は、A 区南側に位置し、平面形が 2.5m × 2.8m の隅丸方形を呈する。掘方埋土を床とし、床面からは、柱穴が 3 個、住居の北西隅で土坑が 1 基確認され、周溝は壁穴南東隅から東辺以外で確認した。SI6 壁穴状遺構は、B 区中央に位置し、平面形が 2.9m 以上 × 3.9m の隅丸方形を呈する。地山を床として、床面からは、柱穴 1 個、ピット 1 個が確認された。

A 区・B 区で検出した壁穴住居跡・壁穴状遺構は、平面形が 4m 四方に満たないものが多く認められた。これらは、周溝の有無や床面構造等で相違点が認められるものの、住居の規模・出土遺物の年代等の特徴が類似しており、調査区内での位置関係からみても同時存在していた可能性が想定される。

第 20 表 石垣遺跡 平安時代 壁穴住居跡・壁穴状遺構 遺構観察表

遺構名	立地	調査区	周溝 (m) 長軸×短軸	荷重荷高 (cm)	平面形	方向	床面	施設			出土遺物
								カマド	溝渠	その他	
SI1 壁穴状遺構	平地部	A 区	3.2×2.9	6	隅丸方形	西辺 : 5°~20° ×	地山・掘方埋土	-	あり 壁穴3個、ピット3個	なし	
SI2 壁穴状遺構	平地部	A 区	3.9×3.8	3	隅丸方形	西辺 : 10°~40° ×	地山・掘方埋土	-	なし	壁穴3個、ピット3個	鍍金土器、土師器
SI3 壁穴状遺構	平地部	A 区	2.8×2.5	10	隅丸方形	西辺 : 5°~20° ×	掘方埋土	-	あり 壁穴3個、土坑1個	なし	
SI4 壁穴住居跡	平地部	B 区	2.4×3.2	12	隅丸方形	西辺 : 5°~12° ×	地山・掘方埋土	東壁	なし	壁穴跡3個、ピット3個、土坑2基	土師器、瓦敷器
SI5 壁穴住居跡	平地部	B 区	4.1×2.36±1	10	隅丸方形	東北	地山	南壁	なし	壁穴跡4個	土師器、瓦敷器
SI6 壁穴状遺構	平地部	B 区	3.9×2.36±1	10	隅丸方形	東北	地山	-	なし	壁穴跡3個、ピット1個	土師器、瓦敷器
SI7 壁穴住居跡	平地部	B 区	5.1×2.36±1	9	隅丸方形	東北	地山	南壁	あり	壁穴3個、ピット3個、土坑4基	土師器、瓦敷器

## 【SK28 土坑】

SK28 土坑は、平面形が 2.9m × 1.17m 隅丸長方形を呈する。深さ 22cm、皿状の断面形を呈し、堆積土は人為堆積である。土坑は、古墳時代前期の SI9 の廃絶後の平坦面に掘り込まれ、土器が集中的に廃棄された状態で確認された。遺物は、土器類・須恵器片が合計で 278 点出土し、うち 250 点が坏類であり、第 122~125 図に図示した。坏には、内面と外面に煤が付着し、器面が被熱をうけ部分的に剥落したもののが 17 点確認され、これらは灯明皿として利用されたと考えられる（第 122 図 1・2・5~17・19・22）。また坏の胴部に墨書きしたものが 2 点、ヘラ描きしたものが 1 点出土している。墨書き土器に記されている文字は「田」（第 122 図 4）、「人」（第 122 図 5）である。このように、土器が集中的に廃棄された遺構例としては、県南地城では石垣遺跡の北側にある涌沢遺跡（宮城県教育委員会 2012.）、や藏王町東山遺跡（宮城県教育委員会 1981）などが挙げられる（註 6）。

## 【石垣遺跡における平安時代集落の様相】

今回確認した平安時代の遺構の配置状況をみてみると、A 区中央から B 区南側へ壁穴住居跡・壁穴状遺構、B 区南側から SK28 が確認されている（第 136 図）。これらの遺物からは、9 世紀後半代のほぼ同じ年代幅に収まることから、壁穴住居跡と壁穴状遺構、土坑が同時期に存在した可能性が高いと考えられる。9 世紀後半には、集落が石垣遺跡の調査区の広い範囲で展開したことが想定される。今後は、石垣遺跡の周辺で近年行われた調査成果を踏まえた上で、集落の様相を検討する必要がある。

SK28 は、土器が一括して廃棄された土坑である。類例には、山元町涌沢遺跡や藏王町東山遺跡がある。今回の調査では、同時期の遺構が多数発見されたわけではないため、SK28 の位置付けについては、今後の調査事例の増加を待って検討することとしたい。



第137図 石垣遺跡 平安時代の遺構

#### (4) 近世の遺構（第137図）

A・B区において確認した近世の遺構は、掘立柱建物跡37棟（SB1～37）、柱穴列跡4条（SA1～4）、土坑2基（SK6・11）、井戸跡1基（SE1）である。これらは出土遺物が少量で、かつ小破片が多く詳細な時期を求めるには難しい。そこで柱穴の平面形状や堆積土や各遺構との重複関係、隣接する場所遺跡での調査事例から総合的に考えた結果、これらは近世を主体とするものと想定した。

#### 【掘立柱建物跡】

掘立柱建物跡は、A区の標高26～28mの平坦面とB区の標高29～30mの平坦面で確認され、このうちA区中央（SB16～24）とB区北側（SB25～33）で建物跡が密集した状況で検出された。また、A区南端とB区南側では建物跡が確認されなかった。

検出した37棟の建物のうち、その身舎の規模の内訳は、5間×2間が1棟（SB34）、5間×1間が2棟（SB20・28）、4間×1間が1棟（SB25）、3間×2間が2棟（SB14・16）、3間×1間が5棟（SB1・7・23・29・31）、2間×2間が3棟（SB12・15・32）、2間×1間が13棟（SB6・8～11・13・18・19・22・30・33・35・37）、1間×1間が1棟（SB24）で、建物が調査区外に延びているため規模不明なものが9棟である。張出の付く建物は1棟（SB14）である。建物の面積については、規模不明のものを除いて、張出のある建物のSB14が28.8m<sup>2</sup>、その他は12.25～71.44m<sup>2</sup>で12～25m<sup>2</sup>前後のものが多い。柱掘方の規模は、長軸20～40cm前後の円形・楕円形を呈するものが主体である。桁行間の寸法は、0.9～4.2mとばらつきがあるが、2m前後のものが多い。

掘立柱建物跡は、A区中央とB区北側で密集した状況で確認されており、他の遺構の重複関係や建物どうしの重なり、その位置関係から、同時共存が不可能なものを考慮すると、建物は、A区中央で6～10時期、B区北側で7・8時期の建て替えが想定された。建物の方向は、大きく分けると、建物の東辺・西辺が真北に対して①西に傾くもの（N-8°～52°～W）、②真北・ほぼ真北のもの（N-5°～W～N-5°～E）、③東に傾くもの（N-6°～20°～E）がある。これらの方向には、ばらつきがみられ、規則性が認められなかつた。

第21表 石垣遺跡 挖立柱建物跡 観察表

遺構 No.	建物の数 桁行 梁行	柱方向	平面規模（m）		身舎面積（m <sup>2</sup> ）	建物傾斜 角度 （真北基準）	備考 【他の遺構関係はなし】
			桁行	梁行			
SB-1	3	1	東西	2.2	4.3	33.1	西北
SB-2	2	13.3	—	5.8	5.6	29.63±上	西北
SB-3	1	13.3	—	4.2	1.9	8.43±上	東北
SB-4	2	—	東西	4.0	—	—	西北
SB-5	13.3	2	—	4.7	4.6	21.43±上	西北
SB-6	2	1	東西	4.7	4.3	20.2	東北
SB-7	3	1	東西	6.7	3.8	25.5	東北
SB-8	2	—	南北	6.3	4.3	26.7	西北
SB-9	2	1	南北	3.5	4.1	22.6	西北
SB-10	2	1	南北	5.2	4.6	33.9	西北
SB-11	2	1	—	5.6	5.7	31.9	東北
SB-12	2	—	東西	4.5	4.2	18.9	東北
SB-13	2	1	—	5.0	5.5	27.5	東北
SB-14	(1)±2	2	東西	6.4	4.5	29.65(28.8)	東北 壁15より断。西より1間の張出が付く。
SB-15	2	2	東西	4.8	4.5	22.7	東北
SB-16	2	2	南北	9.4	7.6	71.4	南北
SB-17	13.3	—	—	2.5	—	—	東北
SB-18	2	1	東西	4.1	3.3	13.9	西北
SB-19	2	1	東西	5.6	5.5	30.8	東北
SB-20	5	1	東西	13.1	3.9	51.1	西北
SB-21	2	13.3	—	3.8	2.7	9.23±上	西北
SB-22	2	1	東西	5.0	4.2	21.0	東北
SB-23	3	1	東西	6.2	3.8	23.6	西北
SB-24	1	1	—	3.6	3.6	13.0	西北
SB-25	4	1	東西	7.4	4.3	31.8	SB29より断。
SB-26	13.3	1	東西	6.9	5.6	34.03±上	真北
SB-27	3	—	—	3.8	—	—	SB31より断。
SB-28	5	1	東西	7.7	2.5	19.2	西北
SB-29	2	1	東西	4.5	3.5	15.8	SB28・30・31・33より断。
SB-30	2	1	—	3.5	3.5	12.3	西北 SB28・29・31・32より断。
SB-31	3	1	南北	5.3	3.5	18.6	西北 SB27・29・32より断。
SB-32	2	2	—	4.6	3.7	17.0	西北 SB30より断。
SB-33	2	1	東西	3.8	3.2	12.5	東北 SB32より断。
SB-34	5	2	東西	12.4	5.3	65.7	東北
SB-35	2	1	東西	5.3	4.7	24.9	東北
SB-36	13.3	1	東西	3.7	2.2	8.13±上	南北
SB-37	2	1	東西	3.9	2.6	14.0	東北

建物間数のうち、( )内の直角は他の間数を示す。番号(イニシャル)は、同じ建物を示す。

※平面規模の値は身舎の面積を示す。○表示は不定面。中括弧の記述は、(番号)～(番号)～(番号)を示す。

また建物の規模には、さまざまなものがあり、その中でも大きいものは中心的な建物（主屋）であったと考えられる。掘立柱建物跡は、ある範囲で繰り返し建て替えが行われてきたことから、長期間存在した可能性が想定される。

### 【柱穴列跡】

柱穴列跡は、A・B区で4条確認されており、柱掘方の規模が長軸21~42cm前後の円形・梢円形を呈するものが主体である。桁行間の寸法は、1.0~2.8mであり、1.5m前後のものが多い。SA1は、A区北側に位置し、東西方向に延びる3間の柱穴列で、総長が3.5mである。SA2は、A区北側に位置し、東西方向に延びる2間の柱穴列で、総長が3.0mである。SA3は、A区南西側に位置し、南北方向に延びる5間の柱穴列で、総長が11.9mである。SA4は、B区北西側に位置し、南北方向に延びる5間の柱穴列で、総長が10.0mである。これらは、SA1・2が規模2~3間で桁行総長が3m程度、SA3・4が規模5間で桁行総長が10~12mであり、それぞれ規模が類似している。調査区内にある遺構とその位置関係からみると、柱穴列跡は、調査区の北端と西端で確認されている。これらは、平面形や堆積土の状況、列の方向が堅穴住居跡や堅穴状遺構よりも掘立柱建物跡に類似することから、建物跡に関連し、集落を北端と西端で区画する機能を果たしたものと想定される。

### 【土坑】

土坑は2基（SK6・11）が確認されており、いずれも掘立柱建物跡より新しい。これらは、遺構の重なり、位置関係から近世の建物跡と関連性があると考えられる。この他、今回の調査では、時期不明の土坑が多数確認されているが、これらと形状や堆積状況が類似する土坑もあり、この中に近世の建物跡と関連する土坑が存在する可能性も想定される。

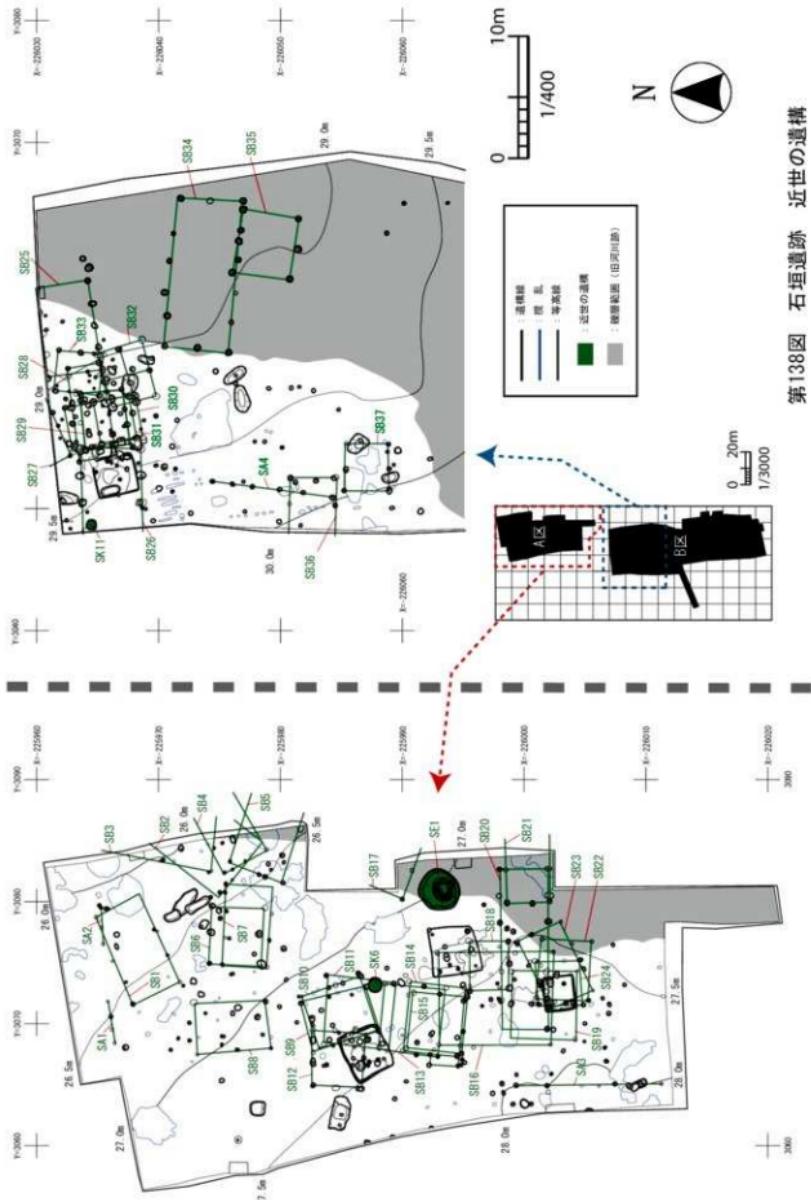
### 【井戸跡】

A区中央の東側から石組の井戸跡が1基確認された。遺物は確認されていないため詳細な時期については不明であるが、調査区内にある遺構とその位置関係から考えると、堅穴住居跡や堅穴状遺構に伴うよりも、掘立柱建物跡に関連するものと想定される。

### 【石垣遺跡における近世の集落の様相】

今回確認した近世の遺構は、A区からB区北側の範囲に分布し、A区中央とB区北側で建物が密集して確認された。掘立柱建物跡は、建物の方向にばらつきがみられ、規則性が認められなかつたものの、建物の重なりからA区南側で6~10時期、B区北側で7・8時期の建て替えが想定され、集落が長期間存在した可能性が想定される。また、建物の密集する範囲では、周囲で確認された建物よりも規模の大きいものが多い。のことから、これらの建物跡が主屋となり、その周辺に付属施設が建てられ、屋敷を構成していたものと考えられる。柱穴列跡については、平面形や堆積土の状況が掘立柱建物跡と類似することから、掘立柱建物跡に関連するための柱列であると想定される。機能については、建物跡の密集する範囲ではなく、建物分布範囲の外側で柱穴列が確認されていること、柱穴列の軸と掘立柱建物跡の軸とが類似する点から、集落の北側と西側を区画するものと考えられる。この他、土坑と井戸跡については、遺構の位置関係などから建物と関連した遺構であると思われる。特に今回の石垣遺跡の調査では、井戸跡が1基しか確認されなかった。調査区外に井戸跡が存在する可能性もあるが、周辺にある建物跡が幾度となく建て替えられている状況から判断すると、井戸跡は長期間使用された可能性がある。

今回確認された石垣遺跡の近世集落の様相については、出土遺物が少なく、建物跡が調査区外の東西に延びる可能性があることもあり、不明な点も多いことから、今後の周辺の調査事例等の増加を待って検討することとしたい。



第138図 石垣遺跡 近世の遺構

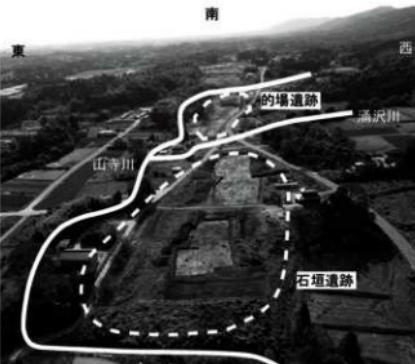
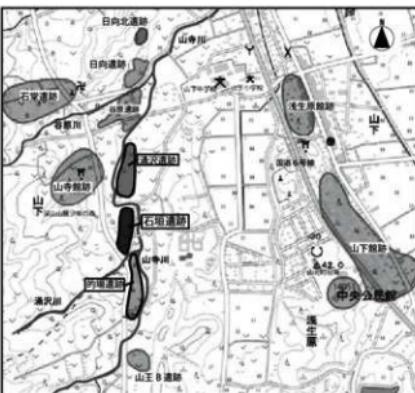
### (5) 石垣遺跡周辺の集落の様相について

石垣遺跡は、阿武隈山地の東側を南北に流れる山寺川西岸及び涌沢川北岸の平坦面に立地する。石垣遺跡周辺には、山寺川を挟んだ北側に涌沢遺跡、涌沢川を挟んだ南側に的場遺跡が隣接しており（第139図）、それぞれ常磐自動車道建設に伴う発掘調査が県教委・町教委により実施されている。

的場遺跡は、平成23・25年度に町教委により調査が実施され、縄文時代前期の土坑群、古墳時代前期の集落（堅穴住居跡・溝跡・土坑）、平安時代（9世紀後半頃）の集落（堅穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・焼成遺構）、近世を主体とする屋敷跡が検出されている（山田ほか2014）。涌沢遺跡は、県教委により平成24年度に調査が実施され、平安時代前半頃の堅穴住居跡や土器廃棄土坑、鍛冶関連遺構などが検出されており、「田人」と墨書きされた土器や八稜鏡、製鉄関連遺物などが出土している（宮城県考古学会編2012・初鹿野2013）。

的場遺跡の古墳時代前期・平安時代の集落から出土した遺物の年代は、今回の石垣遺跡で検出した同時期の遺構から出土した遺物とほぼ同様の時代幅におさまる、堅穴住居跡の規模や特徴等についても共通性が認められた。また、近世を主体とする掘立柱建物跡についても、柱掘方の規模や柱寸法の面で類似している。一方、涌沢遺跡についても、確認された平安時代の堅穴住居跡は小型ものが多く、カマドが付設されない住居が確認されるなど石垣遺跡の様相と類似する（註7）。また、石垣遺跡のSK28で出土した土器2点に書かれた墨書き（「田」・「人」）は、涌沢遺跡土器廃棄土坑から出土した土器の墨書き（「田人」）と同じ内容の文字で、遺物の年代についてもほぼ同様の年代幅におさまる。

以上のことから石垣遺跡・涌沢遺跡・的場遺跡は、立地的にはそれぞれ川に隔てられているものの、的場遺跡は古墳時代から近世、涌沢遺跡は平安時代において、石垣遺跡とほぼ一連の集落であったと推定される（註8）。



第139図 石垣遺跡と周辺の遺跡

#### 4.まとめ

石垣遺跡は、宮城県南東部の阿武隈山地から東に延びる丘陵状に位置する。遺跡の時期は、縄文時代、古墳時代、平安時代、近世にわたる。今回の調査では、堅穴住居跡5軒、堅穴状遺構4軒、掘立柱建物跡37棟、柱穴列跡4条、土坑32基、井戸跡1基、ピット256個を検出し、縄文土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、石器が出土した。以下、各時代の遺構について要点をまとめる。

- ① 縄文時代の遺構には、土坑2基があり、その形状から陥り穴と考えられる。出土遺物から時期がわかるものは、縄文時代中期後葉と想定される。
- ② 古墳時代の遺構には、堅穴住居跡2棟があり、出土遺物から古墳時代前期のものと考えられる。これらは、涌沢川北側のB区南端から検出された。
- ③ 平安時代の遺構には、堅穴住居跡3軒、堅穴状遺構4軒、土坑1基がある。9世紀後半の遺物が出土し、これらは同じ年代幅におさまることから、同時期に遺構が共存した可能性が考えられる。SK28は、遺物が一括廃棄された状態で出土し、石垣遺跡の北側に隣接する湧沢遺跡や藏王町東山遺跡で類似したものが確認されている。
- ④ 近世の遺構には、掘立柱建物跡37棟、柱穴列跡4条、土坑3基、井戸跡1基、ピット多数がある。建物跡はA区からB区北側までの範囲に分布し、特にA区中央とB区北側で建物跡が密集する状況が確認された。建物は幾度も建て替えが行われ、集落が長期間存続していた可能性が考えられる。建物が調査区外の東西に延びるもののが認められるものの、現段階では、北側と西側を柱穴列跡で区画し、1基の井戸跡を使用していたものと考えられる。
- ⑤ 石垣遺跡の周辺には、北に涌沢遺跡、南に的場遺跡がある。石垣遺跡は、湧沢遺跡とほぼ同じ年代幅をもつ平安時代の堅穴住居跡と土器廃棄土坑が確認され、的場遺跡とほぼ同じ年代幅をもつ堅穴住居跡と柱掘方の規模や柱寸法に共通性のある掘立柱建物跡が認められた。各遺跡は山寺川と涌沢川によって隔てられるものの、涌沢遺跡が平安時代、的場遺跡が古墳時代から近世において石垣遺跡と一連の集落であったと推定される。
- ⑥ この他、今回の調査では、時期を明確にできなかった遺構が多数残されている。これらは縄文時代、古墳時代から近世にかけてのいずれかに属する遺構であると考えられる。

#### 註

- 1) 宮城県内において、平安時代のロクロ成形の内黒処理されていない土師器について、「赤燒土器」・「須恵器土器」等の名称で呼ばれる場合がある（桑原 1976・小川井 1984）。本稿では、原則として内黒処理・非内黒処理のものすべてを土師器として分類したが、両者を区別する際は「赤燒土器」の名称を使用することとした。
- 2) この他、理至郡を除く県南地域では、七ヶ宿町小梁川遺跡（真山ほか1985）、川崎町二本松遺跡（小山田 1985）、村田町梅ヶ久保遺跡（佐藤 1986）、藏王町東山遺跡土器群（真山 1981）、十郎田遺跡（鈴木 2011）、白石市老名遺跡第1・2号住居跡（真山 1981）などでSK28出土土師器と類似する土器群が確認されている。
- 3) 陶器類器の产地・年代については、佐藤洋平（仙台市教育委員会）にご教示いただいた。
- 4) 本報告書では、床面や壁面周囲でがくやカドなどの痕跡が確認されなかつたものについてには「堅穴状遺構」とした。SII-3・6堅穴状遺構では、調査時に堆積量が2~10cmという既往状況であったものの、床面からカマドや炉とされる遺構が確認されなかつた。
- 5) 今回調査した石垣遺跡の南に位置する的場遺跡からも古墳時代前期の堅穴住居跡が確認された。出土した遺物が石垣遺跡のものと同時期と考えられることから、的場遺跡の北側の堅穴住居跡と石垣遺跡の堅穴住居跡は、涌沢川を挟み、近い位置で共存していた可能性が考えられる。
- 6) 山寺川を挟み、石垣遺跡の北に位置する涌沢遺跡では、出土した土器の特徴が類似し、同時期と考えられる土器廃棄土坑が確認されている。遺構からは「田人」と墨書きされた土器が出土しており（初鹿野 2013）、石垣遺跡の「田」、「人」と墨書きされた土器と内容に共通する部分が認められる。このことから当該期の石垣遺跡と隣接する涌沢遺跡は、関連性があつたと考えられる。
- 7) 湧沢遺跡で検出された堅穴住居跡や他の遺構の特徴、出土遺物の年代についてでは、発掘調査を担当した初鹿野博之氏（宮城県教育委員会）にご教示いただいた。なお、涌沢遺跡の調査成果については、発掘調査を担当した初鹿野博之氏（宮城県教育委員会）にご教示いただいた。石垣遺跡の正式報告は未だな状況であるが、報告書作成中のため正式な報告書が刊行されていない（平成26年3月末現在）ことから、石垣遺跡周辺の集落の様相については、涌沢遺跡の正式報告を待って再度検討することとした。
- 8) 石垣遺跡周辺では、この他、石垣遺跡の北側に位置する谷原遺跡・日向遺跡・日向北遺跡において発掘調査（常磐道関連調査）が実施されている（宮城県考古学会 2010・2012）。このうち、谷原・日向遺跡では奈良～平安時代にかけての集落が確認されており、これらの遺跡についても、石垣遺跡一帯の集落と関連性の高い集落である可能性が考えられる。

## 引用・参考文献

- 相原淳一ほか 1988『大淀川・小梁川遺跡』宮城県文化財調査報告書第 126  
青山博樹ほか 2000「宮城県黒山元町合戦原古墳群の測量調査」『宮城考古学』2  
青山博樹 2010「古墳時代前期の土器編年・仙台古野とその周辺」『北杜・辻秀人選著記念論集』  
青山博樹 2011「土器編年の編年」『東北』『古墳時代の考古学 I 古墳時代史の枠組み』同成社  
天野頼頃 1994「下草古墳跡」『下草古墳跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 166 集  
天野頼頃 1996「下草古墳跡」『下草古墳跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 169 集  
井上雅恵 1997「陸奥における 10・11 世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第 7 号  
岩見和泰・佐藤憲幸 1991「合戰原遺跡」『合戰原遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 140 集  
氏家和典 1957「東北土器の型式分類とその編年」『歴史』14  
岡田茂弘・桑原滋郎 1974「多賀城周辺における古代环形土器の変遷」『研究紀要 I』宮城県多賀城跡調査研究所  
小山正忠・竹原秀雄編 1973『新版標準土器帖』2010 年版  
小山正田 1985「二本松遺跡」河原田道跡・宮城県文化財調査報告書第 112 集  
加藤道男 1989「宮城県における土器研究の現状」『考古学論叢』II  
塙田忍 1995「孤塚遺跡」山元町文化財調査報告書  
桑原滋郎 1976「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』東北考古学会  
小井川和夫 1984「いわゆる赤焼土器について」『東北歴史資料館研究紀要』第 10 卷  
佐久間光平 1995「佐治城跡—近世武家屋敷と古代の集落跡」迫田文化財調査報告書第 2 集  
佐々久・志間泰治・氏家和典 1971「一戸沢井横穴古墳群発掘調査報告書」『山元町誌』  
佐藤裕裕 1986「梅ヶ久保遺跡」『東北横穴自動車道跡調査報告書 I』宮城県文化財調査報告書第 120 集  
佐藤作 2009「宮城県における庶民向け陶磁器の生産と流通」『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通』関東・東北・北海道編  
白鳥良一 1980「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要 VIII』宮城県多賀城跡調査研究所  
白鳥良一 1982「土器」『多賀城跡政府跡・本丸文庫』宮城県多賀城跡調査研究所  
紫桃正隆 1974『史料・仙台領内古墳・館』第四巻  
志間泰治 1956「宮城県亘理郡における考古学上の遺跡」『宮城県の地理と歴史』I pp. 209-216  
志間泰治 1975「豆原の古墳」  
志間泰治 2007「歴史を振り起こす」  
鈴木朋子 2002「堤の内遺跡」豆理町文化財調査報告書第 8 集  
鈴木朋子・千葉直樹 2006「国史跡三十三間堂官衙遺跡」豆理町文化財調査報告書第 11 集  
鈴木朋子 2011「十郎田遺跡 I」藏王町文化財調査報告書第 13 集  
開拓社 2004「北経塚遺跡」山元町文化財調査報告書第 3 集  
田嶋明人 2012「孤塚遺跡立場の広城編年—東日本城を対象とした検討(その 5)ー」『東生』第 1 号  
千葉正康 1993「孤塚遺跡」『孤塚遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 157 集  
次山 淳 1992「塙式土器の変遷とその位置づけ」『研究室—埋蔵文化財研究会 15 周年記念論文集—I』  
辻秀人 1994「東北南部の古墳出現期の様相」『日本の古墳の出現』山川出版社  
辻秀人 1995「東北南部における古墳出現期の土器編年」—その 2—『東北学院大学論集—歴史学・地理学—』第 27 号  
辻秀人 2001「東北の弥生土器と土師器」『アジア文化史研究』第 1 号  
辻秀人 2008「大塚原古墳の研究」『歴史と文化』第 43 号 東北学院大学論集  
辻 秀人編 2007『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成 15-18 年度科学研究費補助金(基盤研究 B)研究成果報告書  
東北中世考古学会編 2001『東北中世考古学叢書 2 振立と窓穴 中世遺構論の課題』高志書院  
東北陶磁文化館編 1987『東北の近世陶磁』  
丹羽 麟 1983「前川遺跡」『朽木橋横穴古墳群・前川遺跡』宮城県文化財調査報告書第 96 集  
丹羽 麟 1985「今熊野遺跡 I・古代編」『今熊野遺跡、一本松遺跡、馬越石塚』宮城県文化財調査報告書第 104 集  
初鹿野博之・山口淳・千葉直樹・大坂拓 2012「西石山原遺跡ほか常磐自動車道建設関連遺跡調査報告書 I—』宮城県文化財調査報告書第 230 集  
初鹿野博之 2013「宮城県山元町内手遺跡・上官前北遺跡」『第 39 回古代城壁官衙遺跡検討会資料集』  
初鹿野博之 2013「涌浦遺跡」『发掘された日本列島 2013 新発見考古学速報』文化庁  
引地弘行 2002「館の内遺跡」『名生館跡遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 188 集  
平塚幸人 2001「仙台平野における小丸型瓦跡について」仙台市立茨城遺跡保存館研究報告』4  
福島考古学会中世近世会編 2000「福島県考古学会中世近世会平成 12 年度研究セミナー 東北地方南部における中世集落の諸問題」  
藤田至編・新庄經元精 1985「小堀川遺跡」『レ・前ダム開削遺跡発掘調査報告書 I』宮城県文化財調査報告書第 107 集  
宮城県考古学会編 2010「平成 22 年度官城県跡調査成果発表会要旨」  
宮城県考古学会編 2011「平成 23 年度官城県跡調査成果発表会要旨」  
宮城県考古学会編 2012「平成 24 年度官城県跡調査成果発表会要旨」  
宮城県考古学会編 2013「平成 25 年度官城県跡調査成果発表会要旨」  
宮城県企画部土地対策課編 1988「土地分類基本調査 角田」  
宮城県教育委員会 1988「大淀川・小梁川・七ヶ宿ダム開通跡調査報告書 IV」宮城県文化財調査報告書第 126 集  
村田晃一 1992「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』  
村田晃一 1994「土器からみた官衙の終末」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』  
村田晃一 1995「宮城城における 10 世紀前後の土器」『福島考古』第 36 号  
森幸彦 2008「大木 9-10 式土器」『縄文土器』  
柳澤和明ほか 1992「多賀城跡第 61 次調査」宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991  
柳澤和明 1993「多賀城跡第 62 次調査」宮城県多賀城跡調査研究所年報 1992  
柳澤和明 1994「東北地方の施釉陶器」山元町文化財調査研究一律の土器様式の西・東 3 施釉陶器一』  
山田隆博 2008「企画展復元 五稟郡の古墳時代」山元町歴史民俗資料館  
山田隆博・村上裕一・山口淳 2010「北経塚遺跡」山元町文化財調査報告書第 4 集  
山田隆博・藤田祐・佐伯奈弓 2013「北経塚遺跡」山元町文化財調査報告書第 5 集  
山田隆博・藤田祐・佐伯奈弓 2014「の郷遺跡」山元町文化財調査報告書第 6 集  
山元町史編纂委員会編 1971「山元町誌」  
山元町史編纂委員会編 1986「中島貝塚」『山元町誌 二巻』  
丘町教育委員会編 1997「娘の内遺跡」豆理町文化財調査報告書第 7 集



# 報告書抄録

ふりがな	いしがきいせき							
書名	石垣遺跡							
副書名	常磐自動車道(県境~山元間)建設工事に係る発掘調査報告書II							
卷次								
シリーズ名	山元町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第7集							
編著者名	山田隆博・藤田祐							
編集機関	山元町教育委員会							
所在地	〒989-2203 宮城県亘理郡山元町浅生原字日向 12-1 電話 0223-37-5116							
発行年月日	平成26(2014)年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号 遺跡番号	位置 北緯 度分秒	位置 東経 度分秒	調査期間 2011年9月5日～11月1日	調査面積 4,750 m <sup>2</sup>	調査原因 常磐自動車道(県境~山元間)建設工事に伴う事前調査
いしがき 石垣遺跡	宮城県 亘理郡 山元町 山守字 石垣	043621	14069	37 度 57 分 50 秒	140 度 52 分 6 秒			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
的場遺跡	散布地	縄文時代中期 (大木9式)		土坑		縄文土器	土坑2基	
	集落	古墳時代前期		竪穴住居跡		土師器	竪穴住居跡2軒	
	集落	平安時代 (9世紀後半)		竪穴住居跡、 土坑		土師器、須恵器 墨書き土器	竪穴住居跡3軒、竪穴状遺構4 軒、土坑1基	
	屋敷跡	近世		掘立柱建物跡、土坑、 溝跡、井戸跡、ビット		—	掘立柱建物跡37棟、柱穴跡4条、土坑3基、井戸跡1基、 ビット多数	
要約	<p>石垣遺跡は、亘理郡山元町山守字石垣に所在し、山元町役場の西約800mに位置する。遺跡は、奥武隈山地から東に延びる丘陵の山寺川西側に広がる標高26~32mの中位段丘に立地する。遺跡の範囲は、東西60m、南北200mほどの広がりをもつ。</p> <p>調査の結果、竪穴住居跡5軒、竪穴状遺構4軒、掘立柱建物跡37棟、柱穴跡4条、土坑32基、井戸跡1基、ビット256個を検出した。出土遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器などである。</p> <p>縄文時代の遺構には、土坑2基があり、その形状から陥穴と考えられる。出土遺物から時期が付くものは、縄文時代中期後葉と想定される。</p> <p>古墳時代の遺構には、竪穴住居跡2棟があり、出土遺物から古墳時代前期のものと考えられる。</p> <p>平安時代の遺構には、竪穴住居跡3軒、竪穴状遺構4軒、土坑1基がある。これらの遺構からは9世紀後半代の遺物が出土し、これらは同じ年代頃におさまることから、同時期に遺構が共存した可能性が考えられる。特にSK2では、土師器・須恵器が一部発見された状態で出土し、中には墨書き土器(「田」・「人」)も出土した。</p> <p>近世の遺構には、掘立柱建物跡37棟、柱穴跡4条、土坑3基、井戸跡1基、ビット多数がある。建物跡はA区からB区北側までの範囲に分布し、特にA区中央とB区北側で建物跡が密集する状況が確認された。建物は複数も建て替えが行われ、屋敷の長期間存続していた可能性が考えられる。</p> <p>石垣遺跡の周辺には、北に涌沢跡、南に的場遺跡がある。石垣遺跡は、涌沢跡とほぼ同じ年代幅をもつ平安時代の竪穴住居跡と土器窯跡が確認され、的場遺跡とほぼ同じ7年代幅をもつ竪穴住居跡と柱掘立方の規模や性質から共通性のある掘立柱建物跡が認められた。各遺跡は山寺川と涌沢川によって隔てられるものの、涌沢跡が平安時代、的場遺跡が古墳時代から近世において石垣遺跡と一連の集落であったと推定される。</p>							

---

山元町文化財調査報告書第7集

## 石 壕 遺 跡

—宮城自動車道（県境～山元町）建設工事に伴る発掘調査報告書Ⅱ—

平成26年3月28日発行

発 行 山 元 町 教 育 委 員 会  
宮城県亘理郡山元町浅生原字日向121  
TEL0223-375116/FAX0223-379119

印 刷 株式会社 東 北 プ リ ン ト  
宮城県仙台市青葉区立町24-24

---